

第V部 第I・II次世界大戦と社会主義政党  
付 アメリカ経済とケインズ理論

- (1) 第一次世界大戦から第二次世界大戦へ
  - 1) 第一次世界大戦の諸帰結
  - 2) 管理資本主義に入った社会主義者達
  - 3) 第二次世界大戦と社会主義政党の将来
  
- (2) 第二次世界大戦中のアメリカからの展望雑録
  
- (3) 大戦直後の世界情勢と社会主義諸政党進出の様々な様相
  
- (4) (3)の補足的パセイジ
  
- (5) アメリカの事情、ワシントン経済学とケインジアン・セオリー
  
- (6) スターリンとフランス・イギリス・アメリカのロシア問題

## (1) 第一次世界大戦から第二次世界大戦へ

### 摘要

第一次世界大戦をとおして、イギリスとドイツの社会主義諸政党は大戦の衝撃を凌ぐを得た。諸教義、究極の諸ゴール、党の諸機構、リーダー達の諸類型、といったものは基本的には変化がなかった。その上、増大した支持者と自己負荷された諸責任があった。イギリスの場合、労働党が着実に管理に当たり得る実力を持つべく成長をみた、しかしその一方ドイツの場合、社会民主党は——ブルジョワ陣営の失策の所産でもあって——戦後問題に遭遇することになった。・・・権力の降誕はしかしながら経済的エンジンが資本主義の路線でしか動かないことを意味するような、そうした一個不可能の状態をもたらすものであった、その上ロシアと組む共産主義者の諸グループから発生したもつれ込みもあった。・・・最左翼の少数派はロシアの公式的カルトによって指導されていたけれども、ドイツの社会主義者の他の多数派は連立によって管理諸政党の中樞入りを果たしたのである。・・・社会主義の古典的画期はイデオロギーにおいてもプログラムにおいても消し去られた。・・・ワイマール共和制の中で賠償とハイパーインフレーションの下で労働立法と極めて控え目な社会化が図られた。・・・だが経済の回復は外国からの資本流入によってもたらされたのであり、党のメンバー達は地方政府や労働組合の諸々の席に居座って充分なものがあった。・・・しかしながら財政的並びに通貨上の諸困難が表面化し始め、外国資本の流入が止まるに及んで周知の破局が発生し、それが指導者達の最も求心的な位置を掘り崩すことになり、尚ゼネラルストライキを招来するに足る力をもちながらも、ナチスにより完敗させられ、リーダー達の手勢は一ダースの信奉者にも足りない程に凋落した。・・・第二次大戦となり、社会主義諸政党の将来はその結果次第となった。もしロシアが主要勝利者にでもなると、混沌が周辺諸国のボルシェヴィキ化を確実ならしめるだろう。しかし結果の如何にかかわらず、社会主義へ向けての一つの長い歩幅が採られ、諸々の事物と魂における成熟が戦時の経済統制と官僚機構の立ち上げを通して加速されることになろう。・・・その他  
(編者)

## V—(1)

### 第Ⅰ次世界大戦から第Ⅱ次世界大戦へ

#### 1) 第Ⅰ次世界大戦の諸帰結

ロシアを例外として、戦前の社会主義諸政党は、どこにおいても、第Ⅰ次世界大戦の衝撃を生き延びた。しばしの間、彼等は権力の座への一大接近を経験しさえした。諸教義、諸スローガン、究極の諸ゴール、諸構造、官僚制の諸機構、リーダー達とその諸類型、これらは第Ⅰ次世界大戦が解きえない諸問題の巨塊のさなかに身を置くよう燃え上がった時の様相と尚同じ——少なくとも基本的には——であった。これは誰もが期待して然るべき状態であり、更にもし大戦の影響がその世界に関わったことの全てであったとすると、以前からの諸趨勢が再度とられることはある筈がない、となす理由は実際には何の根拠もなかったということになり——恐らくいくらかはもっと速いペースで進むであろうとみられてよかった。水面下にあってずっと以前から噴出の契機を集めつつあった——ただ我々の殆どが全くそれに気付いていなかった——諸事実と諸要因を水面上に持ち上げることにより、この大戦は追加的な重要性を獲得するものであった、ということをお明かにする位置に、我々、あるいは我々の幾人かがあるのは、今において他にはない。社会主義の諸政党はブルジョワジー陣営の失策を共有しながらも、自分達の戦後の諸問題への接近を図ったのであるが、そこでは自分達が取り組まなければならないものは依然として尚、旧世界の諸事物であり、更に自分達はそれについては全てを心得ている、という諸仮説の上に立脚するものであった。・・・この態度は後に注意されるであろうファシズムについての最後のカード理論(the last-card theory of fascism)に反映される。・・・そうは言っても今や次のことが明らかである。即ち、我々が第Ⅲ部でそれを定義した社会主義ならばどんなものであろうと戦中戦後の諸条件によって推進せられたものであったけれども、これらの社会主義の特定タイプのもの——それは本質的には平和志向で国際主義的なブルジョワジーの世界の中から育て上げられた——にすぎないものであり、更にオールドスタイルの正統社会主義(とマルクス)によって描き出されるような社会主義の特定タイプのもは——それらの文化的補完体と共に合わさって(together with their cultural complement)——急速に色褪せていくことになった。

前章の終わりのところで指摘しておいたのは、社会主義諸政党は自分達が戦争回避の為なし得た全てのことを彼等の国際組織のメンバーとしてなしたということである。このことをなしたとしてもだが、彼等は真に驚くべき率直さをもって自分達の祖国の大事に向けて結束した。ドイツのマルクス主義者達はためらうところがイギリスの労働黨員よりも少なくさえあった。もとより、全ての交戦国の国民が純粹に防衛戦争を戦っているのだと十分に納得させられていた、ということを中心に止めておかなければならない——全ての戦争は、戦っている国民の眼からすれば防衛的であり、または少なくとも予防的(preventive)であった。・・・社会主義の政治家達の多数派がマルクス主義者の国際主義(Marxian internationalism)を信じていることがあろうとあるまいと、彼等はその宣託(the gospel)に拠ったどんな立場もが単に自分達に追随する者達を失わせるものであることを確かに実感したのである。大衆は先ずは彼等を見据えるのである、そして次に彼等は忠誠を拒絶することになるだろう——そこではプロレタリアには祖国はなく、そして、階級闘争が関わるべき唯一の戦争である(the proletarian has no country and class war is the only war that concerns him)、というマルクス主義の教義は事実上、反撥されたのである。その意味でマルクス主義的構造の死活的支柱の一つが1914年8月に崩れたのである。それは保守陣営でも感得されており、ドイツの保守派は突如としてお世辞に満ちた言葉で社会主義政党に関係し始めた。それは信頼がその古き情熱を尚も保持していたような社会主義陣営の中のその部分においても感じられていた。カウツキー(Kautsky)とハーゼ(Haase)は多数派から離れ(1916年3月)、1917年に独立社会民主党(the Independent Social Democratic Party)を組織した。

今一つの分裂——それはもっと後に起こったのであるが、1914年の諸事件にまで遡って跡付けられよう——はもっと重要である。実質的には日付は更に遡る。公認となった社会主義であるものの左に一層過激な党の存在の余地があったことは、エンゲルスの「平和的諸方法」の宣言(Engel's declaration for "peaceful methods")以降においてさえ、ドイツのケースにあつては、明瞭であった。更にロシア党のロンドン会議(1903年)以来に遡ってさえロシアのケースにあつては、それは明瞭であった。そしてこの種の余地は埋められないままに長期に渡って残されることは決してなかった。様々な根拠に対応して様々なタイプの過激派が——殆どの場合、既存諸党の中には足場をもたない活動派知識人達(actively intellectuals)であったのだが——共産主義の名を社会主義の名よりも選好して採択し

た時である1848年の社会主義をマルクスとエンゲルスが見た光の下で、その公認社会主義(that official socialism)に愛想を尽かすこと多大であり、これを見届けようと始めること多大なものがあったのである。ベーベルの指導力はしばしの間その災禍の日(the evil day)を遅らせることに成功したが、しかしそれは来るべきものであった。更には左翼の突き上げは成長期のゼネレーションの野心を満足させるため不可避であっただけではなく、着実な——見捨てられさえしなければ——権力の座へ向かっての進歩がそのウィング(翼)の存在によって累増的に阻害されつつあるという混じり気なしの災禍でもあったのである。

当然のことながら、戦争問題(the war issue)はグループを統合する方向に大きく歩を踏み出させた。尤も最初には事の十分な意味合いは独立党(the Independents)の継承によって曖昧ならしめられていた。この党と共に賭けられていた(was at stake)全ての事柄は本質的に当面の——信じられている多くのことが戦術的な問題であるにすぎないようなことにおける——意見の差の為であった。第2インターナショナルは死んでいる、そして時は全く異なった諸目的と諸方法を求めて鐘を鳴らしている、との趣旨のレーニンの声明すらもが、その場合、社会主義者達の多数派に対しては、根本的に異なる何物かを持ち込むものではなかった。類似的にドイツにおいてK. リークネヒトとR. ルクセンブルグによって設立されたスパルタクス団(the Spartacus league, founded in Germany by K. Liebknecht and R. Luxemburg)——これは戦争に反対する運動の中で独立党の防衛上の信条の最後の断片を削除し、その上に軍隊と手を組むことを試みていた路線とは大きくかけ離れた道を歩んだのであるが——もまた、戦時統制が取り除かれた後でさえも、古いエルフルト綱領(the old Erfurt program)の文言での主張を超えて進むことはしなかった。・・・独立党の党員の幾ばくかは、推奨できない急進性に低評価をなしつつも、彼等に同感の念をもっていた。・・・リークネヒトにしてもルクセンブルグにしても、いつも多大の非難を蒙っていたが、個々の独立党員との約束の遵守が全くなされなかったわけではなく、多数派等のいくらかのメンバー達との間においてさえそうであった。最後にスイスのツィンメンバルトの大会(the conventions in Switzerland at Zimmenwald)(1915年)とキーンタールの大会(at Kienthal)(1916年)では、そこでの討議が出席者の殆どは一層過激で、しかも滞在していた人達には遠くかけ離れた革命路線に一層傾斜していた、という事実によって当然影響されていたものであったけれども、国際的な接触を確保しようという至極当然の試みの他に

はそれを超えた何事かを彼等自身にもたらずものではなかった。・・・こうした集会をもとうとする願望の中には、特に過激なものは何もなかった。このことは第2インターナショナルの事務局(C. ユイマンズ)がスカンジナビアン社会主義者(Scandinavian Socialist)の示唆に即して活動していたことから証明される。このようにして次の会議が開催される試み(1917年)となったのであるが、その失敗は基本的に連合側が——その時最終段階にあった戦時下の為——必要なパスポートを出すことを拒否したことを理由とする。

我々の分析のこの部分を要約しよう。「共産主義」——その信条が既存の諸社会主義のそれよりも一層過激である点で革命的という意味においてのものであったが——は戦争を通じて諸勢力を結集しつつあったのであり、しかも古い諸政党では決して身につけえなかった多くの新しい諸要素をもった際立てる共産主義諸政党がその出現を確たるものとした。但し社会主義者達のその偉大なる多数派はこの展開の足跡にある容赦のない必然性について留意することはなかったし、留意するべきだと期待されることもあり得なかったのであるが。ただ、この共産主義は一個の純真なるマルキシズム——既存の諸政党により見捨てられつつあるイデオロギー的な靴に足をかけているそれ——への単純な回帰であったかも知れないし、そしてこれらの共産主義諸政党はよく知られている政党政治のメカニズム——このメカニズムによって新左翼グループは登場してくる——に対応した何等かのそうした諸事例であるとみられること以上には興味を惹くものではなかった、と言えるかも知れない。これが実際にはロシア——現代共産主義に対し一個の完全に異なったカラーを与えることによって、診断に更に多大の困難を引き起こしているところのロシア——において展開に都合良きケースとなった、というように見ておくのが理のあるところである。

敗戦に終わったどんな大戦もが社会組織をその根底よりゆさぶり、しかもとりわけ統治グループの地位を脅かすものであるだろう。軍事的敗北の一つの帰結である威信の喪失が彼等の生き残るための最難事の一つである。私はこの法則のどんな例外をも知らない。しかしその逆の命題は定かでない。成功(勝利)が敏速なものでないならば、あるいは統治階層のパフォーマンスと結合して衝撃的で明確なものでないならば、疲弊は、経済的、物理的、それに心理学的の何であれ、戦勝国のケースであってさえも、敗戦国のケースとは本質的に変わらない影響を諸階級の相対的位置に——

社会的グループの全ての他の諸タイプのそれと同様に——もたらすところが充分であろう。第 I 次世界大戦はこのことをよく描き出すものであった。

西部及び中央ヨーロッパの社会主義諸政党の命運に対して、このことは 3 つの事柄を意味した。

第 1 権力の降誕(the Advent of Power)・・・戦前、彼等を責任ある役職から隔離していた長い時間帯は殆ど余幅の無いものに収めこまれた、そしてその道程に立ちほだかっていた多くの障害物は突如として撤去せられた。社会の中央機関の管理は征服されなければならないのではなかった。それは彼等に信託されたのである。このことは次の諸事実からの当然の帰結であった。即ち、社会主義政党は様々な戦時の連携に加わりこそしたが、そうは言っても戦争政治と結びつくことがブルジョワジー諸政党のそれに比して際立って少なかった——だからして不信がもたれるところが遙かに少なかった。もし彼等が戦時中、国民政府を支持することに失敗していたならば、全ての非社会主義者と社会主義者の多くは祖国が危機にあった時に彼等を見捨てた、と感じられたであろう。反対にもし彼等が、他の諸政党がそうであったように、充分に交戦を叫び続けていたならば、不信は彼等の上にも広げられていたであろう。事実そうであったように、彼等は国政に責任を負う資格を有する存在となった。そして内政においても、外交においても、然るべき諸問題を処理することのできる唯一の人々として彼等は出現した。

前者(内政)については、社会主義諸政党だけが、怒っている大衆に対し、与えることが可能であったその範囲の親労働政策(that measure of pro-labor policy)を受け入れさせることができる位置にあった。後者(外交)については、彼等は戦争によって開いている傷口を縫い合わせるための彼等自身の繋がりを唯一活用するものでなければならない——その時はそのようにみられていた——ということであった。どのように彼等はこれを行うべく着手したか、自国内で行われたそれぞれの政策は、そして如何なる成功が彼等の努力に報いたか、我々は尚分析を続けるべきであろう。しかし彼等の活動に付帯した——国際的スケールでの——みるべき程度の成功は直ちに注意を喚起する。

彼等のある一派は第 2 インターナショナルの復活を試みた。他の一派は

——彼等はそうした試みの成算に不信をもち、第2インターナショナルがその古い形態でははっきりと過去のものであることを明らかにしつつも、共産主義インターナショナルの結集には配慮を行わなかった人達であったのだが——彼等自身が掌握する組合をもって社会主義党の労働者国際同盟(**the Workers International Union of the Socialist Parties**) (ウィーン インターナショナル)を設立した。二者の差の性格はインターナショナルへの参加者としてウィーンに差向けられるのが慣例となっていたこの時代の共産黨員——と多少の社会主義者を含めて——は数の上で2人の内1.5人が召喚されていることによって示されるであろう。終わりには全ての社会主義者を収容することを目指した「2つの町の中間の宿屋」(**a half-way house**)を構築するというのがその意図であった。そしてその雰囲気は再生した第2インターナショナルに所属するグループの過激化を期待する傍らで、共産黨員達の抑制を図るところにあった。この願望は我々にとって奇想天外なもの(**chimerical**)のように見えたが、それでも当時としては理に適ったものでなくはなかったのである。従って階級闘争と革命は保持せられるべきであったし、教条の神格化(**enshrined in the credo**)はあったが、その一方で実行上のプログラムは共産黨員と共になされるべきことは何もないということであった。もとより、このことは共産主義者達にとっては受け入れ難いものではあった。しかし第2インターナショナルは、はっきりとそのプログラムの基礎の上に達せられたということを理解させるものであった。

派閥的な諸障害(**the sectional obstacles**)は妥協により、何か18世紀の外交官に信任を与えた時起こるであろうような流儀で除去された。・・・大陸では階級闘争なしには生きることができなかった。他方イギリス人はそれを伴って生活することは不可能だと感じていた。そのように議定文書(**protocal**)のドイツとフランスのテキストでは階級闘争が保持されており、イギリスのテキストでは便宜的で完全には理解できないような遠回しの繁文で置き換えられた。・・・ともかく、それは——達成されたところは乏しいものではあったが——1923年のハンブルグ集会(**the Hamburg convention**)において起草された。戦争は帝国主義者として汚名を着せられ(**stigmatized**)、「反動」(“**reaction**”)に反対する国際行動がぼんやりとではあるが示された。賠償についての調整は通過した。そして労働組合の利益は一日8時間労働制度への賛成と社会立法の国際化(**the internationalization of social legislation**)のゼネラルプランへの賛成の投票によって和解せられた。より一層に深い意味では、その全ては時代の提



起した時事問題への考慮という点では——同時代のブルジョワジー達がより一層の自由貿易と非軍備について解決を図っていることと比較すれば——失敗しており、しかも過去の追い払うべき陰を意味していた。しかしながら、それはその時代では決して無駄ではなかった。そのことは賠償についてのロンドンの合意(1924年)とロカルノ政策(Locarno policy)が——ある程度には鼓舞さえするものであったが——ハンブルグの解決(the Hamburg resolution)によって大きく助けられた、という事実からしても十分に明白である。

第2 一個の不可能な状況・・・マルクスは社会化に対する必要な前提として政治権力の征服を考えていた。これは——そしてマルクスの行論は実際にいつもそれを仮定しているのであるが——好機は資本主義がその道程を走り終えた時、そして私が第Ⅲ部においてそれを取り上げているように、諸事物と諸魂(things and souls)が成熟した時に起こるであろうことを含意している。彼等が考えていた破局は内的諸原因に由来する資本主義の経済的エンジンの破局であるべきであった。ブルジョワジーの政治的破局はこのことに対する単なる随伴部(a mere incident)であった。しかるに今や政治的破局——あるいはそれに近いこと——が起こっており、その傍ら経済過程には成熟に近い状態など未だどこにも存在しなかった。それはもっとも非マルクスの状況(a most unMarxian situation)であった。

書齋での研究者は、もし社会主義諸政党が——諸々の事柄の状態がオフィスのトロイの木馬(the Trojan horse of office)となることを拒絶していることを認知していて——反対の位置に止るならば、そしてブルジョワジー達にもたらされている混乱と窮迫(mess)を払拭することを許したとするならば、諸々の事柄の原因に何があったのだろうかについて思案を巡らせることはあり得よう。恐らくはそれが彼等にとって、社会主義にとって、世界にとって、より良かったことであろう——誰が知っていたか?・・・この主題についての言及のいくらかはドイツのケースについての我々の議論の中で提供されるであろう。・・・しかし、この時代の人々にとっては、彼等の属している国と彼等自身とを同一視する(identify)よう、更に責任の観点からこれを見るよう教育されてきていたのであって、選択の余地などはなかったのである。しかしながら彼等は一個の解きえない問題に直面した。

そこには資本主義的な諸路線においてでない機能を果たせない社会

的、経済的システムがあった。社会主義者達は、それをコントロールし、それを労働側の利益になるように制御し(**regulate**)、それを搾り取ること、それ以上にやると能率を損傷することになる正にその直前まで行う、といったこともあり得るかも知れない——しかし彼等は特に社会主義ならではのどんなことをもなすことができなかつた。もし彼等がそれを運転したとすれば、彼等はその資本主義のロジックに従って運転しなければならなかつたであろう。そのようにしてなされた。もとよりいくつかの事柄は社会主義者の語句で自分達の諸方策を飾り立てながらなされたし、いくらかの成功があれば、拡大鏡が自分達の政策とブルジョワジーの——あつてほしいと望んでいる——代替政策との間にあるあらゆる諸差にあてられた。しかしながら、本質的には、リベラル派や保守派がそうした環境の下では同じようになされたであろうものを、なさなければならなかつた。しかし、そうすることが唯一可能なことであつたとしても、この政策は自身を社会主義者と呼ぶ時、何事かを本気で考えるような人々の全てを失望させた。しかも背に経済的あるいはイデオロギー的代価を背負つた人々を和解させることには完全に失敗した。死せる労働主義(**a dead laborism**)が授けたのは労働組合や特定の改良主義者のグループに団体旅行をさせる以外には誰をも満足させなかつた。

第3 共産主義者の危険・・・共産主義グループとロシアとの関係、その関係がなかつたとしても社会主義諸政党に対して独自の位置をもつであろうものとしての共産主義の問題、この二者から引き起こされるもつれ(**complication**)を区別するには我々は慎重でなければならない。

後者に関しては、公認の社会主義の左に今一つの政党が出現することは——どんなケースであれ——それだけで時代の一問題であつたということ、並びにそうした政党はマルクスに帰れ(**back to Marx**)というスローガンの上に出発させられるべきであるという事実に驚かされることは何物もないのだということ、を我々は検討してきた。ここに我々が追加しなければならないことは唯一つだけである。即ち、離脱が様々に起こって由々しい問題となつたのである。それは社会主義者達が彼等に転がり込んできたその権力を受け入れたその安逸性によるものであり、更に彼等がそれを受け入れるやいなや自分達の立場を見出したものがそこにあつたところのその不可能な状況によるものであつた。革命的社會主義の中にこそあつた知識人の信奉者達は——自分達の過激主義を吐き出すことが許されることがあり得た党の学校といったいくらかのもの(**some party school**)の

教師の地位に側置されることで満足はしていなかったのである。彼等の殆どにとっては単純に党の中には彼等の位す余地がなかった。古いそのスローガンを記憶しているか、または今や新装されたスローガンを食べるべく彼等にあてがわれてきているような、大衆のその部分においても状況は同じであるところが大きであった。この局面——ロシアの局面とは完全に独立したものである——は繰り返すようだが、決して失われた情景であるとされてはならない。例えツァー達があつたロシアを統治していたとしてさえも、共産主義諸党はあるだろう、ということである。

しかしロシア的局面が、遥かに重要なものであつたこと、及びそれが共産主義者達と社会主義者達の間急速に開かれ尽くされた衝突の広がりに対して責任のあるものであること、そして更には他のようならば決してそうはならなかつたこと、を確立することは容易である。・・・

## 2) 管理資本主義に入った社会主義者達

・・・マクドナルドの第二次の政権獲得によって強化され得たかのように転じた。再度、リ・ピール卿(Sir Re Peel)の第二次内閣とのアナロジーがこれを描き出すことを助けるであろう。ピールの保守党多数派は穀物条例のむし返しである争点で分裂した。そのピール派の一派はマクドナルドの個人的な信奉者よりも遥かに数も多く、また重要であったのだが、忽ち分解してしまった。保守党は骨抜きとなり、政権を勝ち取る能力の無いことを証したのである——1873年におけるディズレリーの大勝利に至る迄、3回政権をとることはあったとしても——。しかしその後、保守党はキャンベル・バナーマン卿の1905年の勝利に至る迄、この時代の約3分の2の間、力を保持していた。しかしこのことよりも一層に重要であるのは、イギリスの貴族や郷紳は、政治的に言っていることだが、その間の全期において彼等の地盤を——もし高貴な血統の不名誉さが取り除かれていなかったとしたら彼等が為したであろうよりも遥かに良好に——保持した、ということである。

事実問題として、労働党(the labor party)は急速に回復し、分裂に続く数年を通じて、その国の中でのその地位を整えた。次のように言うておくのが安全である。諸々の事柄の正常な経過の中で、社会主義者達は増大した勢力と成功へのより良き諸々のチャンスを伴うかをもってして、さほど長くない将来に再度政権の座に返り咲くべきものであった、と。更に彼等は以前に採ってきたよりも一層に強力な路線を採ることが可能となるであろう、ということ。しかし同じように次のように言うておくのも安全である。彼等のプログラムに関しても、それに効力を与える彼等の能力に関しても、共に彼等の政策はマクドナルド政策(the MacDonald policy)から隔たるところは——主として社会化についてのいくつかの個別的諸手段においてのものであったが——単に程度の問題に過ぎなかったであろう、と。今次の大戦のもつこれらの展望に及ぼす諸影響はもとより予告することは不可能である。しかし、こうしたことは一つの可能性としてあり、考察の為、純化されるべき充分に興味のある可能性なのである。

労働党員は非常時の呼びかけ(the call of emergency)に応じてチャーチルの政府に結集した。しかし成り行きが何であれ、この戦争は単なる間奏曲(intermezzo)では断じてない。それが社会の枠組みを完全に変えるであろうことは、ありそうなのである。戦時課税(war taxation)と戦時産業統

制(war control of industry)が再度反復されることは決してないであろう。双方は資本主義の秩序の存続とは両立し得ないのだから、根底からの——徐々にではあるかも知れないとしても——再構築が自からに負荷されるであろう。正確には1919年には不可能であったところのことが、今次の大戦の後には避け得ないものとして来ることがあり得よう。今や労働党が、単独であるか、または労働党に主宰された(dominated)連立においてか、いずれにせよ、その再構築において主人公となる位置にあるだろうことはあり得ないことではない。というのは、彼等のプログラムが、他の場合ならば遭遇したであろうこれに対する反対の殆どは、この世界に死に絶えていると期待されてよいからである。その世界では、これに対して闘うよう残された資本家などは最早ないのである。もとより、政党の精神はその過程の中で変化することはあり得よう。ファシズムの色調(fascist hues)をもつこともあるかも知れない。例えば軍国主義的社会主義(a military socialism)が発生するかも知れない。それはマルクスの願望(Marx's prayer)に対する一個の奇妙な回答であるだろう。しかしイギリスの歴史においては反復して起こることであるが、連続性——綱領と人事における——は尚そのケースにあっても保たれよう。それは依然として古式の政党であろうが、だがしかし、変態されて(metamorphosed)、それが新しい国家を統治することになる。

それは正に一個の可能性であり、繰り返せば、多くの中からの一つの可能性である。しかし、もしそれが成熟したものであったならば、それはその種の唯一のケースを構成するものであろう。その他のところではどんなところでも、社会主義の古典的画期(the classic epoch)にあった諸政党、諸機構、諸イデオロギー、諸プログラムは彼等の足場を壊してしまうか、または失ってしまうかしていた。彼等が立ち向かっている物事の多くは他の諸機関により、他の諸立脚点から実現されるべきものとみられていた。更に彼等のスローガンの多くは——ロシアではマルクスの神位の公式の礼賛(an official cult of Marxian deity)すらもが——限りなき時代の経過の中に生き残ることがあり得た。しかし政治家個人がそうであるように、これらの政党は去っていくものであり、彼等の信条もまた——それが十分な文化的・政治的含蓄において問われているのならば——同じく去っていくものである。このことは合衆国における胚芽的なグループにおいてすら真実であった——もし国民的重要性をもっている何等かの政党が何時の日か自らを社会主義政党だと名乗ることが起こったならば、それはこれらのグループのいずれかがそれに成長したかも知れないであろう政党とは、

甚だしく異なった何物かとなるであろう。こうしたことは社会民主党(the social-democratic party)において力点を置いて(emphatically)真実である。20年代におけるこうした政党の履歴(career)についての短い検証がこのスケッチを締め括らせるであろう。

その履歴は非常に多くの特異点において英国の党の履歴とは異なるのはもとよりである。しかし、それが崩れるに先立った10か年を通して、その二つのケース(ドイツ社会民主党のケースと英国労働党のケース)の類似性は尚一層の重要性をもっていた。私が以前に述べた時指摘しておいたように、社会民主党は殆ど革命的ならざるやり方で権力に立ち至ったのである。単純にその国の運命を最も信託させることができると思われた最強の政党として——というのは外交的と内政的な双方の状況を考慮した時、ボールを足元にもっている、とみられたからである。ところが政権に就いた(ドイツの)社会主義者達——「多数派社会主義者」(“majority socialist”)と反対側の人達は彼等をそう呼んでいた——はすぐさま共産主義蜂起に直面しなければならず、このことはイギリスでみられたいくつかのトラブルよりも数段に厳しいものがあつたのである。更に後者(蜂起)は(イギリスの)労働党が未だ政権の座についていなかった時に起こっている。このようにイギリスの社会主義者達は単に演習を行っただけに過ぎなかった傍らで、ドイツの社会主義者達は実弾を以てなさなければならなかつたのである。治安妨害の鎮圧には旧時のプロシヤ將軍の誰かに信認を授けるほどのエネルギーを費やしてなされたのであり、しかもそのように奉仕した彼等はブルジョワジー社会の管理下に置かれている自らを見出していたのである。基本的な諸問題はイギリスにおけるものと同じであつたが困難度においては比較にならない程大きかつた。

彼等は——当然のことながら世間一般の殆どの悪口を受けながらではあつたが——今日の離れた時点からみると、我々の敬意を更に賞賛をさえ引き出すことは間違いないといったやり方でそれと取り組んだ。エーベルト(Ebert)、シャイデマン(Scheideman)、ヴィッセル(Wissel)、それに他の当初数年の指導者達はどんな人格的な惹きつけも欠いた単純な人達であつたとしても。彼等は脚光を浴びることの反対であり、この点非常に賢明であつたとさえ言い得ないものがあつた。彼等が成し遂げた事と言え、正直や常識が政治の世界に入っていくにはどのようなことになるだろうかを示しただけであつた。彼等はベルサイユ条約に対する責任——実質的には正に責任を負ってしかるべき他の諸党はこれを回避しようと図つた

——を肩に担ったのである。彼等は共産主義者の蜂起と共産党の出現——その環境下では彼等の禁猟管理区で密猟を成功裡に進めていた存在であったが——を鎮圧することに反応して燃え広がった憎悪を受け入れたのである。彼等は先ず自分達の支持者の内、より過激であった支持者に対していくらかの承認を取り付けた。特に社会化を語りかけ、甚だ穏健な社会化法案(a very modest socialization law)を1919年を通過させることによって。しかし彼等はすぐさま、ニューディールとしてアメリカ人には人気のあったタイプの労働立法(labor legislation)を彼等自身に適用させるために、その(社会化の)全てを棚上げしてしまった。この措置は労働組合を満足させたが、他の誰をも満足させなかった。実際に彼等は彼等自身を「労働党化」(“laborised”)した。労働組合官僚制(trade union bureaucracy)の中で指導的位置にあった人々をして党の政策策定機構の実行部門(the operative part of their policy making machine)を形成することを許した。このことは、誰かが考えたかも知れなかったように、マルクス主義的伝統(a Marxian tradition)を備えた政党——この伝統はこの党の教育部では支配的であり続けていた——にとってはでき難いことであるべきであった。しかし、そうではなかった。極左の相当部分と生粋の共産主義者達の離党を別とすれば、党内で反対して立ち上がることが予測されていた知識人達は掌中に保たれていた。イギリス党とは異なり、ドイツ党は国(Reich)、州(state)、市町村(municipalities)の行政諸機構(the administrative apparatus)の中によく根を下ろしていた。その上、党の新聞やその他のところで提供する仕事をもっていた。これらの官職等の任免権が精力的に行使された。服従は官公庁において、学界において、無数の公共企業及びそういった機関において、昇進を意味した。このようにして鞭打ちの仕置きは過激派を手なずけるのに効果的であった。

この種の事態はもとより党の規律を強化しただけではなく、党員数をも、更に党員数をも超えてすら党がカウントしてよい投票率をも増加させた。しかし、党が国民生活の全領域で力強くはあったとは言え、議会政治的な意味で統治するのに十分に強力ではなかった。1925年に総人口は、約6千2百万人であった。プロレタリアート(労働者達と彼等の家族達、それに家事サーバント達を私は含めることにする)は、2千8百万人に満たないのであり、それにこの階級でさえ、一部は他党の投票に流れているのが習慣になっている部分があるのである。「自営業者人口」(“independent” population)はそれほど少なくはない——約2千4百万人——、そしてその大部分が社会主義者の説得に応じなかった。我々がその

上層、言ってみれば、百万人を除いたとしてさえも、ペザント・職人・小売商等、投票にカウントする諸グループに自己限定をしてさえも、現時点及び想定し得る将来において、これらが制される(**conquered**)には程遠いものがあった。これらの二つの階級の間には、ホワイトカラーの被雇用者があり、彼等の家族を含め、彼等に属する者は一千万人よりも少なくはない。社会民主党は全くのところこの階級(ホワイトカラー層)を枢要的地位に保つことによって生き長らえているのであり、これを制することに多大の努力を払ってきたのである。しかし、みるべき成功があったにも拘わらず、ホワイトカラーは——それが社会階級についてのマルクスの理論に従って存在するよりは——遥かに由々しき障害(**a much more serious barrier**)であるということを示すというのが、これらの努力の唯一の見返りであった。

その(上記の)事実と整合させられようとする場合、社会主義者達は通常次のような論議を進めることで満足を引き出そうとする。即ち、社会主義者ではない雇われ労働者は、未だ真の政治的位置を見出してはいないのである、正に道を誤った羊(**just erring sheep**)なのであるが、やがてはその道を見出すことが確かな人々であるということ、あるいは彼等は彼等の雇い手(雇用主)による休みなき圧力が加えられていることで、党に加入することが妨げられているのだ、といった論議。はじめの行論はマルクスの教義(**the Marxian fold**)——我々は社会階級の理論がマルクス主義者の(理論の)連鎖の中の最も弱い連結部の一つであるということを検証済みである——を飛び越えて誰にも罪を負わせるものではないであろう。次の行論は平明な事実の問題として誤っている。それが他の時代であれば真実を含むかも知れないが、20年代のドイツの雇用主達は——量的な重要性をもたない例外はあろうが——自分達の被雇用者達の票に影響を与える位置にはなかった。

これが全てという訳でもない。政治的経験と能力という点で、ドイツの反社会主義諸勢力は全体としてイギリスの仲間達に劣るところが大であった。事実、知性のある保守の反対の欠如という故からも、諸事態は社会民主党にとって更なる困難をもたらすものであった。しかもこの反対はイギリスのそれに当たるものがそうであったよりも、国民的土壌の中に確として根を下ろしているところ多大なものがあった。例えばユンカー階級(**Junker class**)は数の上では採るに足らないものであった上に、全くと言ってよい程に政治的リーダーシップを採ることが——その種のリーダー



シップを採ることに、イギリスの郷紳(the gentry)が巧みであったのに比して——できなかった。しかしこの国の大部分のところで、その位置は上記に拘わらず、それを崩すには物理的暴力(physical violence)に訴える以外にはあり得ない程に、しっかりと確立されていた。

このようにして、この党(社会民主党)が共産主義者達と共に共通の原因をつくることに逆らうこと(against making common cause with the communists)、及び血の奔流の中での反対を和らげる(to quench opposition in torrents of blood)こと、を決定するやたちどころに、排除のルールについてのどんな意図をも放棄しなければならなかった。入らなければならなかったのは、非社会主義諸政党や諸勢力(interests)との提携(coalition)と妥協(compromise)であった。更にそれは臨時的な便法(a temporal expedient)としてではなく、永続的な協定(a permanent arrangement)としてであった。その上、そうした協定がひとたびなされるや、それがなされるべきではないとする理由が現実上なくなった。そうした協定はその追随者を重複させることから党を防ぐものではなかった。更に提携の立場は労働組合の諸要望を充たす道程に立つものでもなかった。更に責任の分担に対して言われるべき事柄が多かった。

カトリック(センター)党との同盟は、それ自身、非常に初期の段階に示唆されていた。この党が實際上カトリック教会に対して忠誠を公言していた人々の全てを含み、その中には幾ばくかの反社会主義であると大略言っただい人がいた、ということも真実である。しかし、この党は非常に過激な一翼をもっており、それらの人達の重要性は——社会民主党との競争の中で——カトリック系労働組合の忠誠確保の必要性によって大幅に増大させられていたのである。そこでセンター党員(the centrists)は実践行動の中では「労働党員」が社会主義者達そのものであるかの如くであったのと丁度そのように振る舞ったのであった。更には、彼等はプロテスタントであったホーエンツォルレン君主制の、とりわけ散逸する筈もない記録類を収容し、社会主義者の立場からその極めて重要な点で騒ぎ立てた。彼等はワイマール共和制(the Weimar republic)こそ、そこに住む自らにとって全く居心地の良い場所であることを、すぐさま見出したのである。

もとより社会主義者達はカトリック教会をそのままにしておかなければならなかったし、更にはその力と独立性を支持することで手を貸そうとさえしたのである。彼等はこのようにしてこのセンター党に支持の大きな

シェア(a good share of patronage)を与えることを承認しなければならなかった。センター党はこの支持を社会主義者達がなしたよりも更に効果的にさえ用いたのである。しかし、このセンター党が二つの問題点で満足させられるに至った時、協力は信じられない程の円滑さを以てなされた。総じてプロシャの自由州政府(警察の管理を含む)では——州政府のレベルが多かれ少なかれ、共通の狩猟場として扱われている中で——支配的な影響力がカトリック西部を絶妙の巧みさで処遇したところの社会主義者の手に握られたのである。この仕組みは非常にうまく作動したので、カトリック中道派も社会民主党のいずれの名義も、事柄の核心にその区別が記されることは稀だという状態を育んだ。

しかし、ワイマール体制に足場を置く用意のあった諸党は、どの党も完全に無視されたままにしておかれることはなかった。重要な——時には指導的な——官職が、繰り返しドイツ国民党(おおざっぱには保守党に当たる)に与えられた。そして、如何なる政治的養子縁組をも行っていない人達について言えば、これら全てのブルジョワ政党のメンバー達は——戦前にそうであったように——「国民党」と社会民主党の間で広く広がった大きな地盤の中で存続し続けることが認められた。このことはとりわけ「民主党」に当てはまるケースであった。同党は尚完全に資本主義ではあったが、その中では最左翼のリベラルグループであった。この党は党員数においてよりも人材(talent)において強かったのであるが、新国家については全てのことに好意をもっていたような、社会主義者達についても——何か問題にもならないような近年の社会主義は別として——その全てのことに好意をもった、そういう人達を強く掌握するに至っていた。

普遍的原理としての連携(coalition)は一個の普遍的妥協(compromise)を含むものであった。カトリック教会との妥協——それはいくらかの観察者にとっては最難事であるとみられていたであろうところのもの——は現実には全ての中の最も容易なものであった。あからさまに社会主義者達が感じていたのは、このことがこの時代の死活的争点の一つであったということではなく、更に戦慄すべき組織(a formidable organization)であるとその時みられていた——ヒットラーはそれをそのようにみてはいなかったのだが——ところのものより発する敵意の惹起よりも、満足した同盟関係(a contented ally)をもって平和裡に協同していく方が遥かに良いということであった。帰するところ、君主によって課せられていた拘束の幾ばくかを政教的措置(concordat——教皇と政府の間の条約)によって取

り除くこと、それが賭けられていた全てであった。農業政策に関する妥協はずっと深刻なものであった。この国(アメリカ合衆国・・・編者)でもそうであるように、農業補助金(**agrarian subsidies**)と農業保護(**agrarian protection**)は「計画」(**planning**)と呼ばれることにより、更に美味(**palatable**)ならしめられていた。計画は、しかしながら、より高価なパンを目指しており、農村の利益と妥協することは避け得ない代償(**quid pro quo**)であるとみるような人々の全ての耳には心地良く響くものではなかったであろう。更に、ベルサイユでの諸制限の中で、軍隊は世界を元通りに保つため許された。しかし、この点における党の態度は、国民的立場からみて防衛的なものであったとする我々自身を納得させるが為には、我々はそれに替わるものが何であるかを思い浮かべる必要があるだけである。党の立場からみれば、これは国民党(**the Nationals**)との暴動に由来する今一つの妥協であった。

これらが、社会民主党が主導した(**sponsor**)様々な妥協の内の見事な諸例である、と私は信じる。もしそうだとすれば、次の3点は公平にみて明白である。第1、個々の政治的争点の是非につき、それらの妥協に帰せられるべき強力なケースがそこにあった。第2、それら諸妥協は民主主義的協力の精神の中で(**in a spirit of democratic cooperation**)入ってきたものであることは明白であり、しかもそれらは責任を取ることに冷静であり、自分達の力量に満足しており、当面の問題と究極の原則の間には長い道程があるという事実に思慮を以て当たっている、そのような人にとっては当然起こるようなものであってしかるべき問題解決の種類のものであった。第3、党勢の凋落をもたらすことになるような何事かを抱いているような妥協は——私の考え得る限り——なかった。尤もそうした妥協の政策が、党の下士官や兵達(**the rank and file**)の隠し持ってきたかも知れない革命的熱心さを、生き長らえさせることを保持させる方向に向けては殆ど何物をもなしていない、と強調するといったことを指導者が選んだりはない、ということがない限りではあるが。

一個の重要な点を除いた全ての点で顕著に安定している、とみられる情況が出現した。政府のそのシステムの政治的及び文化的成功の部分は、政府のエンジンに油をさすものであった公的支出(**public expenditure**)の大規模にして急速な増加のせいであった。更に言うなれば、この支出は——高度に成功裡にあった売上税(**a highly successful sales tax**)をその中に含むものではあったが——蓄積の源泉を干し上げるような諸方法によって、

ファイナンスされなければならなかった。外国資本の流入が続いている限りにおいて、全ては比較的順調に推移していた——もっとも予算編成の上と、それに通貨保持準備上においてさえもの諸困難が、流入の止まる一か年以上前から現れ始めてはいたが。流入が止まった時、かの良く知られている状態が発生し、それが人々を惹きつけていた指導者の地位を崩してしまったのである。

それでは我々は、前触れなしにそれ(ワイマールの政治構造)を襲ったかの破局(the catastrophe)に対し、どのように考慮すべきだろうか？ 官職から、更に様々な安全弁(entrenchments)からそれ(党)を駆逐してしまうような、更に多年に渡って構築されてきた(aere prennius)ものであり、また我々の時代の政治的パターンの中では殆ど揺らぎそうもない時期の一つ(one of the most unshakable date)であると誰によっても考えられてきたその組織構造そのものを滅失させるような、それほど完膚なきまでの敗北に対しては？ 行政機関の多くが尚この党とカトリック党の同盟の奉仕において作動していた間、そして党が尚ゼネラルストライキを呼びかけることができる力量をもっていると感じさせる権利をもっていた間、その間に発生した敗北に対しては？ 更には、発足してから10か年足らずだということに対しては？・・・他の誰かが与えるのに適していると考えよう回答がどんなものであれ、私は物事に誠実でありたいので、私は提供するべき適切な説明を何もっていない、と敢えて言いたい。私が了解している説明は——それは私が知っている最良のものとして、他の観察者も了解している説明と正確に同じなのだが——そうならしめるのに都合良き諸環境説である。・・・ベルサイユ、失業、そうしたものはもとよりそうである。・・・丁度ムハメッドの成功はアラブ馬の高い資質なしにはあり得なかったと言うに同じく、類似のことはホーエンツォルレン王朝の下では決して起き得なかったと言うに同じく。・・・しかしこうなるのに都合の良い諸環境のどのような部分も基本的な説明とはなっていないのである。私が関与している限りでは、この説明は、帰するところ、一層の思考と観察を付け加えることによつてのみなされる。かの環境下での私の推論は次の如くである。社会民主党の政策が基本的に悪かった筈だとか、少なくとも執行において無能であるのははっきりしている(patently incompetent in execution)とか、といった結果に対して、かの破局の発生から引き出され得る結論などはありはしないということにするのが、正に自然だということ。どんな政策や政治体制も、それがこの種

の激震に対する何の論証もないという故を以て、責められ得るものではない。カトリック中央党の挫折は尚更に衝撃的であり続けている。それにも拘わらず、同じことが彼等に適用されている。

### 3) 第Ⅱ次世界大戦と社会主義政党の将来

現在の大戦は、もとより、我々の問題についての社会的、政治的、経済的な諸与件(data)を変えるであろう。以前には可能でなかった多くの事柄が可能となるであろうし、他の多くの事柄が不可能となるであろう。本書の末尾の2～3頁が、簡潔にこの局面を取り扱うであろう。しかし、私には大戦の結果の如何とはかかわりなしに問題を見据えることが、政治的な思考の明確性の為にも、本質的なことだと思われる。そうでないと、その性質はそうあってしかるべきようには決して姿を現してはこないのである。

どのように今次の大戦が様々な社会主義者グループとその政党に影響するのだろうか、もとより、大戦の持続と結末に依存するであろう。しかしながら、いくつかの論点が注意するに値するようにみられる。

いくらかの小国、例えば、スウェーデンとかスイスとかがある。そこでは社会主義政党の地位は結局において影響されることはないであろう。しかし大国における諸政党の中で、イギリス労働党ははっきりした展望をもつことが許され得る唯一の社会主義政党であろう。党员達は非常時の呼びかけに応じてチャーチル政府に結集した。しかし、もし前に行った分析が正しいとすれば、彼等はその時、官職と権力への——非常時とは関係なしの——道程を前進するところに十分なものがあつたのである。それ故に彼等は全く自然に——単独であるかまたは彼等が管理する連合で——再構成の仕事管理する位置に至ることになる。また戦時経済は彼等の直接の諸目的の幾ばくかを実現したことになる。相当程度において、彼等は既に得たものを保つだけのことではなければならないであろう。その上、更なる前進がなされることは、そこには闘い取るべきものが資本家達に多くは残されていないという条件の下では、比較的容易だと期待されてよい。もとより党の精神がその過程において変化することはあろう。修辭(phraseology)におけると同様、活動においても、もっと過激になるか、または保守的となるか——あるいは多少なりナショナリストとなるか——諸環境に応じてそうなるであろう。原則と人事の連続性(Continuity of principle and personnel)はいずれのケースにも前提とされるであろう。このことは大戦がイギリスの勝利の下で問題とされるのであれば確として適用されるであろうが、そうでない場合でも推定され得る。

大戦がこの国(アメリカ合衆国)において現存する社会主義のグループを利するかどうかは定かではない。その下で能率的な社会主義政党が一大勢力となることが経験されよう、といった諸環境は實際上容易にイメージし得る——そうしたことは多分ありそうでないとさえも言えない——のである。そうしたことは他の社会主義労働党をつくろうとする一つの力強い動機となることもあろう、そしてそれと結合しようとする農業者—労働者グループ(**farmer-labor groups**)の結成に対しても。このケースだと、ある組織が大統領の座を制するのに十分な力をもつに至る事態も出現するかも知れない。細部に至ることと諸条件を吟味し尽くすことは読者に任せるとして、私は唯、次のことを述べるに止める。第1、この役割を果たすために資格をもつその唯一の社会主義者党がそれ自身かくも弱体である事実によって、この可能性たるや大いに弱められているということ。第2、そこには多くの他の諸可能性があるということ。次の点に依存するところが多大である。共産主義との競争がどのように形作られるだろうかということ、並びにこのことは帰するところロシアの地位が——同盟国の中でまた全世界一般の中で——大戦の終結時にどうなっているであろうかに依存することとなるであろうということ。その上、古い政党機構を用いた全くの新しい諸々の冒険(**ventures**)が他の一角から点火されることもあり得よう。これらの可能な諸ケースのいずれをも禁じると期待されることのできる原則も人物もないのである。

アングロ—アメリカ人の完全な勝利——いふなれば無条件降伏を強いる——を仮定すれば、勝利者達の、特にイギリスの政策は占領諸国にある古いタイプの民主主義的社会主義を利することは確実であろう。というのは、このタイプの政治構造のみが——一定の屈服の期間よりも長い間——非武装と勝利の賞金となるであろう様な世界の諸問題のアングロ—アメリカ人の管理(**the Anglo-American management of the world affairs**)を受け入れると期待され得るからである。しかし、そうした政府の設立は容易ではないであろうし、更にそうした諸政府に権力を維持させ続けることはもっとありそうでない。例えばフランスのケースでは社会主義者達と労働主義者達は、良きにつけ悪きにつけ、その国民的災禍との関わり合いがあった。ドイツでは、社会主義者達は——彼等の過失によるものではなかったとは言え——戦争の浮沈(**the vicissitudes of the war**)を分かち合うことができ得ない状態にあった。多くの亡命者達はアンチ・ヒットラーの態度をとっていたが、それがアンチ・ドイツの態度から区別されることは困難であった。戦勝国の恩恵は多義的な勧告(**equivocal**

recommendation)となるであろう。それ故に、古い諸政党の復活(renaissance)は不可能ではないとしても、そして多くの正常でない——しかも無意味な——諸徴候を示すのは避けがたい筈のこととさせるような短期的状況の下では、何が起きるかを予言することは不可能であるとしても、ヨーロッパ社会の仕組みが、熱狂的に支持されることはありそうにないであろう。

そして、とりわけ、ロシアが主要な勝利者となるようなことにもなれば、混沌(that chaos)はボルシェヴィズムと結合して確たるものとなるかも知れない。最初に被占領諸国で、次いでそれらの国々を超えて、ボルシェヴィズムは問題解決の機関としてである。このことは、以前に述べられてあるように、世界革命にはアメリカ人的共産主義の諸タイプのものに合理性があるということになる。

もし我々がロシア—アングロ—アメリカ同盟の成功が不完全なものであると想定するのならば、いくつかのヨーロッパ諸国ではファシズムの降誕以前に存在していた、そしてその他のヨーロッパ諸国では大戦の勃発以前に存在していた、そうした社会主義者に——そしてこのケースでは共産主義者のグループと党においてもまた——前述の行論の含蓄が一層の強度の激しさをもって適用されることはもとよりである。

どのような結果となるものであれ、大戦の結末とは全く関わりなく、また何等かの特定の社会主義者のグループの命運とは全く関わりなく、文明世界が——ファシストの諸国を含めて——社会主義に向かつての一個の長い大幅の足取りをとることは確かである。我々はこの方向での発展を加速させた1914—1918年の大戦とのバランスにおいて検討してきた。現大戦は遥かに高い程度においてそうなる結び付けられている。それは社会の枠組みを完全に変えるかも知れない。1914年と1939年にまたがる4半世紀は社会主義の未来に対し「事物と魂の成熟の設問」(the question of maturity of things and souls)を含んだ問題という点で無視され得ない時間帯である。その画期を通しての出来事と政策はこの成熟の過程に大きく貢献するものであった。経済活動の戦時の諸統制とそれらを作動させるために構築された官僚制機構は容易には——相対的に言うならば——1919年とそれ以降にそうであったように完全に溶け去ることはないであろう。



大きな範囲に渡ってこうした成熟のプロセスは疑いもなく定着したのであり、しかも全ての国々において様々な準備がそれらを他の用途——表面的には戦後の落ち込みを防止するとか、国際的な再建設の問題と取り組むとか、をなさんが為というが、実質的には完全な社会化のための諸機関を発展させんがために——設置するべく整えられつつあることを見て取るものである。再度、廃棄されることはありそうもない戦時課税はその他のことをなすため使われるであろう。正確には、1919年には不可能であったことが、平和が今一度回復した時に、それ自体を課すことはあり得よう。このことはもとより意図の問題ではない。その意図が何であれ——はっきり言えば、闘われてしかるべきこの種の明確な諸意図などはなく、状況の論理に従順に流されているだけのことであるとしても——結果は同じであろう。

私は世界革命の可能性のところまで降り立った。そして今やそれを無視しようとは欲しない。社会主義的秩序をもたらす劇的要素の乏しい方法が——しかしながら——一層に起こり易いとともに、長期的には一層に効果的である(ように)見受けられるのである。(that less spectacular method of bringing about a socialist order seemed however (to be) both more likely and, in the long run, more effective)。諸形態と諸章句は戦術的諸考慮に依存するものであろう。しかしながら、本質的にはそれはどんなケースにあっても社会主義であろう。しかし、そうであるのは我々の意味での社会主義だけである。とりわけ——ファシストであることを意図し、しかも目指すようなあらゆる人達には——それは民族主義者、軍国主義者、帝国主義者に転化することもあり得るのである。それはマルクスの念願に対する異様な回答となり得よう。しかし歴史は時として疑問の多いジョークに耽るものである。・・・全てのことが述べられ、そして特に保守主義者と過激派知識人について述べられた時、悔みを寄せ合う同じ不愉快な場所で身を寄せ合っている(side by side in the same uncomfortable spot exchanging condolences)彼等自身を見出すであろうことは、全く以て何の切り札でもないのである。

この章は1939年の秋よりも前に書かれた。大戦によるより大きな論点のいくらかは第IV部において触れられるであろう。ここに追加される必要のある全ては、含まれた基本的な問題は反転させられた諸々の出来事によって影響されはしないのだ、と言うことである。とりわけ、戦時政府の統制と計画は独特の(sui generis)現象であって、それ自身は手元にある主

題と関係しはしないのである。それにも拘わらず、今次の大戦は、そしてその下に行われる諸環境は、いくつかのやり方でその主題に負うのである。それは我々が、戦争と戦争に結び付けられた諸条件が数年かけて諸事態の正常な状態になる、という可能性を考慮の外においてすらそうである。——その可能性は、経済的にも社会学的にも全くありそうなものとして、永久戦争(permanent war)の可能性である。

戦時の統制は——もし全面的にしっかり確立されたならば、——取り止められることはどうあろうとありそうにない。部分的には、このことは課税負担の増大の帰結であるだろう。もし我々がなされると納得させられる次の想定を採るならば、即ち、戦争における税率は、1919年の税率は1914年のそれを上回るものであった、にみられるのと大約同じ比率で、戦前に課せられていた額を上回るものとなろう、という想定。というのはこのケースでは、私的産業の駆動力は決定的に消滅させられるであろうし、政府は資本主義経済の一重要セクターとしての役割に自ら責任を取らなければならないであろう。このことから離れても、政府はこの仕事に対し1918年にあったよりも遥かに良く装備されてであろうし、公衆も同様1918年にあったよりは状況を受け入れるのに格段に良く用意されているだろう。戦後の諸調整は以前とは異なった精神と雰囲気の下で行われるであろう。最後にこれに抵抗する諸力はこれまた切り下げられよう、その反面、社会的変化を成し遂げようとする諸力は——現代の戦争が社会の網の目に課す緊張により——大衆と知識人達の結果としての過激化をもたらし、このことがブルジョワジーの標識灯を消すということになるだろう。あらゆるこうした諸点の中に、十分な重要性と持久性をもった現代の戦争は、——その軍事的結末がどのようなものであろうと \* ) ——第Ⅱ部で略述した諸々の発展、それは20年代と30年代におけるヨーロッパの経験から実際に明らかなのだが、その展開のアクセルを踏む傾向にあるのである。しかしながら、正統派の社会主義者達、とりわけ開化された彼等が、事実上祝福されることになるだろう、とそれが導くのか導かないのか明瞭ではない。我々は納得されるものとしてのありそうなことだけに依拠する必要はないが、我々は既に経験から——正統的社会主義者達と正統的保守主義者達が、いつの日か、お互いに彼等の最も心に響く悔みの辞を開陳したいという感傷に耽り、更に彼等が相互に(そして彼等の自分のビジネスを)以前には理解していなかったという悔恨に耽るだろうと推理することで——見解への支持を望みうる。

＊) 軍事的結末がどうであろうとも、は過去には異なっていた。成功裡に戦勝を勝ち取った統治するグループはどんな時でも、政治力を掌握していた。読者は何故最早そうでないのかを求めるのに何の困難もないだろう。戦争のエンジンに密接に関わった非ブルジョワ系の諸グループ——彼等は戦争のエンジンであったか、少なくとも戦争の要員であり、管理者であった——は成功と失敗に同定され、公的心情もそれに従って作用を受けていた。今では、戦争は一方においては社会の全階層のもつ一個の事件であり、他方においては非人格的で機械的なものである。一個の政治家はそれでも尚、しばしの間、「戦争に勝った人物」として成功裡に姿をさらすことはあり得よう。しかし、どんな階級も、どんなグループも、成功から得た力の恒久的継承を——社会がブルジョワジーを本質的に思い浮かべる程に長くには——多く引き出すことはないのである。とりわけ産業は大衆のイマジネーションに点火する性質をもたないような、そうした貢献には信用を決して与えはしない。

## (2) 第二次世界大戦中のアメリカからの展望雑録

### 摘要

巨大な潜在生産力を備えたアメリカの存在、言うなれば、「もし神が世界を破滅させようと欲するのならば、そのための方法はアメリカをして盲目ならしめることである」ということ。そしてアメリカのルーズベルト政府は、対内政策にあつてはニューディール政策をとり、対外政策にあつては倫理帝国主義をとった。ニューディールは自由な資本主義から拘束された資本主義への変換を意味し、倫理帝国主義は孤立主義から離れて世界大戦への積極的参加を意味した。・・・ニューディールは正にそうした基盤と闘いながら後退局面にあつた・・・ケインジアン理論・・・生産計画と完全雇用の社会学・・・OPA・・・そしてそうした諸要素が戦争経済の軍備拡大・・・官僚機構の闘志と統制のための行政的諸装置・・・改革対回復・・・しかし生産の社会化を期待するものではない。ドイツと日本の膨張に反対するルーズベルト・チャーチル同盟・・・更にその上に、そこにはロシアをめぐる紛糾がある。・・・アメリカ国民の80パーセントは戦争参加に反対であるが、それにも拘わらずあらゆる情報機関や新聞は心情的にいつて戦争参加賛成なのである。「我々は手を出さずにいることができる」(孤立主義)という表紙の下にあつて内実は戦争参加賛成なのである。あらゆる方策が潜在生産力を戦争向けに動員させるために整えられた。その上で日本を大戦の一角へと追い詰め、第二次世界大戦に参入することになる。・・・人材の輸入において多数の知識人が流入し、その中には政治的工作員(political maneuvering staff)が含まれていた。・・・コミュニスト、エンパイア・ロシアのサーバント・・・ファシズムの抑圧からの解放、しかしそうした解放は半分の仕事しかない。・・・その他 (編者)

第Ⅱ次世界大戦中のアメリカからの展望雑録

1 世界と合衆国における眼前の状況・・・もし神々がこれを破滅させようとするならば、これを盲目ならしめることである。・・・トラブルはある、政策がない。・・・ケインズを見よ・・・反対のことを達成しようとしているアメリカについて・・・ロシアの奉仕者・・・全く予期せぬ事情、規律を確保するためには、そして標準的階層を確実にするためには・・・実質的勝利者 クレマンソー・・・ケインズのエッセイ 40頁、平和について 42頁・・・

---

2 ケインズが述べたところと同じ状況が再び、アメリカはあらゆるカードを持っていて、しかもゲームが出来ない。・・・我々はこの大戦を失った。・・・

---

3 ニューディールは後退の中で正にそうした基盤と闘っている。・・・幅広く後退することは全く必要でなく、そして賢明だったか・・・その諸機関はまさしく攻撃に待機しているだけのことであり、その上、仕組みに対する理解を欠いている。・・・経済学者は合言葉をもっているが前からよりも多くのものがあることを理解しない。・・・

---

4 ファシストの組織構造は社会主義のための多くの事柄をより容易ならしめた。・・・しかし、そこから賛成または反対のどんな根拠をも引き出すべきではない。

---

5 チェスター バーナード・・・委員会を訪問—コール計画・・・ファシズムだけが救うことができる・・・ヒットラーの死亡記事・・・信じら

れない教化・・・金曜日の会合・・・そして今や紛争が来る一だが社会主義でも大衆の利益でもない。・・・「希望」による陳述、その一方で他の者は変節の諸形態を研究し策動している。・・・態度は極めて奇妙なものである。・・・情報を顔に出させる、そして、からかい気味に告げる、彼は本当はボルシェヴィキではありません、と。・・・脅しのあつてはならない態度、益々以て信ずべきものが少なくなる。・・・

---

6 眼を閉ざす。・・・逃避主義、交信を排除している(to exclude correspondence)限りで。・・・私はどんな時でも自分の価値観は留保しているのだが、良いか悪いかは問題ではない。・・・絶え間なき必要に向けての日本―ドイツの膨張があるのでは。・・・我々が付記するところよりもさらに重要・・・ビジネス毎に細分化されたかのニューディールの方向には未来がない、しかも一歩一歩悪くなっている。・・・苦悩するプログラムを好む。・・・脅威は、全くのところ軍事的なものでなくして地下潜行している。・・・この不条理な反トラスト法！しかり、ゴスプランでありさえする？・・・

---

7 重要なこと、CIO(アメリカ産業別労働組合機構)や日雇労働者共産党が「ある」だけなのか、またはそのために宣伝をなしているのか、の別は問題ではないということ。・・・重要なのは彼等がスターリンの仕事成しているのか、あるいはスターリンのために仕事をさせられていることに、なお耐えているのかである。

---

8 もっとも物静かな老いた人達は反大企業である。戦争遂行の評価・・・新しい温和なボルシェヴィキ化・・・誰もがそれを逆行させないであろう。・・・「特権のない」(underprivileged)しかも「財産のない」(disinherited)人達の一様な窮迫がある。・・・

トラブルはロシア、ロシアということである。・・・法王、唯一の真面目な権力・・・「新しい帝国のツアー」、あたかも一部局が機械の中の一部

であるように決定する。・・・、労働者一般(Arbeiter überhaupt)はその機構の中で「決定する」(entscheiden)には至らない。・・・いずれにせよ、独占、貯蓄、投資が自己決定されていく、というケースではない。・・・

---

9 そして完全雇用の社会学・・・資本主義的な社会機能は買い手市場だという点にある。・・・生産計画の社会学(イギリスにおいて早々と熱心であっただけ)・・・痴者の世界のための計画・・・

そうした改革は再度復活する。・・・これではない、これだけなのである、何が社会主義者を変えたのか、変換と再構築は一つの課題なのではなく、社会主義に対するそれぞれである。・・・

アメリカにおける経済機構の信じがたい力・・・他の労働者に反対するストライキの存在、そして労働紛争はギルド社会主義におけるものとは全く他のものであるということ。

連邦価格統制機構・・・実質的な論議を求めることはできないであろう、あるいは国家は正確には、ただし、はたりの抵抗がトリックを行使するだけのこと、であろう。

教化(Christianisierung)といったことが我々に何等かの意味をもつとするならば、我々は戦時において、すでにあるべきであった。一個の機構乃至はメカニズムがいつも十分に重なり合って進行する、ということは無意味である。理想的な資本主義は破綻する時には存在していない。・・・

---

10 我々は彼の諸価値の中に囲い込まれている、しかも、これらの諸価値たるや世界である。・・・[編者注：彼とはルーズベルトのこと] 彼の宗教とかたくなさと義務についての理念・・・そこに彼は自分の足を下ろしている。・・・人間の輸入の中には、多くの爆発的材料がある。・・・賃金における失われたもの・・・

最大の不信を伴った最少の能率・・・不確実、如何にして何等かのより

多くのものが確実に獲得されるのであろうか(政治的にまたは事業的に)・・・

アメリカは外に留まっていなければならない。・・・戦争の外側に、なおもそれ以上に平和の外側にいる。・・・

---

1 1 比肩して語る事ができるような唯一人の権力・・・[編者注：唯一人の権力とはスターリンの権力のこと？]

1) ルーズベルト—チャーチル政策の完全な失敗——誰がこのことを認める余裕をもつことができるのか？ しかも、それは半分の仕事でしかないのである。・・・

2) 燃えに燃えた喧伝は充分である、そして生活の正常な状態に戻ろうとしている。・・・

2)a 全面的にそれが可能であるか・・・

3) サディズムと自動的な拡大疾走・・・

逃避主義・・・その時持っている結論を説きつけることで物事を処理しようとする習性・・・非現実的なアメリカの政治・・・我々は単純にそうであると言ひ、我々は何事かを成したと考える。・・・そのように、我々は希望に逆らって希望するものを求めることをしたくないので、私は問題を位置づけ、その上で私がそれを取り上げる場合、何故に問題になるかを明らかにするものである。・・・

そのかたわらで我々は、自分達自身を防衛できないような人々の手で、さらに一層の諸権力を固定しつつあるさなかにある一方で、集中収容所において鎖につながれているのだろうか。・・・カーン(汗)の選出・・・24年におけるイギリスにおいてさえ、今や永遠ではない。・・・共産主義者は希望と保護を持つ、とりわけ合衆国からの独立に望みを託している。・・・その他に法外な論理の中にあるかたわらで、我々は——できる限り、しかも敏速に——自己修正をなし、譲歩をなし、反省をなす。・・・官僚至上主義と輝かしい業績についての経済的補足・・・益々重要となる診断・・・



1 2 硬直性—短期—投資・・・属性は与えられており、しかも変わらない・・・不断に新しくつくられる——だが、なお硬直的に置かれている。・・・

婦人有権者に対する教説(物語詩)・・・大企業の専制、古い章句のはりつけ、すでにその内容は失われているのだが。・・・重要、本来どのようなすべてが達成されるのか、そして行政の無能があるだけだ、ということ。・・・街頭には子供達の上に輝いているものが示しているもの——揺りかごから墓場までの保全(konservativ)がそれである。・・・その上にさらに自由についての白痴的言動・・・

1 7 8 9 年！・・・8 9 年に何が発生するべきだったのか。・・・そしてロシア・・・資本主義とキャパシティの留保・・・有機体的秩序・・・敗北主義・・・明らかなことを秩序だてなすこと、そうであれば、さらにそれ以上のものはないだろう。・・・一つの政策がなされうるとして、アメリカは何をなすべきか。・・・

---

1 3 平等性の問題さえも(失業)・・・実処的問題の社会学・・・経済学よりも興味がある・・・失業——諸サービスにシフト・・・失業救済、保険によって確実に、そして労働問題から飛び離れる。・・・動機の問題——実際に長期的には、そして教育もまた・・・資本主義は不平等を制限しはしない。あるいはラーナーは正しかったのか？ 何故に彼はそれに立脚したのか——だが、そうは言っても、何物をも取り出していない。・・・労働不安・・・ベバリッジの保障・・・

---

1 4 合衆国は社会主義を秤量皿ではかっている。・・・閣議における政治家・・・取引としての反トラスト行動は理解を超えるものである。・・・技術的失業と短期的な査定・・・政府事務局の失業・・・雇用と産出は区別されるべきである。・・・実質的危険・・・粗野で温かみのない諸施策・・・資本と反インフレーション施策・・・

経済学で我々は実際に観察された行動を処理しようと試みる、政策では夢を処理しようと試みる。・・・料理の盛り付けとバターは容易に上方変

換させられる(税特権により)。

---

15 トラストは生き残れるか?・・・官僚制度の闘志 — 統制のための行政的装置・・・この目標に達することを防ぎうるものは政治と官僚制以外には何もない。・・・改革対回復というのが全くぴったりである、完全にそうであり、完全に融合している。・・・生産の社会化が期待されるものは何もない、ということに行論は言及を避ける。・・・発展が考察の中へ入ってくるところでは話は全く別のものである。・・・連邦価格統制機構(OPA)がよりよい例である・・・二つの問題も・・・もともと二つの問題・・・それは影響を悪くする・・・本来的に二つの問題がある・・・純粋に経済的な問題と実務上の問題・・・「抑制」・・・降伏を強いる、官僚制的な決定に従うように。・・・鋭さ、どのようにして達成するチャンスがあるのか?・・・

---

16 もし・・・であったならば、官僚制、労働、ニューディールは勝ち抜いていた。・・・  
a)賃金支払いと b)投資を凍結することによって資本主義の降伏(surrender)があったとしたら・・・

---

17 価格メカニズムの指導を拒絶するような社会は、私経済的に存在することを等しく止める。・・・思いどおりにより多くを購入し販売することができない場合には、資本主義は死につつあるのではない、死んでいるのである。・・・

---

18 かくして、何事になされうるのであろうか?・・・それはよいとして、何故に撃つことを止めるのか・・・パッションが爆発するや、独裁者にはできるが、民主主義的経世家にはできない、ということ。・・・手に負えない破壊・・・私が追加しようという欲望を持つ、または持たないか、

ではない。持つことはあるだろう、しかしイギリスには何物かがある。・・・だがイギリス、そこではロシア的視角への配慮(Rücksicht auf Russian angle)を欠いていることは確かである。・・・チンギスカーンは、[編者注：ここのチンギスカーンはスターリンではないかと思われる。] だが救済だけを・・・共通の善(common good)を生み出そうとする行論は結局においてさほど納得させるものではない。・・・小さなシフト・・・

---

19 「社会主義者」との本物の紛争(very struggle with “Sozialist”)・・・ロシアはここで社会主義を生み出すことができる。・・・戦うことなく日本を得ること、このように非常に多くのチャンスが——満州国に劣らない——こうしたものとしてある。

---

20 この他に、統治政党(the reigning party)にとっては非常に困難——不可能ではないとしても困難——がある。それは最大化政策(maximal policy)、例えば軍事的にみてそうすることは客観的に非常に容易にできる、しかし、それは政治的に責任をとることの次に位するものである。・・・満州・・・過激派は民主主義ではありえない。

---

21 日本、領土の替わりに賠償を・・・生来のものと鈍感さ・・・そして人種的な恐ろしさ・・・公言せられた諸目的との対照がもっとも驚くべき事柄である。・・・章句のみが保持されている。・・・そしてロシアが勝つか勝たないかは同じことである。・・・つきつめれば彼は死ぬだろうということ以上のものではない。・・・物事のあらゆる状態は過ぎ行くものである。・・・(彼・・・日本である？・・・編者)

---

## 22 付IV

・・・保証付の情報(information)が、なお真正の意志(genuine will)を満たすものであったとしても(さもなければ、せいぜいのところ極めて長期

的に起こりうるものであるのだが)、合衆国の現状は、すなわち、双方に対する事例となりうるものである。・・・めったに起こるものではない。・・・確かにそれは一個の研究をなさしめうるに足る。・・・(そう、統計といったものを伴った経験である。)

a) 仮にその人物が、[編者注：その人物はルーズベルトであろう] 高度に開明的であったとしても、彼がいま日々に(currently)果たし得ている仕事よりも十分に多くの自らの仕事を成し得ている人物はいない。東アジア問題とその社会的、並びに経済的な意味について一つの構図がある。一情報そのものがそれを準科学的事実認識として描き出している諸機関(agency)によってねつ造された(falsifiziert selbst)ものである。注目すべき結合があり、それがその国を日本との関係で困難においやっている、(東方諸国の労働者の利益、その上に基礎をおいてはいるが、それとは独自につくられた反日的な態度)。 [編者注：注目すべき結合とは、その国とは、?]

b) 80パーセントが戦争に反対である、それにもかかわらず、あらゆる情報と新聞は組織的に戦争賛成なのである。「我々は立留まることができる」という標語は、立留まる(孤立主義がとられる)ための諸手段を見出そうとしているふりをしていながら(pretending)、表紙の下では戦争賛成なのである。・・・一般的意志・・・どのようなものであれ、ある他の問題(「防衛」として多分に一体化されている。・・・このようにして人々はこの国——自分たちと世界のために支持を与えているのであるが——の無比の地置(die einzigartige Sit.)を確実に可能とし、しかもものぞむこととなる。・・・さらにその下で戦争を準備せんがための全てのことと、戦争が企図されていないとすれば全く意味をもたないような経済的動員と諸施策、が生起しているのである((?)の経営)。

アメリカは自分の市場を掘り崩すために最善を尽くしつつある。・・・敵国の中にある対外政策の部局(Board über for. policy in foe Lands)・・・ [編者注：敵国のなかにある、とはアメリカの中にあるソ連の局か、日本の中にあるソ連の局か?] 決定的となったことは確実である、これについては1920年の大勝利(landslide)と鋭角的連盟離脱(scharfes Abwenden von league)をみよ！ 但し後になって始めて災禍は起こった。・・・本質をねじ曲げたものであるアンケート、NIR局・・・このコミュニケーション・・・

---

23 興味あること・・・合衆国における、ここそこの計画策定機関・・・ソ連邦におけるものと全く似ていること・・・それにこれらの設問表・・・

---

24 労働問題についての逃避主義・・・これらが損失であったが如く、諸要求が満たされることができ、ということ・・・労働層の独裁・・・悪い・・・組合連合はそのように悪くなりうる・・・ギルド社会主義は可能・・・消費と民主主義的スローガン・・・婦人有権者連盟のレベルでは意味のないサボタージュと機構の破壊があり、諸国際連合体(internationale Kartelle)はその諸機関が機械のように活動を拡げており、創造的理念なしに(ohne creative idea)意味のない歩みを拡げている。実处的労働問題、そこではその偏狭さが省みようとはなされないということ・・・労働分配分の最大化は他の経済学である。だが経済部門においては巨大な成果がある、それは非常に多くのことを可能とさせるものである・・・労働組合との交渉がなされなければならない場合、實際上、闘いは負けているのである・・・実处的問題だから異論をつくらない・・・

ロシア問題についての逃避主義・・・そして同じくロシア人とも！・・・教授、彼は自分の野心を遊びごと風に満たしている(ケインズ)・・・共産主義者達は紛争を検討し、それに合理的な準備を整える・・・他の者達は放牧されている牛の畜群のようなものである。そして社会的利潤の放棄が指示される・・・あらゆるルールが拒否されるのならば、かの良き軍備はチンギスカーンよりもずっと悪い・・・軍備競争・・・悪しき論理における・・・信用破壊・・・獄中での自由・・・社会は相互に分裂する、労働組合・・・彼等は何のために闘っているのか・・・自由世界とその成功のためだけではない——そうならば現実に不承認ではなくして小さな腐敗がある。

特権をもたない人々・・・硫酸(H<sub>2</sub>SO<sub>4</sub>)・・・そして私に出来ることは発生してくるものを告げるのみである。

---

25 あらゆる安全と希望の標準が1950年に可能となる筈だったというのは悲しむべきことである——過激派や労働官僚達なしに。・・・産業の戦時における成功は際立ったものではない。・・・より少ない危険でより少ない収益、そしてまた、低位利用(unterutiliz.)。・・・

---

26 資本主義・・・完全雇用(full empl.)・・・それが機能するのは売り手市場にある(in buyer's market)場合においてのみである。・・・戦後問題にはない。

---

## 27 資本主義

合衆国における移行の相対的優しさ(the relative gentleness of transition)——非能率であることは明らかである。・・・長々と時間をかけてなされる育成によって(durch langsam Erziehung)、変えられた環境によって(durch changed environment)、さらには部分的には合意によることによって(durch consent)。・・・このことを見極めて、そして行動することの重要性、疑いのないことは行動することだけが基礎条件の実現だということである。・・・口笛を吹いているジャックのにせの勇氣(supurious courage)。・・・敗北主義についての敗北主義者の言説、逃避主義についての逃避主義者の言説。・・・その前に、ある資本主義世界の中にある、ある社会主義的社会の問題、ある社会主義社会の中にある、ある資本主義社会の問題。・・・ファシズム・・・インフレーションについて、好ましい価格といったことの議論・・・インフレーションに対する対抗手段は、そのトリックを洗いたてることにあるのではなくして、巨大独占企業のもつ装置の生産力の中にある最大化装置にある。

### (3) 大戦直後の世界情勢と社会主義諸政党進出の様々な様相

#### 摘要

問題は今次の世界大戦を通して、影響を受けた正統的社会主義の位置と展望である。未成熟であった可能性を成熟した可能性に変える、民主主義的社会主義にとって好都合な政治的情勢を提供する。だがそうした前進はロシア共産党との紛糾によって歪められたものとなる。諸々の抑圧からの解放という半分の仕事が残されたままである。ロシアはサイドイシューではなくして他の全てを覆い隠すほどの問題である。スターリンは彼の同盟者達を凌ぐ勝利者となり、彼の同盟者達が与えて相当と考えたものを受理して満足するにはあまりにも強いポジションを得た。スターリンのロシアは如何なる者にも卓越したものとなり、ヒットラーが嘗て成したよりも更に多くの諸外国を征服した。そうした共産主義衛星諸国は隔離され、ロシアにとって有利な恣意的な価格体系を通して搾取された。アメリカが対等の立場でスターリンと話し得る唯一の勢力であるが、アメリカの守備隊に守られる外側のレンジではスターリンに対抗する勢力は何もなかった。アングロ・アメリカンの世界とロシア共産圏世界の間に中間的諸国、例えばフランスでは、一個の中心的問題が、ヨーロッパ社会主義のデカダンスとでも呼ばれるべくあった。次の如く・・・資本主義の民主主義的諸相は既に去っている、民主主義的ブルジョワジーは死んでいる、一つの時代の倒壊下での疲れ果てた予後・・・民主主義の勝利、一体何のジョークだ、水先案内人は船を捨てた、産業のシェフと多種多様な社会主義者達が人民戦線の同じボートの中で一緒にいる、そして非採算的な諸産業の国有化を求めている。・・・それにも拘わらず、ロシアにより監視されている共産党を除いた社会主義政党はリフォーマリストであり、プロレタリア独裁制を拒否し、パイオニア的執行部の必要性が強調された。・・・そしてその経済はアメリカの信用供与と援助に依存している。・・・暗さ、混乱、空しさ、陰しさ・・・その他 (編者)

## 大戦直後の世界情勢と社会主義諸政党進出の様々な様相

1 本章の行論は二つの設問に向けられており、そしてその他の何物にも向けようとするものではない。即ち、先行の諸章において述べられてきたこと以上に、我々の時代の社会的パターンに大戦の及ぼした諸影響につき、現時点で告げられることができるのは何であるか？、ということ。この大戦が正統派社会主義(orthodox socialism)の地位と展望に如何様に影響したか？、ということ。この2点を超えては、複綜した戦後の諸問題への精査をなそうとするどんな試みもあり得ない・・・(他に書き込み多数あるも解読できず・・・編者)

---

2 マルクス・・・紛争がある・・・マルクスにせよ、「諸理念」(“ideas”)にせよ、それよりももっと深い利害関係(Interesse)についての理論・・・しかし、それら全ては可能性が未成熟であることと関連している。可能性が成熟に転じる好期である。ロシアは脇道にある争点ではなくして、他の一切の諸争点の影を薄めさせるほどの現代社会の問題なのである。・・・全てが単に共産主義の問題であるというのではなく、ロシア共産主義者の問題だということを想定している必要があるべきである。・・・歴史哲学・・・即ち、闘っている諸々の体制(組織)なのでなくして、人々及び国民とか諸種族と呼ばれている諸グループの中にこれらの人々はある、ということである。・・・

半分の仕事(half work)——何事もなされていない。・・・反対者、譲歩によって圧政と闘おうとしている。・・・彼の戦術的位置(his tactical situation)の中に引き継がれている。・・・

社会主義は諸々のグループを組織するのにベターである、そしてそれ故に重要である、他のやり方ではこうはいかない。・・・

ロシアが国際社会主義者の集団と無関係であるとせよ、そして我々が我々の社会主義を——我々がそれを望み、またそれにも拘わらず、アンチロシアであることを望んだならばの場合に——もつことができるのでは。・・・示威(demonstration)の試みはショウ(show)である。・・・

それぞれの階梯(step)において、譲歩をなさなければならなかった禁猟監視人がいた。・・・如何に平和を動かすかを説明することが容易であるこ



とか・・・決して理解しようとはしないこれらの人々が、如何に快く、殆ど楽しんでいることか。

---

3 実処的問題ではない(nicht positive Problem)・・・

戦争の社会学(sociology of war)ではなくして、あるものは唯、a) どのように戦争が良き政治構造を提供するか、b) 正統的社会主義の行路を提供するか、である・・・

戦時課税・・・大いに人頭税(poll tax)が・・・証するものは何もないが、戦時課税が軍役にある者以外の全ての市民に課せられていることは証明される。・・・労働者達は1800ドル所得の層に入った。そして間接税は300(ドル?)を超える。300:18=16.6・・・

一個の単純な問題であるべきだ。・・・だが明白な諸事実・・・驚くべき現象・・・物事を、それを示そうと欲するままにもっていく。・・・我々のところでは相続税(inheritance)が廃止された。・・・生活の憐れむべき水準(pitiful standard of life)・・・

反対の陣営では、・・・世界に対する隔離(Abschluss gegen Welt)・・・連合の諸機関を再結合する。・・・恣意的な価格の取り繕い。・・・ポテムキンの村(Potemkin's village)・・・正直がなく、失策がなく、しかも全てが天使でない。・・・「全てが正当化される、即ち過渡期だから」、という行論をもってする「除外」・・・

真面目に！・・・理想的なストライキなどはない・・・

経済的な困難もまた、動くことの無能力と規律の欠如にある。・・・

戦争は——そしてこれは戦争であって、平和ではない——最早、大きなニュースではない。連邦物価統制局(OPA)は・・・しかし私は章(chapter)——あるいは帰結について、それにその他に、本書における敗北主義についても、いくらかのことを述べておきたい。・・・序文で・・・

我々は真に驚嘆すべき光景を見ている。戦争——その中で我々は一人の独裁者を位置につけた——の後、自由と安全を求めて泣いている。しかもそれは、もとよりボルシェヴィストではない人々の党派と党派の行為によってである。・・・

我々は今、半分の仕事(half work)をなしてはいないのだ、ということを感じるべきである。付して我々はロシア人を解放しなければならない。戦争の動機として公言せられたあらゆる諸原則が無慈悲に無視されていく中で、苦痛を和らげるどころか、彼等の信頼を裏切り、しかもいくつかの

小国を見捨てた。・・・自由を窒息させ、征服を承認する、スペインやシナをいじめる。・・・

ヒューマニティと悪しき取扱いに対する反対(contrariness to ill treat)・・・安全、大英帝国、法——決して多くはない。・・・ヒューマニティ、小国、だがユダヤは・・・異教徒で、そして不安で、しかも弱いというだけで、鋭い「蔑みの言葉」(“epithets”)を受けている。

---

4 委員会と講演会で仕事をする事・・・非情の論理に逆らって、政策に向かっては合理的に、更に不可能であることも。・・・専ら非情の論理に逆らっていじくり廻されたものの中にある民主主義的政策の所産(outcome)・・・満足と一つの発見・・・敗北主義と逃避主義——宥和(appeasement)・・・

私は本書を序文にあるが如きものとしている。・・・本書は政治的な書物ではないし、そういう意図ももっていない。・・・私の意図は、マルクス主義者の言い分が、私が検討してきたように、私自身または他の人々にとって愉快なことであろうとなかろうと、部分的には正しいということの検証(proof)なのである。・・・恐らくは私を信用してくれている読者もあろう、私はそれを望んでいる。・・・儂い(無益)なことなのだろうか？・・・充分である、それを知っておれば・・・

敗北主義？ 最後の章で今の時代の逃避主義者の態度を扱う。・・・もし爆弾が落ちてきたら、私はそうするだろう。・・・見出された者を助ける・・・そしてそれは新しい章に対しても適用する。・・・

フランス、ポーランド、フィンランド、そして、しかしながら・・・移行(Übergang)、それは尚も一層に困難であろう、疲労(Müdigkeit)と強いられた逃避主義(escapism enforced)の故に。・・・我々は彼等に対して責任をもつし、責任がある。・・・半分の仕事をなしただけのことである。・・・( ? )・・・

過失は、無知であることではない。・・・我々は真直ぐに爆弾の方向に向かつて舵を切っている、丁度、戦争に向かつて舵を切っているかのよう。・・・常套句(truism)・・・更に先送りをする・・・「体面的」防衛(“honor” defense)・・・もし我々が一足飛びに反対して飛び歩いていったならば、何故に我々は婦人や子供達の1000人の内、何百人を殺していたというのか。・・・

ロシアは民主主義的となるであろうか？ ドイツのように！・・・我々は自由を望んでいる、そこで何を我々はなすというのか？・・・何故我々はポーランドが自由だというのか？・・・殆どの場合、なるようになさせるという解決法(letting things work out)である。・・・我々は唯それだけの——裸の——人間なのであり、内実のある民主主義の中でのみ成功を得るのだ、と——それでは何故、そしてその場合、我々はこのことを輸出ビジネスの前に置くのであるか、ということ。・・・宥和(appeasement)・・・逃避主義、及びきっちり規定された戦闘配置(battle array)、そして自ずと告げられる。・・・姿を見せない首領と良心の咎めに打ちひしがれている巨人を伴って・・・二次の爆弾についての軽薄な語り(facile talk)・・・その上にビジネスマンの顔を置くということ。

---

5 一個の中心的な問題がある。これに向き合っていないような問題は役に立たない——明らかにカトリック教会もまた。・・・

ヨーロッパの退廃(Décad dé l'Europe)・・・他の事柄についてのカムフラージュであるか、さもなければ無意味であるか、ともいうべきものの組み合わせ。・・・現実には一層に困難な状態におかれた社会主義的社会党員達がいる——彼等は教育(Erziehung)、人間的価値(menschlichen Wert)、国有化(nationalization)を望んでいる。・・・ソヴィエト帝国主義を語るところでは(on a parle de Impérialisme Soviétique)、しかし、動機が搾取であるとか諸市場の制圧ではなくして、戦略上の言及や諸原料の確保であるとして。更に、恐慌の中にあっても衝突することなしに、それほど見事なものであるとして。・・・そしてイギリスの労働党(主義)は——支持であり、更にもっと早くからの最先端性(frühere frontiers)を保持さえしている、しかもアメリカと調和している。そして似たような保守党型の対外政策を採っている。インドシナの支配とポーランド及びチェコでの国有化に対する抗議。・・・更にそこには一層信じやすくなることと、一層盲目的になること(aux plus credules et aux plus aveugles)が考えられるべくあるのである。・・・おびただしいロシアの視察・・・隠れ資本家であるにも拘わらず！(trotz emservelissement capitalists!)、合衆国とロシア国の間の相克の中にあって党派を手に入れる(prendre parti in conflict zwischen U.S. und Russland)、そしてそれ故に単一の労働者党となっているのであり、そして自陣の中にロシアの如きものがあるという理由こそが問題なのである。・・・共産主義者達に対しては、ロシアは取り囲んで

いる監視人(épierist)なのである。・・・上の階に位す革命(revolution par en haut)(上流階級による革命)・・・

このようにして、直ちに、我々がここで聞くことは儂い無益なことだ、ということになる。更にアメリカのブルジョワジーは満足を求めて騒ぎ立てる。・・・合衆国では、野心的なブルジョワジー民主主義がアメリカの資本供与と援助物資によって生き残っている、という理念があり、そしていつも労働者層が打算を交錯させている(eben die Arbeiterschaft die Rechnung durchkreuzt)。・・・ヨーロッパの革命は再度一個の可能性となる。そしてアメリカのプロレタリアートの手中の諸領域が壮大な征服に向けられる(pour la grande conquite)。・・・「資本主義に対しては」一つの本質的である経済部門が抜き取られる。・・・かくして、はかり知れない反作用がアメリカとアジアにもたらされる。・・・

---

6 S. マリーネット、国際関係雑誌、1946、1月・2月号、「押し付けられた社会—民主主義」(Social—Démocratie dans l'imposer)・・・民主主義の勝利——一体何のジョークだ?(Was it a joke?)

暗さ、混乱、空しさ、陰しさ・・・そしてアメリカにおいてもまた、勝利についての一体化された結末を欠いている。・・・イギリスにおける労働党の勝利・・・

政治家達と煽動家達がそうしたことを知らないであろう牡牛のように振る舞っている(les politicians und agitants et tout est un jeu de Stier, der von ihnen nichts wissen will.)。古いシステムが遺骸から復活することは決してない(Das alte System ne renaitra pas des cendres.)。・・・むしろ小さな革命的諸グループの内においてのみ、それは多い——だがいつまでもという訳ではない。・・・更にそれは何等かのある革命的熱意で以て事をなそうとする何者をももっていない。そうするには古い舞台は何の関心をももたれない、ということが明らかにされている。・・・

レオン・ブルーム(Blum)、疲れ果てた回復期(予後)、水先案内人が船を捨てた(Pilot a quitte le bord.)・・・一つの時代が崩壊(Un monde ecroule.)——あるいは、それはずっと以前から認められていた。・・・没落・・・残っているものは?。・・・資本主義の民主主義的局面は過去のものである。・・・民主主義的ブルジョワジーは死んでいる——合衆国ではそれは失政(misgovernment)を意味する。・・・他のものがある。ブルームの言う、人民の、しかもエネルギーに満ちた民主主義(démocratie populaire

und energique)、人間性の体系に属する・・・産業の管理者と基本的には社会主義者である者が、同じボートに乗っている、即ち、ブルジョワ的民主主義の首尾一貫した延長がある(Der Chef d'industrie und Sozialisten im grunde in same boat : prolongment logique der bürgerlichen Demokratie.)。・・・しかしブルームは、古い形態は過去のものになったと理解しているのでは？ それにも拘わらず、そこここでパイオニア的執行部(pioneer executif)の必要性を強調している。・・・ブルジョワジーは拍手する、そして小ブルジョワジーによるだけのものではない。・・・ドゴールの弁明(de Gaullistes Apologie)もまた。・・・

現下の論点となり得る諸々の事柄、即ち、文化、計画経済(Dirigismus)、アメリカ型の金融、自由(自由なる企業人達(die freie entrepreneurs))、大規模協同企業(Korporationismus der Groszen)——不採算企業の国有化に伴う。・・・

今や本書は、・・・如何に驚くべきことであるか——これがその外国におけるその評判なのである、そして利潤を約束してくれる唯一のものである。・・・長所(Vorteil)、利益、危険、ヒューマニティを導いていること、しかしながら残忍さに対する痛恨の仕事(remorse work)、我々は聞きたくない。・・・

合衆国においては、知識人達はどのようなのであるか、彼等は沈黙してはいないのである。・・・そしてロシア、だが如何に広範に反転した様相があることであるか。労働指導者達は、しかし、みじめな状態にある。もしその長達(major)が問われるならば、依然としてツアーリストであるだろう。・・・スウェーデン、オランダ——政策、民主主義、政治に対してみるべき仕事をなしつつある社会の驚くべき実行力。・・・

最初のプロパガンダは説得するのに、狼だ、狼だ、とあまりにもしばしば叫んだ。・・・理論家はプロパガンディストで、過激であり、社会主義者である。・・・ポール・レイノード(Paul Reynaud)・・・日本における文化と諸価値をさえも破壊することを欲している。

---

7 かくして、中道(Mittelwege)、融和(Lösungen)、妥協(Kompromisse)といったものは、この情景(Terrain)の上に留められる。各共産党自身がそれをなし、輸入削減に対する CGT(労働総同盟)の戦は、その場合、賃金についての階級闘争となる。1945年12月2日の法律、国有化について

(Über nationalization)、(多数のありうべき回答の中の一つであったとしても、銀行危機(*crise Banquier*)への回答としてだけのものであった)。・・・但し全てはブルジョワジーの小会派による第Ⅲ共和制への願望を込めた資本主義的言い回しで制定されている。それ以上に多くの人々が共和国の廃止反対を望んでいる(尤も、それは尚そうになっていない)。ブルームの立場は左翼の改良主義者である(*réformiste de leile gauch*)に過ぎない(レーニン!)・・・更に彼の喜びはそうした廃止反対についての戦線の統一の中に示されている。しかし共産主義者達も尚又それを行う——ただ実際のところプロレタリアートの独裁としてはなされはしない、ということ。・・・

社会主義者達はボルシェヴィクの条項を聞いている。共産主義者間の対立はあっても、戦術と自由とロシアについてだけのものである。ロシアと革命的な性格についての影響の下で、一個の勝ち抜き戦がおかれているのでは?・・・チトーは社会化をなした!、非民主主義もなければ赤軍の力もなしに!(*ohne indemocratee und russische armée!*)。・・・連携経由での革命は善か?・・・全ての事柄はロシア的視角に反転する。・・・全ての共産主義者の勝ち抜き戦の戦術の変化と反復されている宣言文の変化はロシアにおかれる忠誠によって解明される。・・・それに合衆国との関係が。・・・そして、それこそが革命に向かったの誠実性の旗印なのである(*das ist marque de leur fidélité a la Revolution.*)。・・・社会主義者達は言う、美しき革命(*schöne Revolution*)、資本主義アメリカと社会主義ロシアの間の対立。とは言え、一方か、または他方の完全勝利のみがその結着(*das Ende*)である、ということは誰もが研究している(しかし社会主義の為にではない! もっと先がある!)。・・・

全てが採用される、しかし社会主義は一種の退廃である(*a decadence*)。・・・恐らくは次のことであろう。多分誠実にブルジョワ的民主主義の復活(*renaissance*)に望みをつないでいるのが人々の真意だからである。・・・それこそが何故に痛恨を伴いながらも、あらゆるルールを踏みにじった戦争を支持したのか、の理由である。・・・第二の爆弾——但しそれは自由、安全、福利の為のものではない。・・・諸政策と政治力学(*policies and politics*)・・・労働組合のルールはそれではない。・・・

---

8 よろしい、が尚、国際経済事情はどんな希望を妥当とさせているのか、という問題がある。・・・戦争の経済的帰結と現在の政策——それ自体そ

れ程の大問題ではない、イギリスでは人的装置は手付かずのままである為、そう悪くはない——。そこで次のように集約されよう、世界革命は——正にマルキストではないのだが——我々の行動によって、更にそれ以上のものでなく、実質的可能性(a real possibility)をもつ、と。・・・

意味だけのもの(der nur Sinn)なれば、生活といったものの中にその産物をもつことができよう。・・・ウィルソン・・・完全雇用をもたらす為の輸出の為の輸出。・・・異国である国々の工業化・・・それを規制する計画を開発する。・・・イギリス、輸出に対する必要性がある。・・・経済問題と実処的諸問題一般(überhaupt positive Probleme)はさほど悪くないこと。恐らくはそれが前提(voraus)となる。・・・こじつけなもの(sophism)は・・・それについて何がなされるべきかに対し、平和—ロシアとさえも、と。・・・人々はロシアのケースについての彼等の正にその諸行論の意味するところを考究していないのである。一人の独裁者は二人の独裁者よりも危険である(Ein Diktator more dangerous als 2.)。・・・望みに対しては望みを、事実に対しては信仰を(hope against hope, believe against fact)。・・・恐らくは逃避と宥和(escape und appeasement)・・・両権力の正確に対立した(正反対の)性質。・・・更には権力と保持されている特権、即ち、第一にカウントされなければ、彼の生活に不安定が生じ、且つ奴隷労働となる。・・・しかしロシアの軍備は・・・ロシアの社会主義・・・。「もし、それが20年間になれば」・・・

フランスは・・・リーダーシップを欠く・・・結末の軍備——しかも社会主義を・・・ロシアの中のロシア・・・我々をして可能性の中に帰結を求めさせよ。・・・リーダーシップがない。・・・スペインも今一度・・・諸ルール、しかしながら半分の仕事・・・国際連合について・・・どのように政治体制を駆り立てるのか。・・・政治家はそのところを見究めようとしなさい。・・・諸恐怖の排除・・・あらゆるカード・・・議会の諸論点・・・ファシズム・・・

ロシアの為のロシア、ということ・・・もっとも初歩的な権利の剥奪・・・諸々の恐怖・・・奴隷・・・いくつかの要素、殆どプロパガンダであるものによって吹き込まれた諸々の他のものであるかも知れないが。・・・しかし反対しておかれている最強の諸勢力は既に摩耗させられている。・・・政治——そして、どこにあらゆる支持が招来するのか。

---

9 彼は彼の同盟者を上回る勝利者である。同盟者達が——望んでいたと、

あるいはその為闘っていたと想定することが可能性としてあり得るとしている——あらゆる事柄の予想を裏切って、彼は成功したのである。ロシアをツァー達(the Zuars)の下にあったどんな勢威を遥かに超えたポジションに引き上げることに。更にツァー達の意志を彼自身の意志に結び付けることに。そしてこの状態は、比肩する者がいない程にあまりにも強力な一ポジションからのものであり、事実、彼がもっていたであろうそのポジションはこれらの同盟者達が与えるにふさわしいと考えたものは何であろうと受け取って満足している筈のものであったのである。彼はヒットラーが、嘗て侵略した領域よりも更に多い異邦人の諸国を征服した。彼と対等の立場で話すことのできるのは、一つの権力以外にはない(合衆国のみ)のである。そして、彼の同盟者達が歩を築いてきた所においてさえも、ロシアはロシアにとって実質的に重要な部分の全てを得ているのである。・・・構築において民主主義を遥かに超えた諸ルール。・・・合衆国守備隊(U.S.garrison)の守備領域の外にあっては、評価に値するような権力はどこにもない。

ロシアとの紛争・・・軍拡競争・・・敗北主義の形態・・・ロシアのために国王の仕事を引き受ける天才。第1に一個の人物の業績である、ということの言及！・・・更にさほどに強力な地位にはなかった人物の、・・・彼等の希望では恐らくはあり得なかったこと、に逆らって。・・・あらゆることを達成し、その上更に快適に設定された威信が内外のロシア人の国に与えられる。・・・しかし、帝国主義者ではない、と不思議にも今信じさせられていることがあり得ている。・・・半分の仕事(half work)・・・我々は正当化する必要はない——その仕事が彼に対してなされる、ということ。・・・もし、我々が全てボルシェヴィストであったならば、希望に逆らったものを希望することである、何がどうあろうと。そしてその場合、ヨーロッパ情勢と合衆国は・・・キリスト教的博愛、または民主主義、または自由、あるいは——少なくとも——私的プライバシー、またはヒューマニティ、そうしたものの信念が力なく摩耗している。・・・イギリスにおいて唯一の(政治的)可能性がある。・・・資本家達——事業から外されている(ohne business)・・・独裁者の大衆把握・・・労働者、知識人・・・途方もない威信・・・自然な結果・・・彼の人生の最初の過失を犯すことがなければ・・・滲透・・・ポリシーII、必要なところでは譲歩する、他の人々が極限的にまで民主主義と自由を欠いた状態に赴かされているために、それが可能なのである。・・・搾取・・・名誉ある勝利の中の集中収容所そのもの(concentration camp selbst in honor victory)。・・・診断



が益々重要となっている。・・・富裕層百万人の中にみられる悲惨な生活水準・・・無遠慮になされる軍拡競争の開始、それは一つの目的だけをもちうるものであり、しかもそれ程のトラブルはない、という。・・・そこでは社会主義は細目の一つ・・・帝国主義・・・関係、単一政党はだからして反民主主義的であり、言論と出版の自由を欠くことは専制に他ならぬことを告白しているものである。

どのようにして、こうしたことがもたらされたのか。・・・歴史における諸驚異の一つである。・・・全てのこの不器用ないじくり、何が踊っているのか。・・・しかし信じられないことが多い、即ち、どのようにして人々がこのことを見透かすことに失敗したのか、更にはどのようにして歴代ツァー達の中の最大の者が多くの国々で共感(sympathy)を享有している、といったことがあり得たのか、が驚きである。更に次のことが後者を説明する。彼の奴隷制は恐慌もなく完全雇用にあると。諸事実との馬鹿げた相克の下にある諸々の章句が熱心に受け入れられている、ということ。・・・どのようにして彼の統治区域を独立国家として、更に彼の機関(his agents)を独立した諸国の代表する者達として、受け入れさせることが可能であったのか。・・・

宥和を試みることの決定——逃避主義・・・彼の慈悲にすがっている周辺諸国家・・・落ち着いて！・・・博愛・・・名誉・・・教授が闘うことに反対しているのは正にこのこと・・・短い期間での同じにして風味の良いサービス。・・・更に資本家達は、ここにいれば安逸であるようにみえるが故に、満足している。

---

10 とりわけ反作用(reactionary)が観察されてしかるべきであろう。しかし、この反作用自体はそれを企図するものではない。・・・世界革命は今のところ閉ざされている。・・・何故に、そこで、先ずは戦争なのか？・・・何故に全ての標語(Schlagwort)が解放を断念しているのか？・・・予言もないし、為されるべきことも出てこない。・・・ロシア人はスターリンが行ったことの全てを防衛するところの劣等国民(inferior Leute)である。・・・何故に民主主義者は、そして平和裡に。・・・

バルカンにおいて、近東において、極東において、二つの陣営の間に。・・・ロシアの守備隊は強力ではあるが、不完全である——彼等(諸国)は統

合化させられるか、あるいは棄てられて自治領域の外におかれるか、がなされなければならない。全帝国は直接的または間接的に脅かされているのである。どんな個々の問題点をとっても、諸々の妥協が諸状況を——それに諸形勢を——暫定的に救っているのである。・・・結局において完全な降伏だけが平和を保証することができる。多かれ少なかれ、挑発に乗ってドイツと組んで戦争に走った国民は、そうした彼等のパターンに従った国の行動にふさわしいものではありそうにない。・・・しかし、たとえ、それが、a) 崩されつつあり、また、b) イギリスの保護下にあったとしても、治療は一国の政策としてあり得よう・・・。

一国の対外政策は、パターンとなっているものと、伝統から来った行動の組(集合)である。ドイツ人が今にも宣戦布告した軍隊を飛ばしてくるであろう、ということが直接信じられていたように、民主主義には、狼だ、狼だ、と呼び立てるムードを浸透させるような、そうしたことを除いて、保証するものはない。・・・スターリンは言う、安全は倦怠である、何となれば、諸国民が闘うことを欲しないから(safety is tiredness, denn Nationen do not want to fight.)。・・・それが意味している「国民」とは何であるのか・・・

「安全」(“security”)——のフィルターといったもの——を切望している、そして今や一挙に！？ そう、但し戦争の経済的無分別性は、委しく述べたい！ 立ち還るものが何もなくなるとも！・・・

---

1 1 我々は知識人達のことは無視することにし、状況を検討するのにケーススタディを以てする。

a) 命令に服従するヨーロッパの共産主義者達、b) 危惧(fear)、c) 合衆国の国内政治・・・敗北の形態と敗北ではないと正当化すること・・・キリスト教精神、自由、民主主義、公正な扱い・・・同じものではない、だが、ここでは問題ではない。・・・我々は事実を必然であったとして受け入れる——さもなくとも、少なくとも私有財産制だけは。・・・

際立った事実・・・しかし、更に際立っているのは、結末に対する態度である。・・・半分の仕事(half work)、そして恐怖と結び付けられている——a) ポーランドとフィンランド、b) 諸々の脅威を防ぐための諸方法を我々が奪われてしまった場合における、これらの国々の防衛——・・・関心、義務と名誉・・・疲れ果てた、政治力学・・・政治家は告白しなけ

ればならない。・・・

しかし明らかに、ロシア的要素は無駄にはできない。・・・我々は反対に(ロシアの経済が)成熟してはいなかった可能性を取り扱ってきたのである。それが成熟に至った経済に転じるのは今である。・・・しかしながら、先ず最初に我々をして、この政治的天才の驚くべき成功(**this stupendous achievement of political genius**)を讃えることを締め括らせよう。そのやり方は敵達と疑わしい友人達を自分に都合よく操ることで(**by pack**)きっちり「そのように」呼ばれるのである。第2に、それについての診断が、第3に、ロシアに対する態度が、問われるであろう。・・・いくつかのやり方がそれに至らせているが、それが望まれたものであるのか、または、あらかじめ見通されたものであるのか、それに、そうしているのが彼等の国の指導者達によってのものなのか、または、その大多数の人々によってのものなのか、ということが知覚し難いのである。・・・  
反対者がいない。・・・独裁者の利益・・・他の全ては追随者(**followers**)としてあるのみ。・・・政治力学の中にある、あるいは4勢力の中にあるヨハン。・・・

スターリンがなしたことを如何様に民主主義はなし得てきただろうか。・・・ムードに依存した政策は合理的たり得ない。・・・民主主義、放任ではない、秩序正しい法の根拠ある過程。・・・一人は一人をカウントする、——専制性(**autocracy**)ではない、従属——軍事的ではない、そして近年においてのみ宣言された。・・・社会主義は、第5次の植民地化を意味しないのならば、副次的な事柄である。・・・帝国主義者、搾取がなされるのは、a) 賃金によっての、b) 課税によってのもの。・・・ポジション、即ち、a) 立場、b) 整理統合、c) 従属諸国、d) 慈悲にすぎている人、e) イギリスとスペイン以外の全てにつき部分的に。・・・紛争は、ロシアはロシアであるということ。・・・

---

12 ・・・等しく、良識と常識によって指示されるというやり方の中に、このことは採用されるべき診断と予見となるであろう。但し、ラテン諸国や日本に対しては、様々な但し書きが付け加えられるべきであろうが。・・・即ち、労働者中心体制(**laborite régimes**)は、——共産主義者達のように多くはないけれども——20年代にあったそれらよりもずっと

ラジカルとなっている。このことが含意するところの全てを以て、経済的、政治的、そして文化的に「管理資本主義」(“Administrating Capitalism”)であることは疑いない、しかも、一層に明確な目的と一層に強い権限をもって、それを管理しているのである。・・・本書の行論が遭遇した誤解という視点において、私は諸事実の有無についての私の分析の諸帰結が提示しつつあるのだ、ということは今一度指摘しておきたい。・・・

しかし、ロシア的要素は無視されることはできない。反対にそれこそが世界中での支配的要素なのである。これまでのところ、我々は成熟していなかったものの可能性を取り扱ってきたのであるが、今やそれが成熟しているものの可能性に転じる時なのである。戦争における真の勝利者の位置にあったスターリンは、単に戦勝国の指導的メンバーの一人であるという意味においてのみではなく、・・・の意味においても同じくであった。

---

13 地上の楽園(Paradise on Earth)・・・合衆国における危険はボルシェヴィズムでもファシズムでもない。危険は諸政府の無能とポリシーである。・・・戦争問題はあらゆる力と最高度の犠牲を前面に押し出す・・・落ち着いて！・・・これが疑いのない結果であるだろう。・・・それは共通の知識である。・・・社会的民主主義・・・改革・・・管理資本主義・・・革命が天国の「ファシズム」を鎮圧する。・・・民主主義とは何か・・・大きく留保されてあるもの(the great reserve)は公的行政の合理化——(社会的に合理的な高揚)・・・最上の回復(choice recuperate)、ウェーバーの実地的問題(positive problem)・・・偉大な可能性！・・・400億ドル、それだけで低所得を補充する。

---

14 小さな公共の分野では、無駄(浪費)といった何事かは問題とされなかったような、そうした国のことにも想をめぐらせよう。・・・官僚制度の抵抗はあるだろう。・・・

読者にとっては、これらの諸条件が充たされることがあり得る筈がないとみられよう。完全な充足は、実際に、然るべき多くのことを要求するであろう。政治的リーダーシップにおける然るべきエネルギーと責任感、行政諸機関におけるそうした無私(self-denial)で細目に渡る能力、世論からよって来たる然るべき支持。その然るべき条件の水準は、それをつくるこ

とは可能性としてはあり得ない程に高いものである。こうした路線に乗った政策は、人々のもつその最も可愛がっている諸スローガンのいくつか、及びその最も深く根を下ろしている諸信条のいくつかに反抗して進行するものである。圧力団体は抵抗するであろうし、更に現行の浪費の体系によって生活しているような全ての人々の存在は、トラブルの尚一半でしかないであろう。他の一半があり、それはあらゆる善意にして(**well-meaning**)浅薄な諸々の頭脳から出てくるのだが、その人達こそ世論形成に大いに役立ち、またその浪費の体系——それに数十億を注ぎ込むことにより、あらゆる困難と取り組むということから成り立っているのであるが——が繁栄の主要な動因(**the chief motive power**)である、となす説を納得することで自己満足しているところの人々なのである。・・・

起こり得る最悪のものは資本主義の末路であるだろう。・・・

#### (4) (3)の補完的パセイジ

##### 摘要

信じられない逃避主義、見え透いた無益さと希望に反対する希望を伴った自己欺瞞・・・国際連合は責任の欠如をカムフラージュせんがための存在である。・・・共産主義陣営の優位は諸情況を検討してその上で決定的な諸方法を探るところにある。・・・人々やそのリーダー達が本当にソビエトシステムを包攝すると考えているとしたら、爆撃による自殺以上の何事もが語られてはいない。それは20年代に資本主義の将来に対して楽観的展望をもつことによってなされた自殺と似ているが如くである。・・・イギリスにおける労働党の地滑りの勝利、だが比例代表制のもとであったならば多数派には達していなかった。・・・労働党にとっての難しさは資本主義の富や地位を移すことなくして、自己を規律するところが道徳の教師以上のものなのだということ。・・・ドイツと日本の極限的な窮迫、そして悪意のある破壊・・・だが永久に打つのか、義務であるかのように、その診断は今一度やり直す必要がある。・・・社会主義の過激派の馬鹿らしさ・・・フランスでは過激主義が経済だけでなく社会主義への前進を妨げるところが如何に大であったか。・・・アメリカはどんな有力な社会主義政党をももっていないが、諸産業、諸価格、諸投資を制御し得る官僚制を備えている。・・・戦時経済のねじれた状態からの回復が優先的争点となっている。・・・如何なる直接的攻撃の危険からも免れており、且つ倫理帝国主義に向かうには疲れすぎている。・・・そこで他国の非民主主義的で抑圧的な体制に反対する対決においては、当面のところ逃避主義が心中に滲透している。・・・しかしながら民主主義にとっては半分の仕事だけが第二次大戦を通してなされただけであり、且つそうした状況は何もしなかったよりも悪いということである。・・・次期大戦で半分の仕事をなし遂げること、そしてその過程の中で社会主義にむかってのアメリカ自身の道をとるとということ・・・その他 (編者)

(3)の補足的パセージ

1 明らかな空しさ(**palpable futilities**)と希望に反対する希望(**hopes against hopes**)をもって自己欺瞞するような、信じがたいこの逃避主義よりも、かくも注目すべきもの(または当然となすべきもの)は何もない。・・・それを偽装するために、今では全てが国際連合の目的ということで、既に揃っている。・・・それこそ逃避主義であり、責任感の欠如である。・・・然るに、この共和国の人々はボルシェヴィストではないのである。・・・墓穴を掘った国(**country undermined**)?・・・  
ニューディール(と労働組合)は勝っていた、もし彼等のカードがうまく切られていたら。・・・あらゆる秘密は、貴君が未だあまりにも弱すぎる場合には戦いを強いるべきではないということである。

---

2 賢い歴史家になる方法・・・共産主義者の優越、それは彼等が状況を検討し、そして断固として積極策をとろうとすることより来る。・・・但し、諸事実はイギリスとの同盟が存在するかのようにはおかれぬであろう。・・・軍拡競争(**armament race**)が発進している。・・・重々しげに不平を鳴らされている教会・・・ギルド社会主義・・・あらゆることを充たそうとする可能性・・・2100-40-40・・・何故に国家は、利子を支払う場合に、負担が掛ることがないというのか。・・・そのようにして、その差は長期には巨大なものとなる。

---

3 ヨーロッパにおける社会主義——殆ど義務の履行を注ぎ込むかのようになされた。如何なる意味で、世界革命は実現されるのだろうか、——それに世界支配は(**Weltherrschaft**)。・・・スウェーデン—スイス—オランダ、これらは荒廃させられた(**ravaged**)国々である。他に残っている国々、即ち、スペイン、ギリシャ・・・合衆国(U.S.)、奇妙に当てはまらない。・・・

---

4 カトリックのカレッジとユニヴァーシティ・・・恐らくは20年後には必要がない(但し、人々は言うであろう——必要なものは何もない)・・・強調されるべきこと、それは一人の人物の仕事だ、ということ。・・・彼がその状態を必要としていたが如く、彼は一人で支配した、ということ。・・・システムの類似性がある。・・・それに至ったものと同じく当を得たものであり得よう。・・・逆の役割を以てする同じ行論。・・・逃避、そうさせているものは、問題は正に爆弾であり、そして一回や二回の爆撃である。・・・なされた努力は苦痛を叫ぶことであった。

5 1945年7月26日 英国広報・・・「少数寡頭制」の終焉、徐々に？ (Ist des Ende der “oligarchy” gradual?)

	5月	7月	
保守党	358	197	35パーセントから45パーセントへ、労働党の得票は8.3百万票から12百万票へ、保守党は、11.8百万票から10万票への変化があっただけ。・・・議席一人当りの票数は、労働党3万票に一人、保守党は4.7万票に一人、自由党は8.7万票に一人。・・・
自由国民党	26	13	
国民党	9	3	
労働党	163	393	
自由党	18	12	
I.L.P	3	3	
共和党	3	1	
共産党	1	2	

比例代表制の下にあったならば、労働党は299議席、保守党は248議席、自由党は57議席をもつべきであった。

選挙人が3万人よりも少である特権選挙区——大学以外——は52であり、そのうち43議席が労働党へ。・・・8万人以上の選挙人の選挙区は43であり、そのうち22だけが労働党で、20が保守党へ。



6 職業による半労働党的メンバー (half-labor's members) である  
内訳・・・

医師、教師、公務員、技術者、ジャーナリスト (33)・・・  
イギリスにおけるストレートな地滑り・・・ロンドンを除いたイギリスの  
選挙区 (boroughs) ロンドン49労働党議員・・・イギリスの郡部にお  
いても (労働党110、保守党112)、そして投票数はもっと多い。・・・  
保守党4.4百万票に対して労働党4.6百万票・・・新しい世代・・・知  
識人の重みは？・・・

---

7 留意されるべき事情 (merkwürdige Situation)、即ち、労働党に  
とっての困難は資本主義的な富と資本主義的な権力の座のおこぼれに預  
かることではない。このようにして、ここにおいても困難は善についての  
教師達よりも規律をよく守ることであり、そして、他のいくらかの人がそ  
れをなすことを、永くは当てにすることはできないことである。・・・大  
戦後に残されてあるものは釣り合いを失した損失であるか、またはそれ以  
上のものではないか、である。・・・ロシア的要素は、社会主義は一種の  
反動を経験する、という作用力をももちうる。・・・ロシアの世紀・・・

---

8 敵役不在 (kein Gegenspieler)・・・それは政治的思考の領域 (the  
sphere of political thought)の中にある。・・・誤った認識への闘争的固執  
——但ししばしば自覚されていないが。・・・誤った認識としての行動の  
過程の中にある諸目的、諸章句、及び言い張ること。・・・それはいつも  
のことである、だが運命付けられ得る。・・・永続する傾向——分析が既  
になされているように戦争とは関わりなく。・・・そしてそれは強制なし  
にという様相をとる、何となれば、カーン(汗)が待望されてきていると言  
い得るものであるから。・・・政治的にはそれをあり得ないと考える人々  
もあるが、狼だ、狼だ、と叫ぶ人々もある。・・・政策——欠乏からよっ  
て来たる政治力学・・・  
しかしながら・・・

フランスは再び戻ってきた民主主義の方に向かって歓呼した  
(jubilate)?・・・交通妨害(process verbal)・・・如何に過激派が進歩を  
阻害したことか——経済的に、但し社会主義に向かっても。・・・あらゆ

る変化の作用に即して忘れられてよいものは何もない。・・・生産方法の変化、それは諸要素の価格変化、あるいは拡張によって、更に新生産物の出現によって、導かれる。E.A.G.ロビンソンは著書「競争的産業の構造」(E.A.G. Robinson in “Structure of Competitive Industry”)の中で、最適の集中について(über optimum Konzentration)を示している。・・・低位利用(underutilizing)に即して産業は自らを創出していく、ということが重要である。・・・それ程単純ではない(というのは、輸入が閉ざされた場合には輸出も減するものだから、・・・外国が買うことができず、しかも輸出産業は一層に能率を高めることが容易にできるものだから。)・・・

---

9 フランスにおけるボルシェヴィスト、・・・また絶望的・・・ペロン、支配を達成した二重の母(eine Doppelmutter)である。・・・政策は民主主義の政治である。・・・そしてそれは、決してエコノミストではない人物の大衆操縦術(exoologie)の中にある絶対的支配者に対する反抗である。

---

10 そして私はフランス国に一個の「慰めと忠言」(“Trost und Rat”)を与えるべきではなかったのでは?・・・そして、とりわけ、日本についても・・・

---

11 フランスでは誰もが社会主義者である。・・・ブルーム(Blum)は協調組合機構の賛美者であると共に、調整者である。この機構は全てを掌握し、政府に対し無敵の力をもった——けれども、ドイツにおけるように、カルテル組織から何物かが育て上げられることはなかった。・・・

合衆国はビシー政府と交渉しており、今や敵国協力者に対する魔女狩りのような全てのことを支援している。・・・

400万人が政府勤務者(Staatangestellte)である——以前に比して10倍にも至っている?・・・

サンジカリスト(または社会主義者)同盟は1936年以来、共産党系労働組合と共闘していた?・・・それは確かに全ての自由な選択を抑圧する共産主義に大きな役割を与えたが、但し本質的であったのはロシアであり、その他では私的所有には賛同者でさえあり、例えば銀行や炭鉱の社会化は彼等の主張に逆らっていた?・・・

M.R.P、即ち人民共和派は管理者側であり、ド・ゴール派(de Gaulle)と( ? )は3分の1以下であった。・・・

---

12 イギリスの盲目性、そしてニュールンベルグ(Nurnberg)とドイツの窮迫・・・そうしたこと、そして言われるべきことが何であるかを傍観するほかはない。・・・独裁制由来の血統は、また民主主義の場合の内にも。・・・一本の新しい矢・・・ファシズム・・・

議会制の類(閣議体制)が難色であるので、ファシズムとは取引しな  
い。・・・適応力、それにそれほど大きな圧力は必要ではない。・・・

宣言された意志・・・リーダーシップの独占・・・自己資金調達・・・  
帝国主義の条項・・・合衆国における産業の直接的行動の機構について・・・  
要点は支払いではなくして、その必要性を引き起こすことであり、要点は  
必要性を——必要な場合に——切り下げるのではなくして、原則由来のも  
のとする、ということ。・・・長期的な生産の能率と雇用——現存設備を  
使い尽くすことではない。・・・

---

13 大英帝国は強かった時代にふさわしい存在であり、この諸困難は労働党にふさわしいものである。・・・(但しさほどに悪いという訳ではない、即ち、投資と福祉配慮力と保持された地位)・・・ビーバーブック、今は危機なのか?・・・神経の問題・・・不足という標題(Überschripte)は一つの徴候であるだけである。・・・古い時代は陳腐化しているといったこと。・・・

機械化の為、行われる600以上に及ぶ炭鉱国有化(Coal Nationalization)・・・

このようにして、本章の3つの諸問題が、・・・a) 労働側の勝利、b) ロシア問題、c) この国での生活・・・

フランス、日本、ドイツでは何が・・・悪意のある途方もない破壊・・・今日誰が再度に渡って良くならしめなければならない、というのだろうか。・・・偉大なる戦い・・・だがそれは社会主義に向かったの本質的な運行ではない。・・・とどまっている、そして全くのところ、社会主義一般でないだけでなく、特殊な専門家でのそれであって、人民でのそれではないということ。・・・

不可避性(Zwangsläufigkeit)、シナが唯それをなし得る。・・・

予見における戦争の諸結果は？・・・他の場合にどうであったか、との比較・・・第一次大戦の作用と第二次大戦の作用は？・・・共産主義(党)の計画——ブルジョワジーの眼の前では全く明白である。・・・

---

14 そこに、かの島はある。・・・そこでスターリンは——それが全ての征服者達を挫折させたものと——同じ問題に逢着している。・・・征服を欲させた先行の試み・・・以前には——それを消滅させているのだが。実行の準備の前の認識・・・どのように先行者達は敗北したのか・・・

---

15 状況は39年においてと——戦火の時代に直面した時と——正確に同じである。・・・

再びイギリスである、そこに危機の問題がある。・・・直接的攻撃の可能性はその時よりも重大で、帝国の脅威は今やである、と言えるかも知れない。・・・だが本質的には同じこと・・・

---

16 ロシアよりのパターン・・・4党政体(4 party régime)・・・充足に向かったの略奪(pillaging nach Bedürfnis)・・・道徳——仕事をもたらした、そして承認されるべきであったであろうところの——崩壊(break down)・・・

リーダーシップの欠如・・・世論の欠如・・・

近年の移民達・・・ユダヤ人を見よ！　そしてヒューマニティの欠如・・・

---

17 同じ根をもつ論点( a cognate point)がこの関連においてつくられてよい。・・・ロシアにおけるソヴィエト・レジームの経済的成果——我々がそれを社会主義レジームの一事例として受け入れるか否かは、今全く問わないとして——は、しばしばツァー時代のロシアの成果(the performance of Zsarist Russia)と関連させて論じられてきている。・・・しかし、4半世紀の経過は、そうした比較のもつあらゆる意味を奪ってしまった。・・・もし我々がこのケースにおいて、結局のところ比較を欲するのならば、比較はおおざっぱに1894—1913年のもつ外挿された長期趨勢(the extrapolated long-run trend)をもってなされなければならないであろう。・・・

---

18 ロシア的視角(russische Angle)・・・Faschismus(ファシズム)・・・  
a) 諸成果(Erfolge)とこの諸成果への反作用(Reaktion auf diesen Erfolge)についての説明から——それによって我々は自身の弱点を暴くことになる——。

b) 偶然の諸問題と個人的な資質、そしてそれらが処理するところのもの・・・二つの定義された問題・・・より良いことは、より良い。・・・歴史的方法の問題・・・第一次と第二次の大戦の能率の比較・・・労働問題と社会主義・・・

このようにして如何により良き結果となり、この目的のために何がより良いものとなるのか。・・・内容、自動性(autonomy)、遅滞の無さ。・・・軍隊政治と恐怖・・・

アメリカの理想を共同防衛する道を形成すること。・・・ニューディールは擦り切れた・・・国の精神意識を見出すこと。・・・

---

19 ボルシェヴィキ化・・・合衆国ニュース・・・平和について・・・欲している全てを得たロシアとの交渉。・・・フィンランドもまた・・・何故ヒットラーは打倒されたのか、後思案(hindsight)?・・・危険は戦争ではない、危険は平和である。・・・紛争(trouble)はロシアのそれである。・・・そしてどのようにして降伏が成功になるのか。・・・「その場合、

それはロシアに飛んでいく」。・・・

---

20 マルクスは明白にブルジョワジーの馬鹿らしさ(the stupidity of the bourgeois)を大きく期待していた。幸いにして後者(ブルジョワジー達)は過激派の馬鹿らしさからも同じだけの多さを期待してよいであろう。・・・逃避主義は爆弾である。・・・浮動している不安の固定化・・・爆弾とドルは、その全てではない。アメリカの政治家はロシアを利用している。・・・「彼等は間もなく民主主義に転じるであろうか、だとすれば実際にイギリスと衝突しなければならないのか。」・・・そして我々は社会主義に向かっては我々自身の道をもつ、と。・・・更にこのことは次期大戦によって加速されるだろう。・・・

他の不安がある、即ち、OPAの固執とそれと密接に関係する降伏。・・・傷つけられた業務、その場合の失業、そして輸出。・・・

諸々の章句についてと官僚制・・・この国は疲れている、直接的な危険はどこにもない、等々の章句。そして政策は政治的である。・・・工業化・・・働いている大物——頭脳なしに(a great at work—without brain)・・・国際に抗して、そしてビジネスに抗して・・・労働者は反社会的で、そして失業に新しい困難が・・・序では言い替えと念入りな実行・・・強制による民主主義・・・実質的には人々が投げつけるものがユニークな諸章句に爆弾を、というのが理想的・・・敗北の形態の一つ・・・唯一の言い替え(interpretation)、役立つか、もう結構だ・・・

対外政策について、そしてミュルダール(Myrdal)・・・共産主義者に反対の自由投票はどこで行うのか・・・彼等が欲している事態がどういふものかを知らない。・・・同じ人々ではないのか、この正直とあの正直(Is this and other honesty)。・・・インフレーション——OPA(連邦物価統制局)——補助金・・・さようならとしての全システム・・・その効率的な平時生産の機構(Mechanismus of its effective peace Produktion)・・・戦時政府による以外にはインフレーションなどはない。・・・

---

21 今日格律(Maxim)となるであろうものは、a) 公開所得

(öffentliches Einkommen)か、b) 労働者所得——但し労働者階級に対しては一緒のものでない——である。・・・

ロシアについては、「我々は半分だけの仕事をなした」、そしてそれは全く何もしなかったことよりももっと悪い。・・・

---

22 今では、もし人々が——あるいは彼等のリーダー達が——本当にソヴィエトシステムを包摂しようと考えているのならば、何をかいわんや(no more to be said)であろう。・・・爆弾による自殺か？・・・20年代における資本主義の将来に対する楽天的判断者(optimischer Beurteiler)による自殺——今一度の世界大戦はないものとしての。・・・誰も心配していない？・・・彼女や小事業主には充分あり得る。・・・階級の本質は財産ではなくしてリーダーシップにある(Essenz of class is not property but leadership.)。・・・そして、民主主義的なブルジョワジーの無能力。・・・価格政策事情・・・38年に向けてあらゆる観点から平和を買った。・・・しかし攻撃は宥和(appeasement)によって抑えられない。・・・何故にスターリンは我々に攻撃をかけるべきことになるのか？・・・しかし、極めてはっきりした回答、大英帝国が——しかもそれとは別にイギリスの存在そのものが——存在しており、行く手に至るところで立ちほだかっているということ、が忘れられている。・・・イギリスはリスクには動かなければならないであろうし、スターリンは待機することができる。・・・

政策はプロパガンダで煽られた情緒的な突出である(The policy emotional burst goaded by propaganda.)。・・・スターリンは諸章句が妥当でなく、しかも見せかけであることを知っている。・・・そして不器用ないじくり(fumbling)がみられ、しかもイギリスの中に同調的論調はない。・・・

---

23 革命は買い取られることができない。闘われなければならない。・・・

集中収容所(Konzentration camps)、拘禁(ketten)、精神的奴隷化(geistige Sklaverei)・・・心なしに危機はない(sans hearts ni crise)・・・そして、そのために必要とされるものは、1) 諸権力の体系的な操縦、2) 一個のイデオロギー、である。・・・ロシアとの紛糾(trouble)は相手

が社会主義者だからではなくして、それがロシアだからである。・・・スターリンは遂行を仕上げている——ヒットラーが夢見たかも知れないもののもつ、更に良き戦略をもってして。・・・民族戦争(ein Völkerkampf)を「社会主義対資本主義」の対立に置き換えることは、もしそれが一個の巧妙なるトリックであることでなかったとすれば、無意味である。・・・ロシアをパラダイスであるとしてみる人は——更にそれを一個の民主主義的なあり方だとみる人は——そういう人には救いが無い。・・・宥和、逃避主義・・・それらは個々の問題を取り扱う。・・・ブルジョワジーは(これを)直視しようとし無い、しかしその傍らでそれを請求しようとする。そして全てに対して、その免れ得ない論理に打ち震えながら。

---

#### 24 改革か回復か・・・

知識人(Intellektuelle)・・・( ? )・・・より良い状態・・・そして従属、道徳的忠誠・・・但し必要あつてのこと、更に反感を恐れない敵意・・・ミル(Mill)・・・道徳的忠誠は完全に行き渡る、再生もまた改革的であるので。・・・

より一層の反ブルジョワジー的言辞——行動におけるよりも。・・・

---

25 我々がなしたようにこれらの諸国を扱うことで、我々は権威ある諸信条を受け取りつつある。・・・

---

26 ひとたび地獄(inferno)に直面すると、崩壊を過度に危惧することはない。・・・原子爆弾を打ち上げたその国が、髪を逆立てる——驚く——かどうか。・・・

---

27 オッペンハイマー夫人と嘘・・・我々がボルシェヴィズムの方向に引っ張られるのが、如何に様々な事柄によってなされることか。・・・おとぎ話のような助け・・・ブルジョワジーはボルシェヴィズムに信じられ



ないような行動を授ける。・・・儂さ、誰もが自分の決定を引出し、そして自分の行く道を決定すること、そしてそれが起きる——例えば、イギリスの政治社会・・・

---

28 恐らくは、現代世界と非合理性についての何事かが、それに付加された位置を得るであろう。

---

29 軍拡競争・・・スターリンは宣言した、再軍備は資本主義がある限り必要だ、と・・・

---

30 道徳的標準(moral Standards)のこの完全な破壊は、戦場にみられるより悲劇的である。・・・問題はソヴィエトであるかないか、ではない。・・・単純には、スペイン、フランスといったものは一つのポーランドである、といったように。・・・インフレーションとデフレーション、ドイツにおけるように。・・・いじくり廻すこと(fumbling)——全く見事ではある、しかし、コストが高くつく。・・・そうしたケースにあって、テキスト(本書)が変えられるべきである、とは私は考えない。・・・労働側はよくいて、またもや、管理資本主義以上のことは何もし得ないので——そして各人は、2～3の経済学者を除けば、これを承認している。a) 選挙人の要求(権能賦与)(mandate)の欠如の故に、b) 事物のロジック、即ち、実際のところ恐らくは労働者は躓けられなければならないのでは、という情況の論理の故に・・・

---

31 無事実(no fact)は一つの事実である。・・・何故にスターリンは民主主義の一人の使徒(an apostle)であるのか。・・・10年に渡って、我々は最早闘うことをなし得ないのだろうか。・・・

我々が望んでいるように物事はあるとなす習慣がある。・・・市民にとっては——非現実的・・・もし人々が——それをもって行動するための—

—何物かをもとうというのならば、ツァー達は依然としてロシア一円を統治しているであろう。・・・その目的を語っている者と厳しく対決するならば、後悔することになる。・・・そしてそれが人士を合理化することになる。・・・そのように歴史家は驚くであろうか・・・しかし、そうでない。・・・選挙の前に保守党を設しよう。・・・単純で控え目に・・・そして我々はアメリカの存在を厳しく責め立てるであろう。・・・

諸君は紛糾の中へ立ち入ることができる。・・・と言うのは、マルクスの一巻を負っているのだから。・・・

ドイツと日本・・・永久にうち続ける・・・言うなりに(*obeyingly*)・・・それは診断を再びやり直すことを必要とさせている。・・・トラブルは売上税に対するアメリカの反対者ではない——彼等は憤怒の法悦(*extasies of wrath*)に浸っているのだらうが。・・・流線型化したツァー(*streamlined Tsar*)・・・チャンスが・・・非情な意志の中におかれた対立・・・明らかなのは、一人芝居であること・・・実処的問題・・・

---

32 語り得ない諸画期・・・イランの過去——記録にあるような・・・アイスピゼック・・・クルディスタン・・・世界戦争を妨げたか!・・・しかしヨーロッパにおける前景(*Vorsicht*)にはいつも——ローマ時代におけるギリシャのように編入(*Einstellung*)・・・そうしたどんなことにも満足させられるものとしては存在しない。・・・何故にローマは膨張したのか、あるいはチンギスハーンは犠牲者達を焼きに焼いたのか。・・・

それについては、いつも言及がなされている——そして次の如く、ここそこの労働組合の事務局が反ソヴィエトであるということ。・・・公示されているロシアの機関は——多分——大きなものではない、しかし、活動に首尾一貫した整合性を与えるべく、ひたすら良く組織された機関である。・・・良き伝統が死に絶えるのが、遥かに重要である。・・・

---

33 そしてどんなケースであろうと、スエーデンとノルウェイは——我々が戦争に赴く用意がある限りにおいてのみ——存在する、とりわけスエーデンは我々の道徳的ヴィジョンの範囲の中に充分にあるところからも存在する。・・・

そしてイギリスとイギリスの領域(土)の确实性は、我々が取り組んでいるものに依っている。・・・

---

34 その場合、次のように告げられることが重要である。即ち、国際貿易といったものの中で、事態は既に極めて広く拡がっている——それが今や資本主義的諸方法に即してではなく——ということ。・・・ロシアの仕事を行うことは続いている。・・・どのようになすことができるか、我々の知識人達は・・・合衆国は殆ど民主主義と言える方法で正常に戻りつつある。

## (5) アメリカの事情、ワシントン経済学とケインズ理論

### 摘要

ワシントン経済学・・・1950年に向けての潜在生産力の高い見積りをもって始まる。1943年の公式物価でみて2000億ドルといった額である。・・・労働力は6150万人である。純国民所得は1690億ドル辺りの額となる。・・・戦後経済に存在する過大能力と失業、だが官庁当局の政策は貯蓄に対する性向に幻想的ともいうべき過大な役割を認め、その作用の抑止を図った。・・・それ自身に相対応するべき投資機会をもたない貯蓄をさえ生み出すものであり、労働問題や投資効率とは遊離した存在である。・・・資本主義のエンジンについての正にそのデザインの中で、一個のブレーキがその潜在生産力を開花させようとするエンジンを妨げるのである。・・・国民総生産(GNP)が与えられたとすると、完全雇用の状態で得るべき各個人の貨幣収入に等しい程の諸便宜が経済進歩に対する由々しき侵害なしに、支払われることは可能なのだということになる。しかしここで「可能だ」という言葉は多数種の諸条件によってカバーされている。・・・無責任な戦時支出は平時における産出の増加を召喚せんとして必要とされる額よりも遙かに多額となる。・・・心に銘記すべきは乗数の理論からもたらされる諸命題だけでなく、戦争物資に対する縮減に差し替えられるべき政府の赤字支出が継続されないとすると需要不足もまた生じるということである。・・・投資と需要が増大するにつれて、貯蓄の額もまた増加する、そしてこの額は適切な収益性を確保する点を超えた額となる。・・・そうしたケースにあっては、遊休残高が累積し、投資財に替えて「貨幣の保蔵」を需要することになり、その結果、需要の非効率が進むことになる。・・・このケインズ理論が成り立つのは潜在生産力の巨大性、不況、それに移動均衡といった諸条件の下においてであり、アメリカにおいては失業と破局の原因となり得るものである。・・・それが社会主義の発展を遅延するのか急き立てるのかは明らかではない。しかし産業の自己組織化や自己制御に対する敵意は如何なる形態のものであれ、秩序だった前進に対する由々しき阻害となるのであり、最小限の混乱で以て社会主義体制に移行することを利しはしないのである。・・・その他 (編者)

アメリカの事情、ワシントン経済学とケインジアン・セオリー

1 ロシア的視角については尚も考えることは差し置いて、我々は今や合衆国における経済状況に関する側面に立ち向かわなければならない。・・・貯蓄・・・逆転した位置、そして我々は同意できる。・・・

権力(Macht)、保守政権でさえ望まれざるを得ない——尊敬無き戦後・・・一方ではその問題・・・他方では巨大な産業的成功を引き出すこと・・・何故に、我々は——圧力団体をつくることができる場合に——政党をつくるのか？・・・生産力は労働者を節約するだろう。・・・そこに問題があるのか、更にそれは何か。・・・平時の生産——供給すべき東方がある場合にはどのように・・・

今や均衡予算が・・・過大能力に阻害される生産・・・社会主義政党がない・・・非常に大きい・・・多くが引き出され得る——しかもこの場合、全く必要でない。・・・官僚制、それは企業群として現れて労働者と共に働く限りにおいては万能の偉力をもつのであるが、その官僚制において、未熟な官僚制をもつという諸条件がある。・・・問題ではない、そして充分明瞭である、但し、でき得る限りのことははっきりしないままになされている。・・・

---

2 ワシントン経済学・・・輸出・・・マレー法案(Murray bill)・・・そうしたことの全ては、1950年に向けての生産潜在能力(the production potential)の高い推定——1943年の公的物価指数でみた我々の総生産2000億ドルといったほどのもの——から出発している。この限度に迄高める、ということに異存はない。その年に利用可能であるだろう労働力は同様に——6.150万人といった——高い数値を示しているが、これに異論をはさむことも慎みたい。これから控除される第一に兵役にある人——言うなれば250万人——と第二に失業という「不可避免的な」量がある。・・・

今一度、1943年の公的物価指数で計られた1950年の総国民生産(gross national product)2000億ドルから出発させよう。更に純国民所得(Net National Income)は、その場合、1690億ドルといったあたりの数値となる。可処分所得は個人所得税、社会保険賦課金、法人賦課金、

並びに法人非分配利潤と追加移転分を控除して得られる。

(\*) 減価と減耗分 120 億ドルの額が差し引かれる。他の 210 億ドルは連邦法人所得税と州および地方政府の課税分である。我々の今の目的からすれば、我々が前に示したプランに従ったこれらの減額をなすか、または戦後需要推定者がなすであろうような何等かの計画に従うか、は大した問題ではない。前者を採用したケースだと、我々は売上税によって得られるのと同額に近い連邦法人所得税を失うことになる。我々は仮説的な事例を論じているのであり、実際に得る、または将来得ることになるであろう数値を試みつつあるのではない、ということとはもとよりである。

---

3 実処的諸問題を定義すること・・・それはあたかも限定付けられたが如くみえよう。・・・留保能力(reserve capacity)・・・どのようにありそうか・・・

他の諸々の事柄もまた——利子・・・ケインズ(Keynes)・・・無力さ(powerlessness)がここにも・・・紛糾部分(the trouble)の半分でしかない・・・浅薄な頭脳(feather brain)・・・公的支援の必要・・・非アメリカ経済の中で取るに足らない経済(feathering economy)ではないところにおいて。・・・そうであっても、所得をより高めるのだから、為されることは確かである。・・・低い場合にあってそう。・・・他の方法は論外であるとして、そのように本質的に失いし部分だけが残る。さもないと、  
a) 計り知れない額、b) 2000 億ドルにもなる恐れがある。・・・

経済のサボタージュ(sabotage)、支払い率(the rate of pay)、臣下の礼(homage)・・・しかし私には実質所得が問題に対する問題そのものであるように見える。・・・失業は存在し得る、だからして不足払い(deficit spending)が、更にはそれ故に 2000 億ドルなのではない(私は堂々巡りをしているのでは?)。・・・失業と自発的失業(voluntary unemployment)についてのノート・・・充分にいくらかの造型可能なやり方で、誰が理解しないのか・・・我々は同意しなければならない。・・・インフレーション、デフレーション、それに貿易・・・私はあり得べき輸出超過を論じている(政治的と道徳的理由からの輸出)。・・・そして投資機会(investment opportunity)については国内的作用のみ。・・・軍事産業・・・何故にそのように危険なのか!・・・400 億ドルが必要とされる。しかし 200 億ドルの正味の貯率が超過ならしめられるということにさえなる。そして

更にはこの出口のない場合における出口のなさに対しても、なしでは済まされないのである。

支援は到来していない——それによって生活している人々、それに政治家は紛糾部分の半分にはしか応じていない。・・・夥しい浪費に立脚することはできない、だから膨大な失業を伴うだけのことであったとしても、規律の欠如はそのように大きくはない。そして就中、勝ち取ったものの欠如。・・・起こりうべきであったこと・・・500億ドルの延滞は永く変わらない。・・・全てにうまくいったとしても、知識人達でさえも留意しない。・・・利子については、だが尚作用を超えている。・・・

課税に対しては・・・a) 二重課税(Doppelbesteuerung)、これにはイギリス型とドイツ型の理念がある(我々はドイツ型をあるべきものとして許容してきている)。・・・b) 投資控除(所得でなく税において)、この点では私はフィッシャーと完全に意見の一致をみているが、それでも私はケインジアンをめぐるそれを受け入れ難いものとみている。・・・c) 不動産課税(estate taxation)・・・産業の構造といったもの自体には十分な法制的保護が行き届いている。・・・労働者に対しては法制的無能力(legal inability)がまた、(ドイツ労働法)・・・オフィスの終わりには労働争議・・・

---

4 貯蓄がない——逆である。・・・ベバリッジ(Beveridge)プラン——異論はない。既に戦時中それが問題となるであろう諸問題を解決した。・・・雇傭・・・インフレーション・・・

・・・戦時を通してのその成果によって論証された。考えうべき未来、言ってみれば、20～30年先の為それがどんな意味をもっているのだろうか、が十分に明らかにされるべきである。しかし、かくも多くのことがなされてきたので、我々が含まれているその争点を明らかにせんがためには、しばしの間、立ち止まらなければならないところの「単純な諸事実」が、ぼやけてしまっている。1950年には——過渡的諸現象はその時に死に絶えていると想定される——国民総生産(the Gross National Product)は・・・において様々であった。・・・潜在的産出高・・・

全ては社会主義が物的諸関係の中に期待しているものである。・・・運営(Operation)と欠乏(Not)が資本主義の下では馬鹿げた作用をもたらしている。・・・労働者の為の産業の社会化・・・所得の一部が所得税から出でて、あらゆる所得に及ぼすという場合、それはどういうことになるの

か。・・・ $Y=100$ の所得に対して、そこから税がとられるとする。  
100の中に入っている俸給の他には、他の政府支出はないとする。人々は10を支払い、尚90を残している、だがその10は戻ってくることになる。さもないければ、 $Y=110$ であったのであろうか。・・・クズネッツ(Kuznetz)の消費支出(consumption outley)——(GNP-GCE)——は、28対71.4である。・・・クズネッツは、それにも拘わらず、労働所得(賃金と俸給)を29対52.8としている。

---

5 何でありそうかではなく、何であるだろうか、を我々が予言的に述べる(prognosticate)ことを試みるならば、結論はワシントン・エコノミスト達の不吉な予告(the dire forebodings)とはさほど大きさは異ならない。というのは、我々は展望されている成功の政治的条件が満たされることに疑問をもって根拠を検討してきているからである。貯蓄への過度の選好という想像上の危険(the imaginary dangers of an excessive propensity to save)に対抗して警備を試みようとする政策は、停滞論者達(stagnationists)が期待しているものを生み出すのに、それ自体充分なものがあるだろう。しかも、それは30年代の状況に対する「対応する投資機会無き貯蓄」(saving without corresponding investment opportunity)すらもが一種の激しさをもって再生産されるだろう、という点を含んでいるのである。更にこの政策は、部分的には論理によって、また部分的にはその唱道者達のもてる政治的信条によって、他の経済進歩のサボタージュを示すような諸政策と結びついているので、とりわけ、どんな停滞論者もが示している程に高い失業の展望値に我々は至らざるを得ないのである。

失業はあとで、とりわけ新しい割増金利が労働問題からの逃避をもたらす・・・投資効率への配慮の欠如・・・資本主義のエンジンの正にそのデザインの中に内在して、そのエンジンのその生産潜在能力を実現することを妨げるであろうような、一個のブレーキが存在しているということである。・・・次のことを心に止めておくことにしよう。我々は最早戦争の帰結である流動諸手段の蓄積の問題(the question of accumulation of liquid means)と取り組んでいるのではないこと、我々は今やこのことから抜け出しつつあり、しかもそうした蓄積が貨幣価値の新しい水準を——臨時的にか恒久的にか——創出することとは離れて存在している一個の問題と取り組みつつあるということ。・・・



もとより、この理論は合衆国の経済状況を全く異なった光の下におくものである。その諸問題の解決の為、我々が求めてきた正にその事実こそが、あらゆることの中の最も由々しき問題である戦後の諸問題の源泉なのである。我々の行論に従うならば、何等かの社会主義体制に向かつての展開を一世代や二世代は遅らせるかも知れないような生産潜在力(the production potential)は、失業と破局の原因となりそうであり、だからして社会主義の生誕(the advent of socialism)を急き立てることになりそうである。「戦後需要」(“post war demand”)についてのあらゆる推定は実際にこの見解に組しているので、そうした諸推定の手続きが、この理論の具体的な適用を描き出す最良の方法となるであろう。それを基本的諸要素に還元すれば、それはこのことになる。

---

6 自発的失業(voluntary unemployment)・・・1950年には60億ドルに・・・引退した人、それでも請求する・・・物持ちの間にもある・・・他の労働者達の犠牲の上の労働者の利得——それは既に述べられている。・・・

この言葉が如何になじめないものとなってきたことか！——超潤沢な富のさなかにあつて必要とされていること、それから最上のものを得るということ。・・・公的行政の費用と能率に関わるその限りにおいてのみではない、そこには公共サービスが個々人に貨幣を支給し尽くすことからなるだけでもあるのである。・・・失業の便益(unemployment benefit)はその際立った事例である。・・・

2000億ドルという国民総生産が与えられると、経済過程に(それに経済進歩に)重大な侵害を加えることなしに、完全雇用の場合に各個人が受け取っていた貨幣収入と等しい諸便益を支払うことは——この制度が適用者(applicant)の数の増加をもたらさないと仮定して——「ありうる」ということが全く真実なのである。

「ありうる」(“possible”)という言葉は他の——はっきりしない多くの——条件を隠している。・・・ここにおいてもまた、ひよつとすると、どれだけの数の失業者があるのか、それに雇用者の先行給付(Vorleistung)は、更に目的と他の諸願望すらもが、査定される必要がある。・・・しかし、これら全ての中で唯一真実なのは2000億ドルが達成せられたならば、ということだけなのである。しかもそれがこの諸状況の下ではそうで

ないのである。・・・「他の言葉を以てするならば」こうなる。資本主義のメカニズムに立脚している限り、国家一般は奪取により生活している——一般にそうしたものとして感得されている——のであるということ、それに、それ故に明確な限度というものが——それは可變的なものであるかも知れないが——あるということ、と離れては何事もあり得ないのだ、と。・・・その場合、最も良き使用があるだけであり、もっと後にした方がより良いだろう。・・・

9百万人×40×52=18.720 しかし尚、200-35=165(住宅は除外されているとして)国家の為の諸財と諸用役に・・・25・・・=140が残る。・・・=128.6

(「10」が控除せられる全てならば) 家賃に・・・

しかし、とは言え差当たって・・・他の価格水準で・・・6千万人の仕事(job)に対して2080億ドル・・・

この他に顧慮されなければならないこと、a) 2000という平均は6000にもなり得ること、b) この5000は人々が実際に既に2000をもっているところのものである。・・・年々の賃金には、如何に実証が避けられている問題か、但し無益・・・。

---

7 ジレンマがあるが、課税によってより低く抑えることができる——それは生産をも低く保たせる。・・・賃金は半分にさえも。・・・素早いやり方・・・それ以上に悪くはならないところまで・・・パニックにおけると同じ・・・流動性選好——カーン・・・貧しい、貧しい、(poor, poor, ) 何が必要なのか。・・・帰結を否定したり、貧しい、貧しい、を軽視しても得るところはない。

実際に生産された産出物を誘発させるため必要とせられたであろうよりも、遥かに多大であった無責任な戦時支出(war expenditure)の諸帰結を極小化させてみても、得るところは何もない。更に公衆が——ケインジアン「流動性選好」のお蔭(徳目)で——具体的に何等かの量に達する遊休通貨と遊休預金(idle currency and idle deposit)を保持することで満足している、といった基礎の上に対面させられるであろう何等かの諸帰結の存在の否定のうちに得るところも全くない。現時点で我々は当然のことながら、この命題を聞くことはほとんどない。そして OPA(連邦物価統制局)

と諸税の諸レートを防衛せんとするケインジアン(Keynesian)の正統派の信奉者達(votaries of Keynesian orthodoxy)によって開陳された懸念は、その中にある誠実性のいくらかの喪失の証明である。心に留め置かれるべき重要事の全ては、この命題が乗数の理論(the theory of multiplier)からもたらされたものであるだけでなく、それが明らかに馬鹿げた意見——絶え間のない政府の不足(赤字財政)が軍需物資(war material)に対する(需要の)縮減(the shrinkage)に差し替えられることがないとする(需要の)不足(a deficiency of demand)が発生するであろうというもの——の中に含意されているという点にある。因みに上記の意見は戦後の諸問題の議論の中の1944年の章句の中で繰り返し述べられてきた意見である。・・・

総(当座と定期)預金(total-demand and time-deposits)(調整済)プラス銀行以外の通貨の額は、1946年の4月には1740億ドルに達しており、更に500億ドル以上——但し負債の償還——が、諸企業や諸個人が前もって現金に替えるであろう政府負債のその部分が、勘定に入れるため追加されるであろう。そして次のことは疑いない。即ち、償却資産を除くためのどんなパニッキーな奪い合いもなかったとしても、このことが一般的物価水準を数年の内に1943年のその約2倍にさせるのに十分なものがあつた、と。・・・もし、この戦時債が・・・、極度のインフレーションが、賃金債によって・・・野蛮な諸方策・・・ローンの供与・・・負債の輸入・・・貨幣の輸出・・・貯蓄と再生産・・・石のように無情な政策の価値・・・信用基金、低所得層の分け前・・・貯蓄・・・制限的な財政政策が必要・・・不況に回帰・・・必需品の制限・・・インフレーションは賃金手形によって来る。・・・大規模軍需企業には必要。・・・価格統制と反トラストの喧しい世論の波・・・それは政治的な仕事にも侵入してくる。・・・物価統制局と無能な人達の補助、それに満足している人物は、他方で低コストの人物と「なり易い」(likely)。・・・

---

8 貯蓄を有利とさせるだけではない、退蔵をも有利とさせる。・・・利潤といったものを手に入れている。・・・余剰(Überschuss)!・・・それが働いていないのではない。・・・保証債の発行問題を助長する。・・・ビジネスの行動・・・余剰——社会的正義と企業に貢献する。・・・賃金手形・・・信用収縮に対する防止策・・・ジレンマ、即ち、価格統制を伴うとなると2000億ドルにならない、価格統制なしだと誰もが保有せず、しかも高金利があり得ない。・・・290億ドルは全減価償却分、そして

550億ドルはカット、200億ドルはコインや少額の紙幣・・・ハーン(Hahn)の行論・・・

このことは(長期的?)戦後問題を扱った全文献の見出しとなっているような、そのポピュラーな標題——見出し——によって、より良く理解されるものの範囲を規定する。読者が知っているように、こうした文献は無数にある。しかし分析上の諸困難を提示する文献は僅少である。それは実際のところ、あらゆる諸プログラム——都合の良いケースが陳腐であることがあまりにも明白であるような諸路線の上に練り上げられている——の検討をその下に煩わしくさせている諸々の不利益の一つなのである。彼等の提示している諸困難はたとえば、政治的でしかも道徳的な性質のものである。要するにそうした諸政策を描き出すことの容易さと同じほどに、それを遂行仕切ることの困難性が大きなのである——成功に至る迄遂行することは不人気であることが唯一の報酬であるような夥しい自己否定的な作業となるのである。人々はこの政策をもたらすであろうアメリカを好むことは確かであろうが、それをもたらすことに手を貸した全ての人々を憎むことになるであろう。しかしながら我々は、「過渡的な諸問題」にまで触れることに迄至っていなかった。それは一点を意に留めることだけで充分である。即ち、インフレーション・デフレーション問題。

展望される巨大インフレーション、または巨大デフレーションの問題は、今までのところ固有の問題として扱ってこなかった。問題はインフレーションが今や挫折と共にここに来たものである点である。・・・インフレーションは賃金手形によって進行した。・・・当然のことながら、パニックはない——コストインフレーション——二重価格制の緩み・・・思慮なき戦時財政の結果・・・そしてその場合、生産を妨げているのが利子だけであるのかは疑問、GNPが4000億ドルになればどうなる?・・・更にもっと悪い総量規制に向かうことになる。・・・そして成り行き任せでは解決されないが故に、更にあらゆる総量規制が——とりわけ不人気であるOPAが——故に甚だ深刻である。・・・ケインジアン立場から必要である正にそのこと(gerade die, die von Keynesian Stande nötig sind.)。流動性選好(Liquidität preference)について語ることは何の助けにもならない。・・・危険が増大するのをプッシュする。・・・但し多くの望むだけの価値のある事柄——OPAの廃止——が流動性の事情によって困難となっているとするのは正しい。・・・見事に拡大した戦時財政に対する反対がない。・・・それが低落を進めている価格水準の上に進められているこ

とには深い意味はない。・・・労働者の能力よりも更に多くが生産されるだろうという希望は、短期においてのみ正しく、しかも賃金が低く抑えられている場合においてだけのことである。・・・低所得層の重い課税・・・ケインズ理論の示すところに根拠をおいている。・・・安全性のテスト(test of security)は笑うべきものとなる。・・・どのようにして1対20の生産ができるというのか(正に労働者とそれに即した節約の故に)。・・・失業といったことに置き戻される(set back)、それは基本問題とは区別されなければならない。・・・GNP( I. R. Doll p.436による)・・・45年には1973億ドル、但し通貨ドルで・・・

---

## 9 低課税と高金利を良しとするケインジアン理論(Keynesian Theorie für niedrige Steuern und höhere Interessen)・・・

3つの事柄、a) 自由(liberty)、b) 不況(depression)、c) 配置(arrangement)の完了に多くの年月を要すること。・・・撤退(retreat)、a) 人口が静態的ではない場合には、b) 大衆が豊かになる場合には。・・・しかし何かを得られるのかということ、何も無いのが全てである。・・・

流動性選好(Liquidität preference)は彼の所得と共に低下する?・・・安定化(固定化)された資本主義・・・2つの問題点、慣習(habit)なのか原理においてなのか、それに課税(と輸出)を伴ってか、伴わずにか。・・・更に完全雇用になった場合にはどんなことになるのか。・・・完全雇用と安全の中にある秘儀・・・が今日的に染み渡っている。・・・

・・・観察の下におかれている経済、生産と失業は(必ずしも比例的にはないが)Gに向かって、従ってIとDに向かっても、拡大しつつある。停滞論者(stagnationist)の論ぜられるべきテーゼ(命題)は次の諸点をカバーしている。I(投資)とD(需要)が増加していくにつれて、諸企業や諸個人が「貯蓄」しようとする総額もまた増加するという、この額は適正な収益性をもった——即ち、人々をして彼等が貯蓄することを決意するものを投資させるのに十分な収益性をもった——投資の為の諸機会を超えて増加していこうとする傾向をとるとのこと。そこで遊休残高(idle balances)が蓄積されるであろう——このことは人々が有価証券乃至は投資財に替えて「貨幣の保蔵」(money to hold)を需要させていくことを意

味する——ということ。それ故に、そこでは全体としての諸財に対する需要の不足が——消費財に対しては人々が貯蓄するが故の需要の不足が、投資財に対しては彼等が退蔵(**hoard**)するが故の需要の不足が——発展させられるということ。更には、諸企業に対して結果としてもたらされる損失(**losses**)、及び(あるいは)、結果としてもたらされる失業は、そのシステムをして水準 **G** を目指そうとすることを妨げる——あるいはそれを、その水準は、それにも拘わらず到達されることがあったとしても、水準 **G** 以下に抑え込ませる——ものであるだろうということ。・・・

それがもつより広い含蓄という点で、この命題は既に本書の前述第 **X** 章で論じられている。そこで提示されたケースは——更なる資本主義的發展のためのあらゆる諸可能性をより充分な視界におくものであった——諸事態の引き続いて生じた経過によって強調されることになった。その更なる発展の諸々の可能性の存在は、その場合、部分的には過去の経験から、そしてそれに対する反証の不在から推論されなければならなかった。しかしながら、ここで我々が関与しているのは、停滞論者の教義(**doctrine**)の枠内での特定の論証のみである。その古典的形態として、その教義は故ケインズ卿に——彼の一般理論(**general theory**)の中に見出されるものに——負う。

実行上の帰結(**practical results**)と政策、だが合理的である。・・・

ラッセル(**Russell**)・・・「石積みがより良くさえする——そこでは財の不足については誰もが合意できる、そして意見の差は・・・のことだけである」。・・・どのようにそれが描き出されるのか。・・・更に老後や病気や疲労の日に備えた貯蓄はどうなる。・・・

貯蓄は、そこで、平和の敵(かたき)役である (**Saving ,then, is the villain of the peace.**)。・・・

- a) これまでに、どのように論証が終えられている、というのか。・・・
- b) 不幸にして、政策に対しては考えさせられる！・・・(言葉で表してもどんな利益が)・・・反対無しに統制を得させる素晴らしい諸手段、所得の使用をつくる・・・消費を得る・・・原案の形でのマレー法においてすら・・・
- c) 反証(**Widerlegung**)・・・馬鹿らしき——双方にさえ役立つ、攻撃すべきところがない。・・・
- d) しかし帰結が同じである公算は甚だ大である。・・・
- e) どんな場合にも、最長期の診断には関わるものではない。・・・しかし、これまで言及されてこなかったことがある。・・・投資機会という基

盤への配慮なしの貯蓄だ、ということ。・・・4000億ドルが高い見積もりだということではなく、それ以上には多くは貯蓄されないという論証は？・・・それに対しては何もない。・・・しかし結果は恐らくは尚同じであろう。・・・失業についてはどこで・・・

より少なく充たされた流動性選好によって(*durch weniger befriedigte Liquidität*)！——これまた重要・・・「もとより、流動性が選好的である不況期には適用されない」。・・・2000億ドルの基礎付けは、恐らくは、私がそれを導入した初期には同じであったろう。・・・失業はその時か、または最後にか・・・

ラッセル、更にアメリカ人は他のところを理解できるので、彼は売らさる(セールスマンの心理)と理解している。

産出と雇用におけるこの縮小または適度ならざる拡大は、もし諸財とコスト諸要素の貨幣価格が——我々をして端的に言わしめれば、諸価格と賃金率が硬直的であるならば——、必ずや「総需要」(総支出)の縮小または適度ならざる拡大をもたらすであろう。諸価格と賃金率が伸縮的であれば(*if prices and wage rates are flexible*)、産出と失業が、これまた縮小または適度ならざる拡大となるであろうとは——理論の唱道者達によって主張されてはいるが——不確かである。ところで、このことこそが非常に古い理念、即ち、資本主義のエンジンの正にそのデザインのところ内在している一つの妨害的作用力としての「退蔵に流れていく貯蓄」があるということの現代的なケインジアン形態なのである。それは、少なくとも現在の諸条件の下では、資本主義のエンジンをその潜在的生産力(*its productive potential*)——それ自身の流れの下にある——に至ろうとすることを妨げる。これに関連した「戦後需要」の推定はこの理論の統計的補充以外の何物でもない。即ち、繰り返すようだが、現存している投資機会は——1950年時点で国民総生産が完全雇用の水準にあるとして——諸企業や諸個人が貯蓄することを決定するであろうその量を吸収することをなし得ない、ということを示す試みはその推定なのである。

諸価格と賃金率が伸縮的(*flexible*)なケースは、ここで論じるには込み入りすぎている。しかし読者は思い浮かべることに困難はないであろう次の状況がある。即ち、その下では伸縮性が現実問題として貨幣を循環過程から不断に引揚げられていく——つまり退蔵されていく——ことによる産出への諸影響を救済することに失敗するであろう状況である。そこでは諸価格

と賃金率の双方が下落しつつある場合には、例えば相互に「追跡のなされ合い」(“chase” each other)といったことが——正確には双方が相互に出現を「追跡し合う」または「競い合う」が如く下落を続けることが——それらの均衡関係に至ることなくもたらされるということが起こり得るのである、恐らく無限にではないとしても、内在的には十分に大な期間、厳しい不況にあることを意味するだけのことなのである。私が、この論点について問題の理論に挑戦しないのは、この理由による。

この(ケインズ)理論は合衆国の経済状況を——我々が我々なりにこれを考察してきたものとは全く異なるものであるような——一個の光の下におくものである。我々が経済的並びに社会的問題の一つの(臨時的な)解決とみてきた正にその事実が、それ自体、あらゆる問題の中の最も重要な問題の源泉となっていることである。我々自身の論証に従えば、社会主義に向かつての傾向を一代ないし二代程遅らせることになりかねないような生産の潜在的能力が、それどころか失業と経済的破局(economic break down)の原因になりそうなのであり、従って官僚制的社会主義の生誕(the advent of bureaucratic socialism)を急がせることになりそうなのである。更にこのことに由来する具体的要件として、政府の手による所得平準化の支出(governmental income-generating expenditure)——「赤字支出」(“deficit spending”)——が、生産の完全雇用水準に至るために提供されるというそれだけの手段として、自動的に負荷されるであろうこと、しかも特に完全雇用水準にとどまるためには——戦時の流動資産の蓄積が貨幣価値の新しい水準をつくり出すであろうか否かとは全く関係なしに——それがなされるであろうということがある、あるいは寧ろあったのである。

ベバリッジ計画においてもまた！ 「もし、我々が呪われた消費の下で死す」といったような用い方を人々がなす、という懸念が(anxiety dasz people make use of such “if we die im unselige Konsumption”.)・・・インフレーション——全てのプロセスが逆行している。・・・計画の中の一部はいわれなき美味な裏切りの何物か(etwas unduly palatable insidious)である。

しかし、現在の状況下にあつて、「インフレーション的」な諸方策を賛美するようなエコノミスト達は——どんなエコノミストもが注意するところとなっている程に——馬鹿げた存在に近くなっているので、我々はこの位置から撤退して考察することにする。ワシントン経済学の究極の



判断基準は、最早赤字財政ではなくして、他の何事か——言うなれば——消費財に対する支出を必要な高さに、高率課税に見合った公的予算の方法によって (**by means of public budgets balanced at high rates of taxation**)、維持することになってきている。貯蓄は「平和の敵役(かたきやく)」であるとなし、しかも、企業と比較的富裕な個人を貯蓄の主体として考慮することで、我々は極限的なケース「失業の究極の原因は現代社会にあっては所得の不平等である(**the inequality of incomes**)」という命題に至る——更にこの所得の不平等は、そこでは、何であれ諸々の不足を創出することの何等かの必要性があることは伴わないような課税によって治療され得るのだ、ということである。

不足払い制(**deficit spending**)の政治的諸含意は、もとよりのこと、偏にかかってその国の政治的諸部門とその官僚制的助言者達次第であると言ってよいその権力の中にある。事業者階級の不足払いに対する嫌悪(**the aversion**)——ワシントンのエコノミスト達やそのアカデミック・ブランチである研究所員達には、非合理的なほどにもみられる——を説明するものは即ち、これである。いくらか異なった視点から見ると、我々は次のように言うことができる。赤字財政に対する反対はそれによって改善せられるであろう状況での赤字財政に対する反対ではなくして、赤字財政を避け得ないものとさせている状況を生み出す諸政策に対する反対なのである。その原案にみられるマレー法の諸原則は実際のところ反対すべき合理的理由はない。しかし、それにも拘わらず、この法に対する反対は——私のあずからないことではあるのだが——提案している機関(**the agency**)についての信頼の欠如からのもの、並びにそうした機構はひとたび設立されると、それが利用されなければならないであろうような諸状況を生み出そうとする政府や議会の意志を増幅させるであろうという予感からのもの、であって合理的に弁護されてよいものであった。

そうした政策が今日の諸条件の下では、不足払い制と全く同じように、インフレーション助長的であるだろう——それほどには明白ではないだけのことである——という事実からは全く離れて、その政策は次の目的に対しては理想的に資格付けられている。即ち、この国(合衆国)の資本主義のエンジンを妨げている鎖を、それがなし得るところのものを示すことによって、緩めてほしいとするどんな需要にも反対方向に作用させる (**countering any demand for relaxation**) という目的に対して、更にそのエンジンを最後には、不足払いをなすことすらもが再度に渡って不可避とさ

せるほどに、有効に麻痺させるという目的に対して。その理論そのものについてはどうなのか？ 広範にもたれている諸疑問はどうなのか——疑問は、不足払い制であろうと、確定したレートでの見合った予算であろうと、その政治的含意に共感をもっている人々以外の人々ならばどんな人々の間にも存在しさえするほどに広範にもたれる疑問であって——我々は果たして、「必要とされる消費者需要」を得ることができるのか、あるいは人々を「彼等の所得を十分に費やさしめる」ように誘導することができるのか、に関してである。

---

10 OPA(物価統制局)・・・賃金課税(wage taxation)・・・「それまで8(%?)の上昇」であるところの人物・・・何故ならば、我々は眼に見えてそのための見出しとなっているのだから。・・・

産業生産指数は物理量で1918年を100(99)として1943年に233(218)・・・一方で戦時のものは非認、留保無し、他方でもっと重要なものは何もない。・・・

産業の自己組織化または自己規制(self-organization or self-regulation)のどんな形態にも向けられる敵意は、秩序ある前進に対する、そしていつの日か必ず起きる社会主義レジームに向けての最小限の混乱を伴う移行を促進するような発展に対する、一個々の重い妨害作用(a serious obstacle)である。更にそれは政治的セクターや世論から強力な支持を引き出している。しかしシャーマン法(Scherman Act)に由来するその法制の最小限の修正と、とりわけその法制から発展させられた行政的・司法的施行は大きなものでなかった。NRA(連邦復興局)の時代、公衆が容易に受け入れたものよりは含まれているところが殆ど多くない——いくつかの点では更に少ない。

労働情勢(labor situation)は視野に保たれ続けてきた2000億ドルという目標に至るか、更に進んでそれを超えて進むか、という水準に応じたそれを達成不可能と見込まれている。その理由は貨幣賃金の諸水準が諸資源の完全利用とは両立し得ないという結果の故にだけでなく、ストライキを伴う賃金トラブルが労働側・経営側双方の能率を引き下げるであろう故にでもある。もとより1945年の産業生産指数が示しているような相対的貧困(relative poor)をストライキ及びその直接間接の結果に——少な

くともその主要な原因の一つとして——関係付けることに失敗するようなエコノミストはいない。これにつき言及されるべきことの全ては次の如くである。現在の諸条件の下では、労働者達の個々グループの諸ストライキの主だったものは労働者の他のグループに加えるに——同じ世論が通常その社会的同感(*its social sympathies*)の枠内にあるような——諸階層、言うなれば農業者達、サラリーマン層の低位層(*lower strata of salaried employees*)、専門家達に対立したストライキである、ということを実に明らかにすることに世論は完全に失敗していること。即ち、生産過程に対する結果としての諸妨害の災禍を受けるのは主にこれらのグループだ、ということ。「資本家」の利害なるものは入ってくるとしてもパーセントにおいて多少のものであるに過ぎない、ということ。しかし、殆どのエコノミスト達の「機械的な観測」の特徴としては、「そうした紛争と官僚制的苛立たしさ(*bureaucratic vexations*)」がそれを避け得ない管理階層の能率に及ぼす影響の重要性を明らかにしているのは、彼等の内十人中の一人もない、ということ。しかしながら、必要なことは、現代の経営者達の日常の作業をそのことについての適正な推定に至らしめるためには、一つの現実の構図をヴィジュアルライズすることであるのみなのである。大規模企業での経営陣の内部における分業は、こうした諸影響を和らげるであろうが、その社会的損失を消し去るものではない。

賃金についての議論はいつでもよいか、または、でありさえする。・・・我々はそれに立ち入って検証することはできないとしても、その中に一般読者にとって極めて有用なものがあるのではないかと言えさえするのである。・・・とりわけあらゆる勝ち取られたものと、あらゆるものに対する最良のもの・・・ニューディールを恒久的に整理していく道は・・・知識人は破壊に結び付けられる他の諸政策を要求する自由を保持するであろう。・・・

---

11 それにしても、何故に2000億ドルなのか、これらの諸条件が——最小二つの例外はあるが——充たされたとしても。・・・何故に我々はそのための目に見える見出し(*visible heading*)であるのか、そしてOPA(物価統制局)と労働争議(*labor trouble*)といったもので充分であるべきでないのか?・・・しかしそれは実処的諸問題の下に(*under positive problems*)理解されるところのものではない、ということ。そうではなくして、今一

つの意味、即ち2000億ドルが達成されることができないという意味で、良く理解されるのである。——私の行論が見当違いであるのか、または循環論に陥っているのか——人々が貯蓄するかも知れないといったことがあるからなのか。・・・更に、だからこそ戦時下の課題のあと、それを脱却しつつある政府を置き直すためには、不足分の先行支払い(**deficit Vorleistung**)が必要となるのだろうか。あるいは上層の階層に対する課税と平等——均衡予算における逆払い——が必要となるのか。・・・このようにして、全くの無となり、有効需要は怪しげなもの(**a slum**)となり、そして急速に政府給付型の繁栄の中に摩耗させられる。・・・もとより輸出は無しとして・・・そしてこの場合帰結は。・・・彼等が更に50年間成熟させるのならば、更にまた一つの選択がその長期的な予測を一般的なケースに変換するならば、一にかかって、それはただ単なる客観的な可能性に過ぎないということになる。・・・そうでなかった場合には、しかしながらその場合には、社会主義が現実により良い——均質的にコストが節約される——とは言えないのである。・・・

実処的諸問題なるものはない。そこで諸問題はあったとしても、さほどに関心を惹くものではない。一つの可能性であるに過ぎない。そして、我々はそのために目に見える見出し(**visible heading**)なのである。追跡し得る偏りよりは **OPA** などと諸紛争に対するそれぞれのケースである。それにつき我々は観察者達と意見の一致を見ており、更にはこのことは本質的に、その機構が赤字支出(**deficit expenditure**)を役立たせる場合、そうしたその特殊な消費は課税を経た平等によることを必要とする、ということ告げることの上により由来するものであると弁えている。**OPA** のジレンマは、**a)** 租税政策によって、**b)** ストライキ参加者と企業に何が起こっているのかを明瞭化することによってのみ克服されることが出来るものである。・・・だがそれは既にインフレーションに即しても。・・・反インフレーション政策は、それ自体目的を達成することは不可能であり、しかもそれを止めればインフレーションは悪化する。・・・

貯蓄の諸慣習を言い張っている報告書を忘れてはならない。・・・恐らくは初めは同じであった、2000億ドルを根拠づけ43年の成果(**performance**)を確保することからではない、その上。・・・しかし偏りに読者が必要とするところに行きさえする。・・・不安は保険によって切り下げられる。・・・循環の中での高貯蓄・・・失業の原因・・・とりわけ勝ち取ったものの全ては保持される——ポストマン・・・**OPA** のプロパガンダ・・・被害者にあたる者であるところの標準以下の人々を補助する、

その一方で低コスト、丁度都合よく。・・・

600万人の失業についてはどこで(とりわけ軍人達の・・・)・・・統計的と実質的、雇用の量・・・

---

12 一つの基本的なエラーが説明される。・・・二重三重の取引・・・重複・・・悪い頭脳(bad onion)・・・合理的に高める・・・キャパシティの保全?・・・失業の循環(unemployment cycle)・・・

実処的諸問題(positive problems)の規定・・・唯一の承認されたものが既に・・・経済についての憎悪、即ち、何もないか、数千億があるか、のいずれか。・・・浪費の精神(spirit of waste)・・・

・・・に加えて巨大に拡大した軍事的整備についての財政的諸要請、更に加えて——それ以来技術的理由からして望ましいとされた為、非常に多種のものとなった少額の償還金をさえ含むことになった膨張させられてきた負債の利払いの財政的要請——は約300億ドルに見合ったものとなることができることになり、このように我々は新規の諸サービスと現在の諸サービスの改善をファイナンスするため適用されてしかるべき財政資金は、年々おおざっぱにみて100億ドルの額になるものが残される、ということになる。ベバリッジ計画(Beveridge Plan)、それは更に大きい諸対策が1950年以降のために対応させられることになるのはもとよりである。しかし、それはここでは正に公共的諸分野において・・・

詳細は必要でない。何故に諸償還金なのか、何故に諸所得移転と諸販売金の間を区別する必要がないのであるか。これに答えるには本書と同じボリュームの一卷の書における数章をみてみるべき程に拡大するに任せられるべきであろう。・・・それは詳細ということの深く根を下ろした仕事になるであろう。・・・サボタージュ・・・更に保守といったものは国民の道徳的意識をもつということ、このことはどのようにありそうか、・・・失業はどのように与えられるか、ベルグマン・・・マレー法案は必ずしもバランスしない。・・・

非合理的な統制(irrationale Kontrolle)または非合理的な処理(irrationale Handlung)・・・更に賃金諸政策——これらがそこで達成しようと目論んでいるもの——・・・干渉と労働市場、そこには政治事情(political affair)

が——利子もまた(議会は全く不適切である)。・・・

我々エコノミストは我々の政治的叡智と結合した問題を省いているべきなのか・・・昨日行われたモーターレースを予想するよりは経済的理由に対する予想を・・・実処的諸問題の定義・・・

## (6) スターリンとフランス・イギリス・アメリカにおけるロシア問題

### 摘要

スターリンは大戦から真の勝利者として現れた。そうした戦後状態を意図した者は誰もいない。ロシアは征服の収穫を見かけよりも多大に得た。征服諸国の同化、すなわち、モスクワから無条件に管理される程にロシアの機構に完全に組み込まれるというやり方によって。あらゆる権力と威信は単一の人物に集中されていった。スターリンは超越的な天才であり、返復して生み出されたのは課せられた諸条件が何であれ喜んで受け入れさせるといった状況である。・・・その国の民主主義体制をスポイルするだけでなく廃止する・・・一人物の下でのこの専制社会主義、不安定さと威信の途方もない増大、生と死がスターリンの意志に依存する、法の正当な手続きの否定・・・大陸ヨーロッパ フランスではロシア侵出に抵抗するどんな効果的意志もなかった。そうした懸念は苦悩の諸々の叫びを窒息させるほどに強いものがあつた。・・・フランス人民は感謝の下に自分達の解放を万歳し、新生民主主義フランスの創出という魅力ある仕事に取り組む、と信じた幾ばくかのアメリカ人は確かにあつた。しかし実際にそこにあつたのは挫折した精神であり、国民的敗北の意識である。・・・共産党はロシアのセンターから指令されてはいたが、尚その場しのぎ的または見せかけの流儀である側面が多分にあつた。イギリスでもロシアの勢力との宥和の弁護人が幾分かはいるけれども、有権者が共産主義を支持するなどはない。政府であろうと労働党であろうと共産党と和解するべきどんな動機をももっていない。・・・その意図するところが何であれ、大英帝国に対立するべきものとしての客観的位置関係は和解し得ざる敵対関係なのである。・・・そうはいっても有意な支援が大陸ヨーロッパからは得られないことは全く明白であり、成功についてのあらゆる望みは合衆国からの支援にかかっている。・・・合衆国がロシア・イギリス戦争に巻き込まれる、そうした状態は遅かれ早かれありそうである。・・・しかし現在のアメリカには今一度の長くしてコストのかかる戦争に立ち入る準備はない、ワシントンは第二次大戦に入る前に採られた政策とは反対のコースを採っている。・・・対外政策は国内政策であり・・・国内では戦時プロパガンダや戦時統制それに戦時課税に疲れている。・・・アメリカでは共産主義は極めて少数派であり、多数派は他の戦争に不同意である。・・・信心深い願望の中に生じた更なる宥和・・・たとえ意図していなかったとしても親ロシアである。・・・更にその上知識人達の驚くべき数が意図において親ソビエトである。・・・その他 (編者)

## スターリンとフランス・イギリス・アメリカにおけるロシア問題

1 しかし、それらの全ては、これまで成熟してはいなかったもののもつ、ある実現可能性に関わってくる。今やそれがもつ今一つの可能性の問題に転じるべきである。即ち、スターリンが、現実には大戦の中から、「真の勝利者」(the “true victor”)として現れてきたのである。そして、熟慮されるべき真に奇妙と言える事柄は、同盟国の中の一緒になって得られた勝利の中の彼の寄与分ではなくして、彼の勝利が二つの同盟国を超えていたことである。

諸々の状況(affairs)のたどった諸コースを形作るのに一役買ったイギリスとアメリカの諸個人と諸グループに帰せられるべき——あるいは帰せられるべきではない——狙い(aims)がどんなものであれ、結果的にもたらされた諸状況をもたらそうと意図できた者は——相当のアメリカの知識人を除いては——誰もいなかった、ということは甚だもって確かなのである。諸々の征服地という収穫物を具備したロシアが存在しているのである。その収穫物は見た目よりも多分に豊かなのである。その故はロシア的方法(Russian methods)が被征服国を自国と同一化するという点で——如何なるロシア以外の被征服諸国には全く達成し得ない程に——際立って著しいものがあったからであり、今一つのその故は、我々が独立国として取り扱うことを主張している公式には領土となっていない諸国が——ロシア的機構の中に完全に統合されているという点で、公式に領有されているどんな諸国に対する場合と同様である程に——無条件的にモスクワから管理されているからである。軍事的意味と同様、政治的意味においても、ロシアの戦略上の地位(her strategic position)は、外部からの有効な制御を試みようとする如何なるものにも全く卓越して、優越したものとなった。今や勝ち取られたそれは、大陸ヨーロッパと大陸アジアの全体を覆うに至り、その重みだけからして、隣接諸国は隷属国に転落させられ、その上、発展は——奇妙なことにアメリカのビジネスがそれに役立っているのだが——ロシアの領域(domain)に向けて成熟させんがためにおいてのみ必要とされたのである。更には、これらのはかり知れない権力と威信の全てが単一の人物の手中に集中されているのである。その人物は消耗戦の直後にあつて、焼け出されて、その上飢えている人々に、新しい軍備計画を——それはあらゆる従前のそれを凌駕し、しかもただ一つだけの意味をもつことができたものであつたが——負荷することができるほどに強力な一



個の人物であった。

---

2 こうした事態を予見することができた——あるいはそれを望むを得た——イギリスやアメリカの政治家がいた、とは知覚することをなし得ないところである。前者の場合、イギリスをして屈辱的である上、その状況たるや嘗て是正するべく戦争に赴いた状況よりも更に悪く、また更に一層危険に満ちたものであるような状況に着地させることを望んできている可能性は到底あり得ない。後者の場合、アメリカの政治家達がスターリンに対して卑屈になるような位置に向けて自ら策略を図る (*manoeuvre themselves*) ことを望んできている、ことはありそうにない。というのは、アメリカに生まれた市民達の圧倒的大多数にとっては、クリスチャニティ・自由・民主主義、それに中産層に関する限りでは、繁栄 (*prosperity*) が無上のものであることを意味する、という事実政治家達は盲目ではあり得なかったからである。それ故に、ナショナル・インタレストの配慮とは全く離れても、あらゆるそうしたことを否定するような権力に対して資すようなことは——そのケースの真相が大衆の心情によって会得せられるや——たちどころに不人気となるであろうこと、更にこの心情がボルシェヴィキのプロパガンダの霧の中に出現してくるのが如何に遅いものであり得ようとも、この不人気は投票所での結果に影響することと結合させられてきているのだ、ということを知らない筈はないのである。私はロシアの軍事的成功を評価する立場にはないが、この政治的成功が途方もなく大きなものであったことだけは疑いようがない。

---

3 この業績は全面的に一個人のもつ超越的天分 (*the transcendent genius of one man*) に負う。学者ぶってみえるであろうことを弁明するようであるが、私は旅に出つつあるのである。何故にこの事実が我々の論証に関係するのかを明示的に示すという旅に。

(1) 歴史形成的諸要素 (*history-shaping factors*) の中で、人員の資質として述べられるのが最良であるような要素のもつ重要性を信じることは、本書の中に提示されてある根拠付け (*the reasoning*) の根底にある「歴史についての哲学または理論」の一部なのである。この要素は——諸々の出来事の歴史的継起についてのどんな説明の中でも果たされるその役割に対

して——必要な能力と頭脳の量をもった人口(a population of the requisite amount of ability and nerve)の存在に依存するだけでなく、それによって、ある与えられた社会構造が現存の(能力と頭脳の)量を社会的に重要な諸々の場に有効な供給に至らしめるところの選択の諸方法にも依存する。我々が一個人の内において、天分(genius)と呼ぶもののもつ問題は、そして諸々の出来事の歴史的継起の説明の中におけるその重要性についての問題は、一般的な質の問題の中の一つの特殊なケースでしかない。それだけに、だから、私はスターリンの個人的業績を単に先行の分析を補完せんがためだけのものとして主張するものである。

(2) そうした業績は民主主義の下ではあり得ないということを注意しておくことが重要である。その故は、民主主義的なシステムは、どんな個人に対しても、彼に有権者のもつ当面の諸情緒、諸偏見、諸スローガンに顧慮を払うことなしに行動できるような位置を得さしめるようなことを不可能とさせるからだけではないのであり、要求されているそのタイプの人物は自由選挙で勝つことがありそうにないからである。成就の為には多くの年月を要するような、込み入ったゲームを演じることの不可能性は、それ故に、民主主義政府のもつ諸々のコストの同類の中に数え上げられなければならない。民主主義は秘密外交の込み入ったゲームを許容するではないか、という反論には、然るべき状況下では選択は込み入ったゲームと失敗の間にあるということが回答なのである。しかしながら、この反論は、もし、それが孤立主義者(an isolationist)によって申し立てられたものなれば正しい。というのは孤立主義(Isolationism)こそが、そうした諸状況を回避する唯一の方法なのであるから。このことは我々の民主主義分析を補完するものである。

(3) 最後に、ロシアの政治的成功は一人の人物の仕事である、という命題は将来の発展についての予見と関連している。とりわけ、その受入れが——ロシアの勢力の際限なき拡張を賞味してはいないいくらかの人々が隠し持っているように見える——愛すべき楽観主義に賛成して、私が洞察することができる唯一の合理的基礎を提供するものである。

---

4 ロシアの国内的な位置は、戦前には完全に羨まれるものは何もない(thoroughly unenviable)という状態であった。諸々の飢饉がほんの数年を遡るだけで存在した。奴隷化され、しかも苦吟させられている大衆は——あらゆる強圧にも拘わらず——体制に対する一つの危険を構成するだけ

のものであった。党内における不一致は、示威やエジョフの恐怖の治世 (Yezhov's reign of terror) によって抑圧されるのに困難を伴うものであった。軍隊の反乱は絶え間なく起こり得た、といった如くである。しかし、ロシアの対外的位置となると、拡張が問題である限り、尚一層に非妥協でありつつあった——そして拡張の企図については、スターリン体制はもっとも間違いのない証拠を与えてきた(シナとフィンランド)。ドイツと日本が効果的にその道を封鎖したのであるが、尚且つ、「ブルジョワ的」列強 (“bourgeois” powers) がロシアの援助に赴くことが、そもそもあり得るだろうなどということは——この場合、想像上のことではあるが——どんな正常な政治家達や観察者達の思考をも超えたものであった。そして、そうであったとしても、ドイツとの協定に始まる長く、しかも、切れ目のなかった一連の絶妙な手腕 (master strokes) によって、このポジションは、實際上、挑戦し難い優越性をもった地位に転換された。その誰も挑戦し難い優越性たるや、今日では、質の点でスターリンに比肩できる力は合衆国を除けばないということ、更にこの(合衆国という)例外すらもが、多くの問題領域においては疑わしいものなのである。このポジションの確立は——より弱いプレイヤーが相手の場合——相手国の彼の仲間達が喜んで担おうとするものならばどんな諸条件のものであったとしても、その諸条件が民主主義レジームを台無しにするだけに止まらず、廃止に及ぶものであったとしても、受諾しなければならなくなるであろう諸状況をつくり出すことによって、その状況を反復してつくり出す諸々の出来事の道程の中において、もたらされたのである。諸小国を戦慄するべき運命から守るということに連想することができるような榮譽と利益 (honor and interest) をあらゆる動機として具備したものであったとしても、無条件降伏をした人達は無条件に降伏したのである。如何様に幸運 (luck) と優秀さ (merit) のもつれ合いがあるかを決して理解しようとしまいであろう人々は、このことの全てを、事態は正にその道を成し遂げたと告げることをもって幸運と満足そのものをもたらした諸手腕の連続 (a succession of strokes) として、解釈するかも知れない。しかし、政治的天分 (political genius) なるものは、正確に、「諸事態」を自分の諸目的のために作動させ、思いがけない幸運の殆どをつくり出し、そのようにして危険に満ちた転換を——その場限りの観察者 (the casual observer) が彼の視野からそれを見失ってしまうように——管理する、そうしたことを任せるといふことの内に存在するものなのである。

5 不安定性(instability)と威信(prestige)における途方もない増大を、このように経験したこのレジームの性質を今一度定義することは、余計なこととされるべきかもしれないが、不幸にしてそうではない。第1、生と死、戦争と平和、なされつつある全てのことが単一の人物の意志——本人はそれを主張することに細心の注意を払っている限りにおいて——に依存するという、即ち、このことは専制の正にその定義である、第2、単一の「政党」のみであり、厳しくその人物の下で規律されていることだけが許されている、即ち、これは民主主義の否定(the negation of democracy)である。第3、言論の自由がないこと、出版乃至は教育の自由のないこと、及び「法による正当な手続き」(“due process of law”)は専制体(autocrat)とは利害関係のない諸案件においてのみ存在する、即ち、このことは個人的自由の本質的要素の否定であることを物語っている。

(\*) 読者は、本書第IV部第XXII章に示された理論に従って、個人的自由と民主主義とは同じものではないということ、及び両者の関係は「政治的リーダーシップの為の自由競争」として含蓄されるものに限られるということ、を想起するであろう。実際、ある非民主主義的な形態の政府が、我々が個人的自由として了解しているものについての幅を、民主主義がなしているものよりも、更に広く認めていることはあり得るだろうことなのである。このことはテキストの中で自由と民主主義の間の区別を正当化するために繰り返し述べられているが、ここでも重要性について異論をもつものではない。しかしながら、単一政党システムがファシズムの一つの本質的特徴であることが追加されてあるべきである。

---

#### 火星人の見たヨーロッパ・アメリカのロシア問題

6 火星からの訪問者があったとし、その者は論理的なマインドを備えていて、如何にして諸事実を認知するか、その上で、それから合理的推論を引き出すかを心得ている、但し政治的心理学については全く不案内である、とする。その者をしてこの衛星に起こっている状況を見守らしめることにする。

彼が観察するであろうことは、あらゆる参加者達が——神と人々が嘗て作った——あらゆるルールを踏みじめるものであった戦争の結果として、

戦勝国が宣言した諸目的とは正確に反対であるような諸条件が行き渡っている、ということである。即ち、従前にあったよりも一層に多くの抑圧と少ない自由、一層に少ない安全と甚だしく多い無法が存在している、ということである。しかし、良心と名誉、それに——自らを防衛することができない人々を防衛するという——義務についてのあらゆる指示(*dictates*)を考慮から外して、我が訪問者が期待するであろうところは、明白な脅威の鞭の下での治療的行動(*remedial action under whip of an obvious threat*)である。彼はイギリスと合衆国に期待を寄せるであろう。この両国は仕事の半分だけがなされただけであると感じている開化された人間存在の残余の部分(*the rest of civilized humanity*)によって支持されている——一つの半分の仕事は、このケースにあっては、何事もなかったよりももっと悪いのである、その理由は二つの軍事的独裁政権が利益において相克状態にあることは、それが単純に一つであるよりは危険の程度が少ないからである。そして他の半分の仕事をなすよう元気付ける為に、それはなされたと感じられた。更に彼はその期待が次のような事実によって裏付けられていると感じるであろう。即ち、スターリンは——自分に課している一貫性をもってこの状況を率直に受け止めており——非常に多くの語録の中で真正の平和は「資本主義が生き長らえている限り」不可能である(*a genuine peace is impossible "so long as capitalism survive"*)と宣言したのであり、新しい軍事拡張レースの中で良きスタートを切ってきた。しかし、他の側では？ 他の側においては、どこに目的、意志、勇気があるというのか？ 5年前には逃避主義だとわめき散らしていた人々と全く同じ人々が、逃避主義者達に転じ、しかも単純にこの不愉快な諸事実の存在を否定しているのである。侵略は宥和によっては防止され得ない(*Aggression cannot be met by appeasement.*)と説教してきた正にその同一人物が、宥和論者に転じ、しかもスペインとシナをロシアの希望に一致させるようにいじめることに、全て賛成しているのである。しかし、この状況がもたらすものが何であろうと、これを説明することはともかく困難という訳ではない。これを行う為我々は三つの典型的なケースを手短に論じようと思う。

第1、ヨーロッパ大陸では——スペインについては、今のところ例外として——ロシアの侵略に抵抗する何等かの政治的に有効な意志といったものは存在していないし、且つまた存在し得ない、と言える。部分的にはこのことを危惧するせいであることは疑いない。その危惧は苦悩の諸々の叫びを窒息させる程に強いのである。しかし、危惧がその全てではない。

ロシアの諸々の政治的守備隊がある。即ち、各国の共産党である。簡略化のために我々はフランスに眼を限定することにする。フランス国民が喜びと感謝の伝達の中で自分達の解放を万歳したのであろう、更に新生の自由な祖国フランスを創出するという魅力ある仕事にフランス国民は熱心に取り組むことであろう、ということを感じた幾ばくかのアメリカ人はいた。しかし、はっきりと次のように展望することの方が一層に納得し得るものであった。即ち、我々が実際に見出したものは、正確に言えば、挫折させられた精神、国民的敗北の意識、あらゆる面で、従って戦前のデモクラシーに対しても、悔恨に崩れ去った一つの世界(*une monde s'écroule resentments*)という気分、レオン・ブルーム(*Leon Blum*)が遠回しに病後の疲れ(*convalescence fatiguée*)と述べたような種の不快感である。そこでは数的勢力ではほぼ等しい3つの政党があり、それぞれ等しく単独でも連立でも効果的な政府をつくることができない状態にあった。MRP(共和人民運動・カトリック・ドゴール党)、社会党、共産党。それらの全ては、夥しい数のグループ、更にはサブグループ——同じ言葉によっては、少なくとも社会主義と革命という言葉については、同じ事柄を決して意味させてはいないような状態にあった——よって支持され、また結び付けられていたのである。我々の目的からすると、次の3点が興味を惹く。その1、「自由主義」グループ(急進社会党、旧「左翼」にあって最も影響力のあったグループを含む)の完全な消滅。その2、アメリカの政治家が心から協力できるような何等かの重要性をもったグループの欠如。その3、これが最も重要なのだが、共産党の強大性。誰がみてもはっきりしているのは、この共産党の強大性は生活のあらゆる部分を網羅して、かくも多くのフランス人達が共産主義の諸原則に宗旨替えをなした、ということでは説明されることができないということである。彼等の多くは教義上の意味では全く共産主義者とはなり得ない存在であり——実際、共産党は銀行と炭鉱の社会化には反対投票を行っている——、あるいはその場限りでの共産主義者(*communists ad hoc*)、即ち、彼等のもつ国の状況についての諸見解の所以で共産主義者となっているのである。しかし、そうしたことは彼等が単純に親ロシア(*pro-Russian*)であることを意味する。こうして彼等は将来の紛争にあたってはロシア側に組し、合衆国とイギリスには対立する、ということの意味する。 \* 彼等は・・・

\* 偉大なる事実(*das grosze Faktum*)、偉大なる希望(*die grosze Hoffnung*)——どんなより良き条件も問題にされる必要はない。・・・世界革命、この意義(重要性)をもつ。・・・

ヒットラーの軍隊なしには革命はあり得なかった(No revolution ever ohne Hitler Truppen)。・・・イデオロギーの優越を除いては与えるものが何もない、ドルによって生活にはり付けられたアメリカ民主主義の野心があったとしても。・・・その場合、労働運動に縦横の交錯があることが必要、そしてアメリカの労働者によって反撃されることが。・・・ヨーロッパの革命、但しその場合、アジアや合衆国でも。・・・世界革命は、だが、視野には存在していない。・・・爆弾もドルもその全てではない。

第2、イギリスの態度は火星からのわが来訪者の期待を実証するのに最も近いところにあった。・・・

イギリスにおいてもスターリニストは、幾ばくかは存在し、しかも宥和(appeasement)を弁護する者も多い。しかし、有権者が共産主義を支援することは殆ど完全にと行ってよい程に無いので、政府乃至は労働党が共産主義者と和解するようなどんな動機ももつことはないし、共同戦線をつくるなどはもとよりあり得ない。この問題における彼等の立場と感情は疑問の余地が殆どない。そこにはロシア問題に由来して、共産党とは決別し、そして——自分達の諸目的の達成のためにロシアの支援を渴望するようにはみえない——イギリス的共産主義者さえいるのである。保守党と群小政党的の殆どのメンバーは、これまた、政府が強いラインの行動をとることに支持を与えるであろうから、イギリス政府は——このケースでは——一つの連合諸国を実際に指導することになるであろう。事実において、もしこのことがそうでないならば、それは奇妙なことであるだろう(it would be strange)。というのは、アメリカの楽観主義者達に対して——彼等がスターリンに心に抱くことを望むものである——基本的には平和主義的な意図という主題になされるであろうあらゆる回答の中で最も明白なものは、スターリンの意図が何であろうと、大英帝国に対立するロシアのもつ客観的状況こそが和解し得ざる状況なのだ、ということなのだからである。読者がこのことについて自分で了解せんがために為されなければならない全てのことは、戦闘配置を自分の心の眼に浮かべてみることなのである。

\*

\* 民主主義的状況が問題とされるものである限り、もしロシア的世界に対立する強力な戦線が採られることが決定されるならば、このことは自明のことではないが、はっきりそのようだと主張しておくのが安全である。完全な断念(complete resignation)・・・比較は論争点で相対化させられる、ということ。・・・それ自身が地下運動であることを妨げない。ヨー

ロップ問題は、NAP がそれを覆っているものよりもずっと大である、ということから眼をそらす。・・・

それにも拘わらず、火星からの来訪者に衝撃を与えかねないような、弱いだけでなく非合理であり、しかも外観では正反対のものであるような態度を理解することに困難はない。強力で合理的な戦線を採用することは、イギリスがこれまで決して採らなかったような戦慄すべき危険を伴うものであるだろう。1688-1714年と1798-1815年の期間を通して、諸々の連携(coalitions)が突入のなされたより以前から有効なものであり、しかもあらゆる正常な諸標準からみても、これらの諸連携は実際に実行されたものよりも一層適切であったとさえみられていた筈である。ある偉大なる人物の言を盗用するならば、我々の歴史についての理解はその事件についての我々の知識によってスポイルさせられるという。しかし、もし我々が自らを例えば1793年の視点に位置させるならば、そして我々が事情に良く通じたどんな観察者もが見出したに違いないような様々なチャンスについて調査することを試みるならば、我々は革命的フランスに反対する初期の成功が正に裏切りの事柄であるかのようにみえるに違いない、ということに同意せざるを得ないのである。実際上の確からしきがある。

次の比較されてよいケースは、似たものであった。1914年8月になされたどんな資源調査もが、その時点で合衆国に期待されたであろうことは全く関わりなく、最も勇気づけられる結果をもたらしていた筈である。1938年においてさえ、イギリスは孤立していたのではなかった。実際に、我々がスターリンとヒットラーの密約の真の意味の正確な評価を——少なくとも可能性としてでも——考慮に入れるならば、更にドイツの戦争エンジンの能率に関する諸々の疑問——疑問がその事件前にもたれていたとしても完全に正当化されてしかるべきであるのだが——を考慮に入れられていたならば、このケース(密約 entente)は充分にあらゆることの中の最も安全なことと考慮されてよかつたのである。

今ではどんな有意な支持も大陸ヨーロッパからは期待することはできない、ということが明らかである。成功についてのあらゆる望みは——そして成功に対する二者択一(the alternative to success)はイギリスの目的なのであるが——それ故に合衆国からの支援に向けられる。つまり、今一つの長く、コストのかかる、困難な戦争に入るための準備が整えられてい



る合衆国に向けられる。ところがこれは当面のケースではない。私は何も、もし最悪が最悪に至るならば、その合衆国はイギリスをしてその運命に突き放すであろう、と言い張ることを意味させようとするものではない。反対に私は、合衆国が早々とロシア—イギリス戦争(Russo—English war)に引き込まれるであろうことは、ありそうなことだと信じている。但しこのことは確かではないこと、及びワシントンはしばらくの間はこうした不測の事態を回避しようとしぎりぎりまで努力するであろうということ、あるいは同じことであるが、ワシントンは第二次世界大戦に採ったものとは正反対のコースを採りつつあるのだということ、を私は敢えて主張しておく。火星からの来訪者が理解に苦しむであろうことは、このことである。というのは、以前に採られたコースについての動機付けの中で、終始一貫して申し出されてきた一つの理由を除いて、あらゆる諸理由が現在のケースには追加的作用力をもって適用されるものだからである。

第3、この国(合衆国)の現在の行動を——国際的諸事情(affairs)に関するものとして——形作っている状況——は3つのセンテンスに要約されることができよう。即ち、国民が疲れている、物理的攻撃という直接の危険はない、対外政策は国内政策である、ということ、これである。国民は疲れている。即ち、巨大な、しかも血なまぐさいゲームに倦んでいる。戦争の諸々のプロパガンダと戦争諸活動、それに戦時規制(war regulation)と戦時課税(war taxes)と戦時官僚制(war bureaucracies)にも。国民は、全てのこうしたことが取り除かれることを望んでおり、更に通常の職業と娯楽、それに慣れ親しんだ生活の日常過程に腰を据えることを望んでいる。流血と破壊にはうんざりしている。民主主義形態の政府が何等かの意味での真正の「人民の意志」との諸政策の一致を保証するものではない、ということをお我々は知っている(第IV部を見よ)。しかし、そのように行きわたっている風潮(mood)はどんな形態の政府の下においても、——完全に規律化された指導階級(classe dirigeante)の諸法によって統治されているところのスターリニストまたはファシストタイプの専制でさえなければ——例えそれが専制のものであっても、行われる自己主張と結合させられているのである。\*

\* ツァー達の官僚制的専制が原則として国民の諸風潮に対し聞く耳をもたないとするものではなかった、ということを示さんが為の歴史的事例は容易に引き出されよう。このためには、他の二つの条件——それは専制それ自体の中には含意されていない——が充たされるものでなければ

ならない。指導者がピョートル大帝とかエカテリーナⅡ世とかにみられるように異常に強い個性の持ち主でなければならないこと。それに現代的諸条件の下では、専制者は——婉曲に(euphemistically)単一政党(the single party)と言いまわされているような——そうした統治の装置をもつものでもなければならないこと。即ち、これである。官僚制と警察、それは必要ではあるが、十分な装置ではない。

この国に物理的攻撃の直接の危険はない。こうしたことがあってか、人々は——狼だ、狼だと叫ぶことがあまりにも多くなされてきたためか——それを信じることを拒否するであろう。人々は彼等に訴えるであろう救済策を信じたとしても、それらは信心深い願望(the pious hope)の中に生じた更なる宥和 appeasement)であるだろう。その願望は、一つや二つの小国をスターリンに放棄することで、然るべき時迄——今にも起こりそうな民主主義化がロシアをして平和愛好国に転じさせるであろう時迄——スターリンを満足させるだろう、というものである。この救済策が、チンギスハーンに——彼が今生きていて、然るべき地位をその新しい共和国の中のスタッフに宛がうことを期待する——それ程に理のあることだと納得するように反応する人ならば誰であっても、その人物は反動的な人物(a reactionary)か、あるいは言うならば、ファシストである。それが意志を支配する風潮なのであり、それが理性を支配すると共に——理性を台無しにしてしまう——ところの意志なのである。

このことは、私は信じるものであるが、農業者達、労働者達、それに小規模事業家達の多数派の諸態度を適切に説明するものである。この他の一つの少数派が共産主義者であり、スターリニストとなると更に少ないし、更に彼等にとってロシアは大きな意味をもっておらず、その傍らで今一度の戦争に対する嫌悪がある。このようにして、彼等は——例えその意図がなかったとしても——親露(pro-Russian)である。労働指導者達の態度は彼等の戦術上の事情(tactical situation)によって説明される。知識人達の声の大きな部分もまた——知識人達の驚くべき数が結果におけると同様に意図においても親ソヴィエトであるのだが——ロシアの利益になるように事を運ぼうとする位置をとることとなる。もしある国が——他の国よりも一層に——解放の必要におかれているとすれば、その国はロシアである、といった意見に賛成するという明白なケースは決して支持されない。しかし、それよりも遥かに関心を惹く現象は個々に事業を行っているブルジョワジー上層の態度である。この態度が政治的に重要だというのではな

い。小規模事業家達や農業者達によって支持されない時にはいつでも、この完全の無力性は——彼等の防禦能力の無さからして——明白なのである。あらゆる大物達(all the greats)は、我々にとって、この態度の徴候的価値(the symptomatic value)である。彼等の内、多数派部分が控え目にみても宥和に断固賛成なのである。このことが彼等に対して意味するところのものを誰かが指摘するような場合には、彼等はすぐさま——自分が罪を犯しているかのように——沈黙の中へ、あるいは前述の信心深い避難場所の中へ、退却してしまうのである。僅かの例外を伴うものではあるが、大企業は戦争のもたらす経済的並びに社会的帰結に対し、自らを祝福するような根拠を殆どもたない。

そして、対外政策は国内政治だということである。——分析の原理は省略——ある範囲までは、それはどの場合においてもそうである。だが私はそれ以上の意味をもたせたい。我々の当面の目的にとっては、一国の対外政策というフレーズは外国での諸事件と諸国民に向けられた諸政府の慣行的態度(habitual attitude of its government)を呈示するものであり、その態度は「諸原則」と一致させられ得るものであるとともに、大部分は——もとより全体としてではあるが——政党の諸路線(party lines)とは独立したものである。全ての大国と殆どの小国において極めてはっきりと際立っているこの慣行的態度は、二つの要因の所産である。即ち、第一にその国々の地理的、経済的、及びその他の諸慣行についての比較的恒久的な諸要素、第二により良き表現を求めるならば国民性と呼ばれなければならないものの比較的恒久的な要素。それは時代と共に変化はする——主として制度的諸関係のパターンにおける変化と社会的諸構造の変化に対応した結果である。何等かの与えられた時代にあつて、それは正にはっきりとした事実上の強制作用である。つまり、それから過度に逸脱することを試みる政治家は直ちに思い知らされることになる。二つの事柄、規律、即ち、必要性和伝統・・・深く根を下ろした必要性・・・それぞれ様々な諸目的に向けられた行動についての合理的把握からのものではないような反作用への確かな方向・・・得意の競技・・・労働に次ぐもの・・・多分次のように言うておくのがより良いであろう。我々は様々な方向で、その場合、合理的であるような政策に対しては個性的なものを何ももたらされないということ。我々が合理化を尚極めて控え目にしておく場合において、行動のはっきりした形態の事実が明らかになるということ。

それが特に甚だしかった合衆国では孤立主義として定式化され、——理

想的にその国の位置に適しており、そこから了解せられる——、そうした慣行的態度が採られている。外国における爆弾の数の増大や第一世市民の増大という重圧があり、その重圧の下で弱められてきてはいるが、それは生き延びており、現在中断されているとしても、やはり一個の政治的作用力なのである。しかし、現在の合衆国はそうした慣行的態度を復活するにはかけ離れた状態にある。あらゆる対外的な諸利益を主張する口実は失われつつあるのである。この地球の半分において自らの道を保ちつつ、しかも「アメリカ市民とアメリカ産商品がそうではないと識別されるような所はどこにもない」というところのリストを検証する、といったことを超えた指針は何もない。しかし、この帰結——即ち、そのように伝統が、そのように外交が——は未だ尚重要性をもつ。他のところではこの伝統によって統治されている市民は、意見を持つこともなく与えられた喧伝機構が吹き込むであろうものに、何であろうと乗ることになる。彼等は市民にある情緒(an emotion)——孤立主義を不毛とさせるだけの——を送り込むであろう。不正直に満ちたものを包攝し、しかもかくも容易にそれを開発するノウハウを持つグループにより取り込まれるような、そうした政治勢力はここにはない。(孤立主義を除き、国際連盟という不人気な標題を人気あらしめることに煩わされないよう要望する)・・・更に政治家はそれを知っているだけでなく、同じ穴に落ち込む位置にある。・・・OPA(連邦価格統制局)はポーランドとポズナニ市についてのどんな感情よりも更にずっと重要視される。・・・行動する準備を決定する場合の冷静な熟考の中で、整然としているといったもの(square u.s.w)は正確には何もない、という結果になる(今次の大戦における42年のルーズベルトの如く)。秘密外交への嫌悪がそれを一層に悪くする。・・・我々はそのことに先立ち、またそのため、ヤルタでなされたことを全く知らされていなかった——了解は驚くほど僅かだったというが、明らかなことは何もない。

更に諸々のスローガンが——誰かがそれをを用いる時——益々熱狂的に実感されることになる。自分は国内にいるのだから、自分は安全なのだから、と。・・・スターリンはそれを心得ていたが、ヒットラーはそうではなかった。・・・と言うのは、政治は仕事に次ぐ人気のある楽しみであり、そのようにして全てが諸計画と諸提言の材料となるのである。・・・自由に向けての爆撃、奴隷制への引き渡し。・・・つじつまの合わない諸目的と諸原則・・・そして我々はそれを見出す——スターリンが評価することを得た「つかの間の見せかけの成果」を。・・・政策に期待できるものがない。・・・行動に整合性がない。・・・どんなチャンスがこのいじくり廻

されている国にあるというのか。・・・決断は可能ではない——強力な性格の持ち主であるとか、策謀家でなければ。・・・このように政治家は自分の所属階級とだけに相談することが自由である、そしてこのことこそ、我々が観察しようとしていることなのである(ミュルダール(Myrdal))。・・・他方において、行動についての合理的に認知された諸ルールが欠けている。・・・途方もなく多くの諸目的が注意されることなく通過していく、そしてその傍ら些末なことが取り上げられている。・・・数ダースのことが認められる——誰も語ったり、行動したりしない。・・・プラウダ——不面目(contempt)・・・諸々の根拠がある。・・・一つのことが目立っている。・・・革命の可能性・・・「何かなされるべきか」(“What should be done?”)——言葉の特殊な意味(cant)についての諸君の考え方を明らかにせよ。・・・諸公準についての武装されたもの・・・委員会の諸スローガン・・・それを洗い流すことによって諸問題を説くことができる。・・・

今や火星からの観察者は——とりわけ彼が政治的活動なるものは諸事実の合理的把握とそれからの合理的推論の問題だという理論に耽っていたとすれば——、当然のことながら、非ロシア的世界の全体が、憤りと恐怖をもって衝撃を受けているだろうことを見出していると想定されるのである。